

雲のない雨空の下で

Under the rainy sky without a cloud

足音。

夕陽の街に、夜景の空に、足音が響く。

鼓動。呼吸。靴底の衝撃。銀杏の雨。

11月24日。雲のない青空の下。

私こと遠野有希は、自らの信念を曲げぬ
ままに現実から逃げた。

たったそれだけの事が、私と蒼腕の魔女を
引き合わせるなんて、思いもせずに。

逃げる。

そこにどんな意志が、正義が、結末が
あったとしても、私達のアクションは一つ。

逃げる。

ただそれだけの、他愛も無い物語。

卑怯で、皮肉的で、
それでもどこか、ひたむきな物語。

女子高生と現代の魔女の、物語。

雲のない雨空の下で

吉村麻之 + 今野隼史

雲のない雨空の下で

吉村麻之 + 今野隼史

2006.8 Mayuki Yoshimura <http://mukiryokukan.sakura.ne.jp/>
むきりよくかん。

Takashi Konno <http://www2.chokai.ne.jp/~frontier/>

Under the rainy sky without a cloud

白雲集 + 秋田県



よしむら まゆき

吉村 麻之

1982年生まれ。横浜在住の茨城育ち。
システムエンジニア2年生として
過酷な業務に追われながらも、
日々の製作にも勤しんでしまい、
枕を鼻血色に染めている。

可愛い嫁と
犬が欲しいと思い始める今日この頃。

〔吉村麻之作品集〕

星のない空の下で
雨のあと、晴れの前。
ごがつのそら。 / はちがつのゆき。
こばととすばる
雲のない雨空の下で

こんの たかし
イラスト 今野隼史

1981年生まれ。秋田県在住。
イラストレーターと自称するものの、
一人で手掛ける作品は
メイドさんマンガやら大根RPGやら。
節操のない創作には定評がある(かも)。
いえいえ、ちゃんと挿絵も描いてます。



このアニメには
暴力シーンや
グロテスクな表現が
含まれています。

デッドリーエンジェルまぢかる☆ゆきちゃん ①

吉村麻之・今野隼史



「あああ…ローンがまだ20年残ってるのに…」
「てへっ☆」
瓦礫と化した一般住宅。そんな尊い正義の犠牲も可愛さで全部カバー♪
それが、悪の軍団ニョッカーから世界を守る魔法美少女まぢかる☆ゆきちゃん！
今日も必殺の“まぢかるどろっがきっく”は敵に当たらず、そのまま一般家屋へ大炸裂だっ☆

「お、おい魔法少女！ 流石にそれはやりす」
がすっ。

「貴様様の永眠に感謝しちゃいます」

頭蓋が砕ける音。倒れるニョッカー。
私が隙を作れば、まぢかる☆たなちゃんのまぢかる直刀が一撃撲殺☆
小さなお子様には“ほんのちょっぴり”酷な血塗れ画像だけど笑顔で無修正放映！
今日もPTAからの抗議電話がオフィスに殺伐と鳴り響く！

次々と現れる謎の怪人、ニョッカー。
果たして私達は世界に平和を取り戻せるのか！？

頑張れゆきちゃん！ 負けるなゆきちゃん！
『まぢかるゆきちゃんに家を破壊された人を励ます会』の会員は一万人に近づいているぞ！

貴方のハートにトラウマを強制プラグイン♪
『デッドリーエンジェル まぢかる☆ゆきちゃん』は、
73チャンネル
月曜19時から大絶賛放送中！

来週も再来週も絶対見てね！
見なかったら君の三親等以内の
誰かの鎖骨がブチ骨折っ♪

Under the rainy sky without a cloud
2006.8 Yoshimura Mayuki + Takashi Konno



防げない。
触れられない。
抗えない。
逃げられない。

コールネーム、蒼腕の魔女。
その手が為すのは、
圧倒的武力による殲滅。強圧的撤退。

「 貴方の決断に感謝します 」

私は立ち向かう。有希の為に、逃げる為に。伊勢崎多奈は、そういう信念で動いている。

雲 の な い 雨 空 の 下 で
U n d e r t h e r a i n y s k y w i t h o u t a c l o u d

遠野有希三大行動原則

1. 自分の正義を貫く事。
2. 人生に妥協しない事。
3. 常に胸を張って歩く事。

「逃げるよ！」

私は逃げる。私の為に、正義の為に。遠野有希は、そういう信念で出来ている。

そして神は貴方に言った

「このパンが欲しければ、手遅れから逃げることだ」

Pe'z 『Amny』



雲のない雨空の下で

Under the rainy sky without a cloud



CONTENTS

- 6 FirstSteps, Falling.
- 16 Escape 1. 渡瀬町東商店街撤退戦
- 66 Escape 2. 千年谷市上空六百フィート空撃戦
- 114 Escape 3. 伊勢崎多奈による謙虚で律儀な情報戦
- 168 Escape 4. 新4号国道追討戦
- 212 Escape 5. 遠野有希による我儘で身勝手な戦争
- 280 Escape 6. 遠野有希三大行動原則 その4
- 302 LastSteps, Sounding.
- 308 あとがき



First Steps, Falling.

追われている。だから、逃げている。

状況はどこまでもシンプルで、行動はどこまでも緊迫していた。

三階層程度の中規模小売店が立ち並ぶ、中途半端な日本の市街地が窓越しに流れていく。街路樹として等間隔に植えられたイチヨウは鮮やかな黄色に染まり、晩秋の青空に綺麗なコントラストを描いていた。

千年谷市を縦断する国道4号線。時速70キロで黒のセダンが走る。

バックミラーを見れば、空色のワゴンが後方50メートルの距離を保ったまま、同じ速度で追走しているのが見える。この状況が既に40分も続いていた。

「逃げる以外の対処は無いんですか!？」

助手席の少女は、自分の声に焦りが籠っていた事を少しだけ後悔した。

焦らせた所で状況の打開に繋がらない事は理解していたつもりだった。

発言を恥じるようにストレートの長い黒髪を僅かに揺らし、バックミラーに注意を戻す。黒の双眸は鏡越しのワゴンカーを睨むように凝視し続ける。

髪と同じくらいに黒いミディドレスとショートボレロを纏った姿は、人によつてはピアノ

コンサート用の衣装に見えるだろうし、少々奇抜なカジジュアルファッションに見えなくもない。膝までを覆う黒のブーツには、大仰なベルトと金具が数本巻かれている。デザインよりも走りやすさを重視した物だが、彼女はそれが気に入っていた。

黒で包んだその姿を「西洋童話の魔女みたい」と言われた事もあったが、言いえて妙だなと思ったのを僅かに思い出す。

路上停車中の車の脇をすり抜け、車内には右向きの遠心力が発生する。

フロントガラスにイチヨウの葉がぶつかり、後方へと流れる。

車内には、少女の他に3名の男がそれぞれ周囲に注意を向けていた。

年は二十台後半のように見えるが、一人だけ十八歳の少年がいることを彼女は知っているし、全員の名前も食べ物の好みも知っていた。

ビジネススーツに身を包んだ姿は一般的なサラリーマンにしか見えない。差異は、名刺の代わりに小型のゴム弾銃が内ポケットに忍ばされている事だけだった。

車内には張り詰めたような緊迫感が漂っている。鳴り続けるFMのラジオからは流行のナンバーが流れていたが、気に留める余裕は誰にも無い。

「多奈^{たな}。今は逃げるしかないんだ。…いや、違う。逃げるっていうのは最良の選択肢だ。俺らは逃げれるんだ」

運転手は半ば自分に言い聞かせるように言った。

エンジンの駆動音が響き、速度メーターは80キロを超え、90に近づいていく。

多奈と呼ばれた少女はその男の顔を覗く。

スーツの上に黒いコートを着込み、シヨートレイヤーの黒髪がエアコンの風と車内の振動で僅かに揺れている。七歳離れた兄の表情には若干の焦りが、前方を見つめる瞳には決意の意思が浮かんでいた。

妹の焦った視線を感じ、僅かに口元を緩ませながら言葉を続ける。視点は確実に前方から離さぬままに。

「確かに、多奈ならば後ろの車を数秒でスクラップにすることも出来るかもしれない。…けれども、逃げる。俺らが無事で、あいづらも無事。これがベストなんだ」

頷く。少女にとつてそれは納得のいく説明ではなかったが、だからと言って反抗するつもりも一切無い。彼女がしたことは、色白の手でシートベルトを強く握っただけだった。

バックミラーには相変わらず、同じ距離を保ち続ける一台のワゴンが見える。焦らしているのか、あるいは追跡に気づかれていないかと思ひ込んでいるのかは分からない。

どちらにしろ、目的地を明かす必要は無い。

情報を漏らさず、衝突をせず、それでいながら目的を果たさねばならない。

多奈と呼ばれた黒服の少女は左手で右腕を強く握る。

それが不安な時の癖だと言うことは、彼女自身気づいてはいなかった。

そこに在る、状況を力づくで打開出来る存在を感じるため、あるいは自分自身を感じるため、彼女は左手で右腕を強く握っている。

少女らしい細い右腕。使つてはいけないと厳命されている存在が、そこに在る。

「追跡車を撒くぞ！ 適当に掴まつてろ！」

脇道に左折したのは、殆ど言葉と同時だった。タイヤからは高音の悲鳴が上がり、後輪は運動エネルギーを殺しきれずにスライドする。

車内には強烈な慣性が発生し、少女の頭は運転手の兄の肩に思いつきりぶつかった。長い髪が一本、サイドブレーキに絡まって僅かな痛みを生む。

ギリギリで二車線を維持出来る様な細い住宅街路を、速度は80キロのままに走り抜ける。一軒一軒の表札を確認する事も出来ないスピードは、道端の歩行者からの奇異の視線も高速で振り払っていく。

「通行人がいまませんように！」

無茶苦茶な祈りの言葉と共に、車は停止線で止まることなく右折した。後部座席から小さな呻き声が聞こえ、静寂の流れる平和な住宅街にはタイヤの悲鳴が響き渡った。

祈りが通じたのかは定かではないが、右折後の街路には人影も見えない。カーブで殺されたスピードを蘇生させるように、エンジンの駆動音が鈍く響く。速度メーターは80に近づいていく。

乗員には落葉を終えた街路樹を見る暇も無い。後輪に巻き上げられた枯葉が空に舞う。「願わくは、次も、その次も、通行人がいまませんように！」

強烈な慣性を生み出しながら車が左折する。道幅は車が一台通過出来る程度。突き抜け、右折する。エンジンを唸らせ、すぐさま左折。上下左右に車はバウンドする。進行方向が変わる度、乗員達の体は揺れに揺れた。

11月24日。雲のない、平和な青空の下。陽光は眩しくて、温もりは淡かった。伊勢崎多奈はフロントガラス越しの空を見上げる。慣性に従うままに揺れる頭の中で、あと数十分後には平和で穏やかな日常へ戻っていく事を強く信じ、願っていた。

* * * *

何度頭が揺れたかは数えていなかった。

バックミラーに追跡していたワゴンが映っていない事を再度確認する。

胸に食い込んだシートベルトを緩めながら、多奈は運転手に告げた。

「兄さん。とりあえずは退けたようです」
わたらせ

渡瀬ニュータウンと書かれた看板を確認し、先程まで駆け抜けていた真新しい住宅街の名前を知る。

眼前には一直線に伸びる車道。道幅が広くなったと同時に速度は上がっていく。車内には安堵の雰囲気 flowed。張り詰めていた緊張感が和らぎ、多奈は僅かな疲労を感じ

じた。額にうつすらと滲んでいた汗を拭う。

後は大通りに出て、目的地に向けて走ればいい。頭の中には寝るか起きてるかの選択肢が浮かんできた。

運転手はいつの間にか取り出していた眠気覚ましのガムを噛んでいる。

視線は車道に固定したまま、右手でハンドルを握り、左手でCDラックを漁っていた。恐らくは兄好みのハードロック歌手のCDを探しているのだろう。

寝る事を選択し、瞼を閉じようとした、その瞬間。

「…あ…っ!？」

『飛び出し注意』と書かれた看板の裏から、人影が現れる。

反射的に踏まれたブレーキペダル。先程よりも甲高い声でタイヤが悲鳴を上げる。

進行方向に立ちすくむ人影が多奈と同年代程度の少女と気づいたと同時に、殺しきれない速度がその少女に衝突することに気づく。

呼吸も出来ない一瞬の中、その少女と目が合う。

丸く開いた目からは驚きだけが映っていた。

間に合わない。重たい鉄が彼女を破壊する。

誰もがそう思った。そして、誰もが願わなかった。

だから、伊勢崎多奈は選択する。

「…上につっ！」

ばんっ！

その右手で、ダッシュボードを思いっきり叩く。

瞬間。

慣性は変わらない。しかしながら、次の衝撃音は聞こえない。ただ単に道を歩いていたらという理由で命を落とさねばならなかった少女の衝突音は聞こえない。

慣性は変わらない。速度も変わらない。

ただ、フロントガラス越しの景色だけが変わっていた。

一面の青空。“何の隔たりの無い”、一面の青が広がっていた。

地上10メートル。瞬間的に進行方向を上に変えた車は、まるでイルカのジャンプのようなシルエットで、原色の青空へと跳ね上がっていた。

11月24日。雲のない、平和な青空の下。陽光は眩しくて、温もりは淡かった。

伊勢崎多奈はフロントガラス越しの空を見上げる。重力加速度に従って落下を始めた車内から、あと数十分後には平和で穏やかな日常へ戻っていく事を強く願い、同時に諦めた。

これは、夜と、血液と、足音の物語だ。
もしかしたら、ひたすら逃げ続けるだけの話かもしれないし、
少しだけ皮肉的な、ありふれた話なのかもしれない。

これは、夜と、血液と、足音の物語だ。

そして、きっと。正義の物語でもある。



渡瀬町東商店街撤退戦

Escape 1.

1.

「ああーっ！ 嫌になるー！ 毎日毎日勉強勉強勉強勉強ーって！ まったく、何が楽しくてこんな事するんだかつ！」

『：大学に入るため』

「んなことはわかってるっつのー！ …くうっ！ 折角の：折角の青春時代なのにー！ 青春かむばーっく！」

悲しさと悔しさと、その二十倍くらいの八つ当たりは携帯電話を握る力へと変換される。残念な事に、か弱い女子高生である私では、直方体の移動機器を破壊できそうに無かった。落書きまみれのノートと折り癖のついていない参考書が置かれた机に足を投げ、椅子の背もたれに全力で自らの体重を預ける。

窓の先には11月の青空。差し込む柔らかな陽光。

イチョウの舞う街路樹を思い、絵筆を持ちたい気持ちが浮かんできくるのを必死に抑えた。電話越しの友人に何度も「女の子の部屋じゃない」と言われ続けている自分の部屋。

本棚の下段には、サバイバルブックの隣に編み物と料理の本が並んでいる。

上段には、化粧水とライフル弾の菓莢。

非常に残念ながら、このアンバランスさは友人からの理解と感動を得ていない。

部屋の隅に置かれた大きめのコンポからは80年代のジャズミュージックが流れていた。

そんな描写を置いていくように、幼馴染との電波を介した他愛も無い話は続く。

右手に握られた言葉だけを届ける機械が、私のオーバリアクションを相手に届けてくれないのが少し不満だった。

『何言ってるんだか……。もう高校3年生の秋だよ？ 青春時代はもう終わったようなものじゃない？』

「終わらせてたまるかーっ！ まだあたしは夕陽に向かって走ったり、日本全土を騒がせるようなこともしてないんだよ!!」

『しないでもいいわよそんなの……』

「くっ、老けた高校生め……」

断言する。人には情熱が必要だ。少なくとも、私こと遠野有希とおの ゆきにとつては人生の全てと言ってもいい。その上にロマンスや逆境や青春がトッピングされれば最高だ。

そのの為ならば、いかなる努力も苦労も惜しまない。むしろ、その努力と苦労こそが目当てなのかもしれない。手に入らないからこそ、人は必死に手を伸ばすのだ。

誰に語るわけではなく勝手に自分の中で盛り上がってみる。しかしながら、そんな熱いハートと裏腹に、目の前の参考書達は徒党を組んでクールな現状を伝えていた。

思わず溜息をこぼす。青春溢れる高校生活の最後のイベントが参考書とノートと友達になる事だなんて、何と悲しい結末なのだろう。

若干赤茶がかったショートボブの前髪を指で遊びながら、何の気なしに後ろを振り返れば、

買ったばかりのレディースストレッチコートがコートハンガーに掛かっているのが見える。一ヶ月前。探偵映画にどつぷりとハマってしまった結果であるが、一切後悔はしていない。福沢諭吉を数人犠牲にしてしまった事実には若干涙が流れたが、今となってはお気に入りの一着となつてゐる。

——このコートを着て、散歩でもしようかな。そういえば、そろそろイチヨウの見頃だつたつけ……。

窓の外に広がる、雲一つない快晴。

きつとイチヨウの彩りは綺麗に映るだろう。その絵を想像しては胸を高鳴らせる。自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

遠野有希三大行動原則を心の中で唱える。私はイチヨウが見たい。勉強もそれなりにやる。だから、どっちもやる。私は人生に妥協しない。

既に私の頭の中では周辺地図が展開していた。少し頬が緩む。

しかしながら、それも僅かな時間だ。散歩は一時間もせずに終わる。例えばイチヨウが散り終えても、参考書達は恋人のように私を待ってくれている。

数時間後には椅子に座り、彼らと熱い視線で見つめ合う事は避けられない。

——何かこう、物凄いハプニングでも起きちゃわないかなあ……。

右手に携帯電話を握りながら、立ち上がる。

——そう、例えば。

「くうっ、この胸を熱くたぎらせるような事起きないかなーっ！ 黒服のお兄さんに追いか
けられるとか！」

* * * * *

電話が終わって、コートを着込んで家の外へ出る。
木枯らしの吹く季節。

冷たく澄んだ空気を目一杯吸い込むと、体までもが澄み渡っていくような気がした。
チェックのミニスカートをなびかせ、ミリタリー風の編み上げロングブーツの足音を高ら
かに鳴らしながら、枯葉の舞う住宅路を歩いていく。

腕を上げて背筋を伸ばす。見上げた空は、原色の青をどこまでも広げていた。

遠野有希。千年谷高等学校三年C組31番。身長154センチ、体重…普通。
スリーサイズは未来への希望で一杯という意味で、発展途上国。
クラスの中では、明るくて騒がしい元気娘として大ブレイク中。

残念ながら、予知能力無し。

2.

キイイイイイーッ！

ゴムタイヤの悲鳴が、平和な住宅街に響き渡った。

遠野有希、17歳にて死す！

明日の新聞の見出しにはゴシックな太文字でそう書かれているに違いない。

年間交通事故者の数を考えても、私のような普通の女子高生ではそんな見出しも出来ない
と考える余裕は無かった。

いつもの街路。私の目の前には黒のセダン。精一杯にスピードを殺そうとするタイヤの悲
鳴。それでも殺しきれてないスピードが、恐らく私を殺す。

散歩に出て五分と経っていない。

鼻歌交じりのいい気分で少し歩いて、コンクリの塀が高くて見通しの悪い道を抜けたら、
こうなってしまった。

——ああっ！　せめて、もっと格好いい最後を迎えたかった！　あと、もう一度、駅前の
甘味屋であんみつが食べたい！

変わった娘だと人は私を言うが、流石に人生の最後までそんな事を考えると私自身も思
っていないかった。皆今までありがとう。私は変わった娘でした。

時間にして一秒も掛からないであろう瞬間。

最後を悟った意識が、時間を飴のように柔らかく引き伸ばしていく。瞼を大きく開くだけの瞬間。祈る時間も無い。覚悟を決める暇も無い。

シンプルな運動法則に従って迫る黒を見る。

数秒後か、あるいは病院に送られて数時間後か、どちらにしろ私を壊すであろう物を見る。フロントガラス越しには、私と同じくらい驚いた顔が並んでいた。助手席の女の子と目が合う。

——ごめんね！ あたし、君の人生を少しでも暗くしちゃうかもしれない！

私は、瞬間的に人を恨めないらしい。恨みよりも、同年代くらいの女の子に辛い思いをさせてしまう事が何だか非常に心残りだった。

しかしながら、そんな思考もすぐ終わるのだ。

後は、私の生命力と運を信じて、命と言う名のコインを賭けるだけ。

フロントバンパーと私の腰までの距離は数十センチまで切迫した。

この距離は次の瞬間、数メートルに変わるのだ。衝突で私が吹っ飛ぶ事で……！

……

……

無音。

「…あ、あれ…？」

私はもう既に死んで、一気に天国に行ってしまったのだと思ったが、そうではないらしい。

衝撃は無かった。それどころか、寸前まで迫った黒のセダンは一瞬にして消えていた。

——え……。もしかして、夢でも見てたつてオチ……？

一瞬にして気が抜け、思わずその場でべたんと座りこむ。硬く冷えたコンクリートはまるで氷のようだったが、そんなのを気にしている気分ではない。

「……はあ……。はあ……」

息を止めていた訳でもないのに呼吸が荒くなっていた。

鼓動が暴れるように脈打つ。今更になって冷や汗が出てくるのを感じる。

まるで、本当に今さっきまで生命の危機に遭遇していたかのように。

——こんな事があるなんて……。勉強のしすぎてやつですか……？

そんなに勉強して無いだろ。そんなツツコミを自分に出来るくらいには落ち着いているのだ。そんな馬鹿げた確認を取る。

——リアルな夢だったなあ……。

スリップするタイヤの高音が未だに耳に響いている。助手席の子の顔も未だにしつかりと憶えていた。全く知らない子だったけど、夢に出たということは何処かで会ったのだろう。息は未だに荒かったが、数秒間で気持ちは落ち着いた。顔を上げて、道路を見る。

「……え……？」

太い、二本の黒い線。そこには、はつきりとタイヤの轍が描かれていた。長く伸びたそれは、丁度私の所で途切れている。さっきの夢が現実に来きたかのように。

——偶然……？

確かに轍はある。しかしながら車は無い。考えれば当然の事だった。先程の夢が本当だったのならば、私はこうして五体満足でいられるわけが無い。

車は急には止まらない。ましてや、いきなり消えるなんて事は無いのだから。

冷静になればなるほど、周囲は真実を伝えている。さっきのは夢だったのだ。いきなり突っ込んできた車なんてものは無かったのだと。

そう思い始めると、命が助かった……という安堵よりも、騙された気分すら感じてしまう。よいしょ、と年寄り臭い声と共に立ち上がる。

その時。

突然、太陽の光が遮られる。下を見れば、私の周りにだけ丸く影が出来ていた。見上げる。

「……え、ええええーっ!？」

視界に映ったのは、青空、雲、小鳥。そして、車。

太陽の光を逆光にして、先程私に突撃してきた黒のセダンが、イルカのジャンプのようなシルエツトで上空に浮かんでいた。

今度こそ腰を抜かして座り込む。視線は空中の車に釘付けだった。

思わず口が開きっぱなしになっていたが、それを気にする余裕は無かった。

エンジン音が聞こえる。タイヤは高速で空回りをし続けている。空気は決してタイヤに運

動エネルギーを与えないのだ。事實は当たり前前の事だが、光景はひたすらに異常だった。

——な、何これ!? 何がどうすればこんな事が起きるっ!?

手品ショーを見ているような、あまりに現実離れた光景に思わず呼吸を忘れる。

ピアノ線か何かで車を吊っているのではないかと思ったが、上空には容赦なく一面の青空が広がるばかりだった。

木枯らしが吹いて、路面の枯葉が舞い上がる。髪が揺れて、コートがはためく。

異常な景色に反して、辺りは静寂に包まれていた。

——と：飛んだって事？ あたしの目の前で、真上に!?

考えて、考えるほどに自分の発想が馬鹿げている事を理解する。そんな事があるわけがない。私にぶつかる寸前で上空に吹っ飛ぶなんて事があるわけが無い。

頭の中に、物理の教科書に載っていた「垂直投げ上げ運動」の図が浮かんでいた。視界に映る事實は確かにあの軌道にそっくりなのだが、私の常識がそれを否定する。

一秒もせず、浮いているかと思われた車は少しずつ落下し始めた。

重力加速度に従って、異常な車が正常な落下軌道を描く。

疑問符が頭の中を埋め尽くしていく。しかしながら、そんな私など無視して車は落下を続ける。コンクリートの路面に激突するまで一秒も掛からないだろう。

——こ、コレってヤバイんじゃない!?

車は後部から落ちていく。

ぶつかれば、間違いなく後部座席は悲惨な状態になる事は確かだった。

私は車に関して詳しくなかったが、もしかしたら爆発するかもしれない。

爆発しないまでも、衝撃の際に破片が高速で吹っ飛んでくる事が無いとは言い切れない。思わず、飛んできたガラス片が腕に突き刺さるイメージを浮かべ、背筋に寒気を感じた。本能がアラートを鳴らす。

逃げなければならぬ。そう思っても、足はすぐみっぱなしで指一本動いてくれない。

——どっちにしても、間に合わない！
衝突する。そう思った瞬間。

くるり。

「……え……っ？」

一回転。まるで車輪が回るように、車が何の反動も無しに、物理法則を全力で無視しながら空中で綺麗に一回転を決めて、静かに着地した。

先程まで上空10メートルに吹っ飛んでいた車は、数秒後の事が全部嘘だったかのように、何の傷も、何の衝撃も無く、そこに在るのが当たり前のように私の目の前で止まっている。

——嘘だ……！ あたし、まだ夢見てる……！

それ以外に、この状況を説明する理由が考え付かない。

すごいスピードだったのに、目の前で真上に飛びました。くるっと一回転して華麗に着地

を決めました。…そんな乗用車があるかつ!?

状況だけがあまりに現実離れし過ぎている。鼓動が止まらない。呼吸が乱れっぱなしになっている。頭の中が真っ白になる。

——落ち着け! 遠野有希!

冷静になれ、冷静になれと、混乱した意識が無茶な命令を送る。

ミニスカートから露出した太ももがコンクリートの冷たさを伝える。目の前の車からはエンジン音と排気ガスの臭いがする。濃密過ぎるリアリティを私は感じ取れている。

——夢じゃない…! …ああもう! 容赦なく現実!

混乱する私を放置して、事態は私の混乱など一切感知せぬまま次々に進んでいく。「着地」した車からキーロックの解除音が聞こえ、運転席と左右の後部座席がほぼ同時に開いた。

中から現れたのは、サングラスをしたスーツの男が三人。後部座席から出てきた男二人は右手を内ポケットに入れ、私を警戒するような視線を送っている。

——何て分かりやすい悪人スタイル!

どこぞのエージェントのような風体の三人を、私は勝手に悪人と断定した。少なくとも、こんな住宅街でもサングラスで顔を隠す理由があるのだ。普通では無い事は確かだった。

平和ではのぼのとした住宅街。彼ら三人の格好はどこまでも浮いている。質の悪すぎるB級映画を見ている気分がした。

「…確実に見られましたよ。どうします?」

右後部座席から出てきた男が、運転席の男に問いかける。視線は私に固定したままだ。運転手の男は小さく舌打ちする。

「気は進まないが、このまま帰らせるわけにも行かない」

——無事に帰れると思うなよお嬢さん……

私の悪人ファイルを紹介して、相手の言葉は若干ニュアンスを変えた形で翻訳される。

——見られたからには死んでもらう！

勝手に次の言葉を連想する。次の瞬間には、男達の内ポケットに仕込まれた拳銃で撃ち殺される私が脳裏に映る。先程の何倍もの寒気が背中に走った。

——に、逃げなきゃ……！

足が震えているのが分かる。走って逃げるところか、立ち上がる事すら怪しい。

スーツの三人組は私を用心深く見ながら、何かを話し合っている。大して屈強とも言えないが、だからと言って女子高生一人では何の対抗も出来そうに無い。

いきなり後ろに走り抜ける。華麗な体術で男達をねじ伏せる。逃げる算段を必死に考え、現実的ではない事を確信し続ける。そもそも、状況からして現実的でない。

——それでも……それでも！

頭の中のレッドランプが爆音のように鳴り騒ぐ。

逃げなきゃ、逃げなきゃ。その単語だけが頭の中を飛び交う。

「……最低限、記憶は消さないとならないでしょうね」

左後部座席だった男の一言は、目の前が真つ暗になるかと思うような衝撃を生む。

「とりあえず、館長に指示を仰ごうと思う。この事態は、俺らで判断していい状況じゃない」
運転手の席の男はそう言つて携帯電話を取り出す。長身にショートレイヤーの黒髪をなびかせた涼しげな姿に、案外いい男でないかと思ひ、思っている余裕があるのかと自責する。他二人も、僅かに聞こえる通話音を聞き取るためか、男の携帯電話に視線を向けていた。

——今なら……！

岩でも担いでいるのかと思える程に、立ち上がるのは力を要した。足は恐怖で未だに震えている。若干の情けなさを感じたが、今はただ、走るだけの機能があればいい。

車の黒いボンネットが見える。フロントガラス越しの助手席には、綺麗な長い黒髪の女の子が驚いた顔で私を見つめていた。轢かれる瞬間のように目が合う。

——この子も被害者つて事……!?

胸が一気に熱くなる。何をされるか分からない恐怖は胸を潰しそうとしていたが、それ以上目の前の男達に怒りが沸いた。

怖かった。ただ、助手席のあの子もずっとこんな思いをしていたのだと思うと、男達を睨みつけずにはいられなかった。

——決めた。あの子を助ける。助けて、逃げる。あたしは、自分の正義を曲げない！

恐怖は怒りと信念に消えていた。今、一人で逃げる事は出来るかもしれない。

けれども、助手席の女の子を置いて逃げたら、私は一生後悔し続ける。

——自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

自分が遠野有希であるための三箇条を復唱する。混乱していた思考を、目的を達するため
の形に再構成していく。身体感覚がシャープになっていく。自分の目に意志の炎が灯ったの
を感じる。

携帯電話に注意を向けていた一人が、私に気づく。サングラス越しの視線を感じる。

——発ぐらいぶん殴ってやりたい所だけ……！

運が良かったのか、あるいは女子高生如きに逃げられないと考えていたのか。どちらにし
ろ、助手席までのルートに男達はいない。

たんっ。テニス部時代に培ったステップで、後方に一步。右に数歩。

すぐさま助手席のドアを思いっきり開ける。男は驚いた声を上げた。

助手席に礼儀正しく座っている黒いドレスの女の子は、驚きで一杯といった表情で私を見
つめている。

右手を伸ばした。

「逃げるよ！」

女の子は理解出来ないといった表情で私を見つめる。

無理も無いが、彼女の理解を待っている暇なんて無い。

「……あっ!？」

伸ばした右手で、その子の左腕を掴む。そのまま全力で引っ張り、無理矢理に車から引き

ずり出す。

助手席のドアを蹴り上げて、向かってくる男を牽制する。

——途中でコケてもいいからね！ 引き摺ってでも逃げるんだから！

足に力をこめて、一気に駆け出す。黒ドレスの子の左腕を思いつきり引つ張る。肩を脱臼させてしまうかもしれないと思う余裕は無い。

思考が吹っ飛んで、鼓動が爆発する。足だけが暴れるように動く。足が外れてしまうのではないかと思うくらいのスピードで、住宅路を一直線に走り抜ける。

逃げる私の脇を、空色のワゴンが通り抜けた事など気づけるはずが無かった。

「……はあつ、はあつ……！」

息が上がる。心臓が痛いくらいに暴れる。視界が光度を上げて、頭の中が真っ白になっていく。勝手に大地を蹴り上げる足が、前進のエネルギ―を生み出していく。

状況は意味不明。もしかしたら危険かもしれない。

そんな事を考えながらも、飛び跳ねたい気分だった。

自分の周りに、物凄い事が起き始めている。そして私が今、その舞台に立っている。そう思うだけで頬が緩んでしまうのを抑えられなかった。

——そう！ あたしはどこかで、映画の主人公になったみたいなの、こんな瞬間を待っていたっ！

いつもの平和な住宅街に二人の足音が響く。トレンチコートがマントのようにはためく。路上の枯葉が走り抜ける私達によって僅かに舞い上がった。

私がどんなに緊迫してしようと、退屈してしようと、晩秋の空はどこまでも青色を広げている。

揺れる視界で空を見上げながら、私は心に叫ぶ。

——ああ神様！ 願いを叶えて下さって有難う御座います！ …でも状況がバイオレンス過ぎです！ 後で三発殴らせろっ！

* * * * *

1キロは走ったかもしれない。もしかしたら数百メートルかもしれない。

感覚は曖昧なまま、爆発しそうな鼓動を鎮める為に私の足はやっと活動を停止した。

「…はあっ…。はあっ…」

乱れに乱れた呼吸。痙攣する足。

最近は受験勉強ばかりで、体を動かす機会が無かったし…そんな事を思う。

「…あ、あの…」

よく通る、高音で落ち着いた声。発したのは一緒に走り抜けた女の子だった。

私に握られっぱなしだった左腕を押さえながら、少し切れ長で伏せ気味の瞳を私に向けている。

改めて見れば、なかなかの美少女だった。

長い黒髪に黒のミディドレス。黒のショートボレロに黒のブーツと、とにかく黒一色の女の子。色白な肌が際立って目立つ。

身長は私と同じくらい。恐らくは年齢も同じくらいだと思う。ピアノのコンサートに行くような格好が様になっている。元氣印の私には確実に似合わない格好だろう。

「いやー、危なかったね！ 大丈夫？ 怪我は無い？」

「あ、はい。大丈夫です。と言うよりも、」

「あー！ 滅茶苦茶怖かったー！ いやもう、六回は死んだと思ったね、六回は！」

「そ、そうですか……」

「さあー、これからバシバシ逃げて、逃げて、逃げまくるぞー！ バイオレンス・エスケープ・アクションがこれから始まるのだよ！」

「は、はあ……」

女の子は不思議そうに私を見つめている。もう少し用心深くその子を見れば、あんなに走ったのに息を一つも切らしてない事に気づけたかもしれない。

残念な事に、私の盛り上がりつつしまったテンションは用心深さという単語から背を向けて驀進し続けていた。

「しかし、一体何だったんだか、あの連中。いきなり私を轢きそうになったら車はぶっ飛ばし、一回転して着地するし。しかもいきなり、『無事には帰さないぜ』って！」

「えーと……」

「特に運転手つばいのが一番悪者つばかったよねー。何ていうかさ、笑顔で人殴れるタイプだよ、アイツ」

「あ、あの、すいません……」

大人しいというよりも私のガトリングトークに圧倒されている黒服の子は、言葉の掃射の中で発言権を勝ち取った。

躊躇いがちに、一言。

「……その人、私の兄です」

土下座するのに一秒もかからなかった。

* * * * *

「しよぼーん……」

数分前に駆け抜けた住宅路を、今度は肩を落としてトボトボと歩いていく。

黒服の女の子は、伊勢崎多奈と言う名前だった。お決まり通りに「多奈」を「柵」と間違えたので漢字を書いてもらったりもした。

多奈は今さっきの一連の出来事を話す。

運転手は多奈のお兄さんで、後ろの座席は仕事場の後輩だという事。とある仕事があり、重要なものを運んでいたために急いでいた事。

そして、車が空を飛んだ際の記憶は無いという事。

多奈の説明は淡々と、どこか感情の籠っていない口調で伝えられる。

記憶を消す云々の言葉に関しては、答えないままに濁された。

——正直、嘘っぽいけど……。もう、どうでもいい事かなあ……。

真相がどうあれ、先程からの出来事は多奈をお兄さんに返す事で終了する。謝る言葉も複数考えておいた。

「しょぼーん……」

ケーキを目の前に出された後でお預けをくらったかのような気分だった。

もしかしたら、映画の主人公のような、ロマンスとバイオレンスの満ちた逃亡劇が始まるかもしれないと、そんな淡い期待は早々と碎かれてしまった。

これから待っているのは愛しい参考書達だ。私を強く抱きしめて放さない、熱烈でうんざりする時間が待っているのだ……。

多奈は不思議そうに私を見つめていた。

確かに、平和になった事で落ち込む人はそうそういないだろう。

汗が冷えてきたのか、手袋もしていない手に11月の寒さを感じる。

日は少しづつ傾き始めていた。二つの足音を響かせながら、角を曲がる。私が轢かれるかもしれないなかった場所には、先程のセダンが停まっていた。囲むようにスーツの男が三人。少し離れた所に空色のワゴンが一台。

「いやあー。先程は妹さんを誘拐してスイマセンでしたー」

必殺の笑顔に強烈な台詞を添えながら近づく。スーツの男を見る。途端に違和感が走った。――あれ？ 何か小太りなのが增えてるような…？

セダンの中で三人の男が寝ている…気を失っている事に気づいた次の瞬間、スーツの男達の視線は私から多奈へと移る。途端、周囲には緊張した空気が張り詰めた。

多奈の表情が一瞬にして険しいものへと変わる。

先程までの落ち着いた雰囲気は消え去り、まるで、親の仇と出会ったかのような…。さあーっ…。

波が引くような音を響かせて風が風ぐ。周囲から、風音以外の音が消える。

緊張が広がる。金属が弾ける瞬間のような、硬質の緊張が広がる。

スーツの男が驚きと若干の怯えの表情を浮かべ、口を開く。

「…蒼腕そうわんの魔女…！」

弾ける。

スーツの男の言葉と、私の左腕が多奈に思いつきり引つ張られるのは同時だった。女の力とは…いや、もはや人間の力とは思えないくらい力の力で引つ張られる。

足が地上から離れる。視界が一気に高速で動き出す。

——な、な、何!?

「逃げます!」

多奈の発言はシンブルだった。先程と全く逆のシチュエーションで、歩いてきた道を先程の倍のスピードで引つ張られて走っていく。

まるで、突っ走るバイクの後ろを掴んで走っているような感覚。

私は引つ張られるまま、トン、トーンと、まるでバレエのように飛びながら走る。

「こちらグループB! 魔女を確認! 繰り返し! 魔女を確認! 魔女は徒歩で逃亡中! 必ず拿捕せよ!」

張り裂けそうな大声で、誰かに指示を出す声が聞こえる。内容はさっぱりと分からない。

——魔女…?

多奈を見る。風を切り裂くように靡く黒髪。黒のドレスを始めとして黒一色の彼女は、確かに魔女という言葉は似合ってるかもしれない。

無茶苦茶なスピードで生まれた風が私の髪の毛を巻き上げる。トレンチコートは生き物のようにはためいた。

状況がひたすらに私だけを置いていく中、私はバイオレンス・エスケープ・アクションがこれから始まるのではないかと、ひたすらに目を輝かせていた。



3.

——妥協なのかもしれない。私は、思考する事から安易に逃げてるだけなのかもしれない。たんつ、たんつ、たんつ。足音が一定のリズムを刻む。

伊勢崎多奈は遠野有希の手を引きながら、短距離走のスピードのまま満開のイチヨウ並木の下を走り続けていた。

黄色の吹雪の中、硬質な足音と散ったイチヨウを踏む音が同時に響く。走り抜けた風圧で葉が巻き上がる。

頬に当たる冷たい風は心地よく、遠野有希と名乗った女の子の左手は暖かかった。走りながらも、多奈は有希の手を握った右腕を見つめる。

——捕まってはならない。ただ、非常事態以外に使ってはならない…。

言いつけられていた言葉を中心に反芻する。

——状況は切迫していた。捕まるわけにはいかなかった。それは事実。…同時に、言い訳なのかもしれない。

有希は恐らく気づいていない。自分を引っ張る右腕が淡く青く発光しているなど、普通なら想定もしないし、観察している状況ではないはずだ。

ましてや、多奈がスプリンター並のスピードで走れるのは、その光の力によるものなどとは思ふ事は出来ないだろう。

——使うべきではなかった。これはあくまでも最終手段だったはずだった。きつと、別の手段はあったのだ。それなのに私は、思考を放棄して安易な手段に逃げたのだ…。

自責の念がこみ上げる。必ず勝てるカードを持っているからこそ、それを使わずに勝てる手段を講じるべきだった。自分の臆病ぶりに恥ずかしさを感じる。

「…はあつ、はあつ…。…あ、そこそこ！そこを右！」

息も絶え絶えの有希の声が意識を前方へ戻す。

イチヨウ並木を突き抜けた先の丁字路を右手に曲がる。

有希は地元の人間らしく、追手から逃げるのに適した複雑な道を次々にナビゲートしていた。

——反省は後。今はただ、この状況から逃れる事に集中しなければ…。

ギアシフトのように意識を切り替える。既に剣は鞘から抜かれてしまった。今更戻した所で意味は無く、後はどう振るうかを考えるしかない。

「…はあつ、はあつ…」

後ろからは有希の荒い呼吸音が聞こえる。足が一步を踏み出す度、繋いだ手が上下に揺れた。

——彼女を、守らなければならない。こんな事態に巻き込んだのは私達。私は責任を持って、普段の日常に戻してあげないとならない…。

胸に使命感を灯す。ほどよい緊張と明瞭な思考を感じる。

現状で考えられるだけの未来を想定して、覚悟を行い、対処を考えなければならぬ。
「…はあつ、はあつ…。ご、ごめん、多奈！ …はあつ…。あ、あたし、もう、さすがに、
げ、限界いいい…」

今にも倒れそうな有希の顔を見ながら、多奈は最初の現状打破対策案を講じた。

——まずは、走らない事から始めよう。

* * * * *

「世の中の物理現象は、全て“速さ”と“向き”という単位に分解出来るそうです」
大学での講義じみた事を、多奈はチキンカツバーガーを食べながら真面目な顔で語る。頬
についたマヨネーズが可愛いんだか間抜けなんだか判断が難しかった。

渡瀬駅から徒歩5分。国内3番目のシェアでチェーン展開する、渡瀬町東商店街唯一のフ
ーストフード店の二階席。

壁の半分はガラス張りで、外からの日差しが差し込んでいた。

申し訳程度の観葉植物が暖房の風で揺れている。

多奈は外を警戒するために、私は開放感があるからという理由で、ガラス付近の二人用席
を確保している。

時折、多奈はガラス越しの中途半端な人の往来に視線を移しては警戒を行っていた。

その横で私は無警戒にオレンジジュースをストローで吸い込み、口の中で広がる酸味と甘味を楽しんでいる。日は少しずつ暮れ始めていたが、夕食にはまだ早い。

——つ、疲れたあ…。

走りっぱなしの足は痛みよりも疲労を訴えていた。やつとの思いで座れた椅子が、急速に足の疲労を追い出していくのを感じる。

結果的に一駅分はノンストップで走っていたのだから、こうして歩けるだけでも奇跡なのかもしれない。

「ん…」

紙ナプキンでマヨネーズのついた多奈の頬を拭う。

多奈は少しだけ恥ずかしそうな表情を浮かべたが、話をそのまま続ける。

眼鏡でもかければ十分に女家庭教師として通りそうな、淡々とした『伊勢崎先生の難しい物理の授業』は五分少々続いた。

「…と、そういうわけなのですが…。 …ここまでの話、理解しましたか？」

「全然！」

「断言しないで下さい…」

笑顔全開で胸を張って断言する私に対し、多奈は少しだけ頭を抱えた。

「…結局、実演した方が早いのかもしれませんかね」

多奈はコーヒーマイルクのポジションを3つ握り、手を開く。一秒もしないうちに、ポジションは空中へと浮かび始めた。

異様な光景は残念ながら、私には手品のようにしか見えなかったが、多奈はその現象と今までの講義の結論を一言でまとめた。

「このように。重力に限らず、全ての運動方向：つまり、ベクトル。私はそれを変える事が出来ます。それ故に、狙われています」

淡々と。一般常識をハンマーで粉々にするような言葉は、まるで数式の結果を話すかのよう言い放たれた。

「…これって、やつぱり、アレ？ 超能力ってヤツ？」

「簡単に言えば、そうです」

超能力。

その単語に呼吸が止まる。脳が熱くなる。思わず強く握った手に汗がにじむ。

「…ふ、ふふふふふふ…」

「…どうしました？ って、ゆ、有希！ 椅子の上に立たないで下さい！」

「あ…あたしの時代が来た——っ！」

拳を天に突き上げ、全力で叫ぶ。

多奈は心配そうに、周囲は変な物でも見たかのような視線を向けていたが、私は一切気にしない。

——世の中はやつぱり、不思議とロマンとファンタジーで一杯だったのだつ！
そんな子供じみた想像がほんの少しだけ証明された瞬間に、私の心は踊りに踊る。
今なら、本当にこのまま踊り回っても今なら構わないとさえ思ってしまう。

——これだから人生つてのは！　こんなのに突然遭遇しちやったりするから、楽しくてしようがないんだよね！

* * * * *

私が落ち着いた所で、多奈は更に説明を続ける。

私を轆きそうだった時、“車の進行方向を変えた”事。

先程の逃亡中、“重力の方向を変える”事で早く走っていたと言う事。

そして、使用中は右腕が淡く蒼く発光する事。光る理由は多奈自身にも分からないらしい。

——腕が青く光って、超能者の女の子。だから蒼腕の魔女、ねえ……。…中途半端な捻り具合が、逆にセンス無いなあ…。

多奈の右腕を見つめる。黒ドレスの長袖の周りには、霧のような弱々しい青色の光がぼんやりと放たれていた。

注意しなければ分からないような弱々しい光は、ベクトルを変更する物によって発光度合いが変わると付け加えられた。

「その能力って、どうやって使うの？ 腕とかに力をぐーっと入れるとか？」

「：難しい質問ですね。有希は、自分の腕を曲げる方法を人に説明出来ますか？ それと同じ質問です。言葉で感覚は説明出来ません」

「むう…」

淡い期待はあくまでも儚かった。少しだけ残念に思う。

「：後、説明しなければならぬのは、私を狙う敵の事です」

多奈は左手で自分の右腕を強く握る。少しだけ表情が曇った。

「私を狙う理由は明白ではありません。一番考えられるのは能力自体の研究の為ですが…。分かった所で狙われる事は変わらないので、そこらは置いておきます。そうですね…。唯一安心して欲しいのは、彼らは私達を殺さないという所です。彼らの武装は最高でもゴム弾銃です。殺傷能力はありません。なるべく肉体的にも精神的にも傷つけずに拿捕したいそうです」

「相手を殺しちゃったら、能力を調べられないからって事？」

「はい。また、人目につく事を非常に嫌い、一般人に手出しする事を頑なに避ける傾向があります。もしも私と有希が捕らえられても、有希には何の手出しもしないでしょう。恐らく、私の兄を人質にするという手段も取らないと思われます」

捕らわれた場合、私はいいとして、多奈はどうなる？ その疑問は多奈の言葉に遮られる。「最後に、私や兄が所属している施設についてですが…」

「施設？」

「簡単に言えば、住んでいる所です。私は先天性…生まれつきに能力が備わっていたため、幼少の頃からそこで生活を…」

かつん。

小さく音が響き、多奈の説明は中途半端に止まった。

普通なら聞き逃してしまうような、革靴の微かな足音。

瞬間的に多奈は足音の方向を見つめる。

私も同じ方向に視線を向ければ、一階へ降りる階段の前に黒スーツの男が3人。

ハンバーガーのトレイを持つ事無く、サングラス越しの視線は明らかに多奈を見据えていた。

どうみても仕事帰りのサラリーマンには見えない。場にそぐわない雰囲気撒き散らす男達に、周囲の客が不審な視線を向けている。

——人目につく事を非常に嫌うっていう話はなんだったのさ…？

椅子を鳴らして、多奈と私はほぼ同時に立ち上がる。

5メートル先の男達と視線が交錯する。

一人の男は階段に待機し、二人がこちらにゆっくりと近づいてくる。

将棋で完璧な王手を差せたかのような、そんな圧倒的な優越感でも感じているのかもしれない。男の表情は少し頬が緩んでいた。

「あちやあ…。退路、塞がれちゃってるし…」
「そうですね」

焦りが一片も籠っていない多奈の返事に、私の焦りも霧散する。もしかしたら、感覚が麻痺しているだけなのかもしれない。

「多奈。今更で悪いんだけど、超能力とかのスペシャル情報をあたしみたいな一般ピープルに話しちゃって大丈夫だったのかな？」

「はい。有希を無事に守りきる事において一番怖いのは、今のような状況で有希自身が情報の欠如による混乱に陥って、突拍子の無い行動をする事ですから。だから」

一呼吸おいて。

「四の五の言わずに黙って私に従ってください」

多奈は淡い微笑のままにハードな言葉を言い切る。もしかしたら、多奈なりの冗談だったのかもしれない。

私は説明の最後になって、一番重要な事に気づいた。

伊勢崎多奈は、私を守ろうとしている。

そして、この現状から逃げ出せる事を確信している。

——でも、どうやって…？ ぶっちゃけ、無茶苦茶ピンチっぽいんですけど…。

退路は完全に塞がれている。相手は三人、しかも男。力づくで突破出来そうにもない。

思わず一歩後退するが、硬くて厚いガラスが背中当たるだけだった。ごんつ、と鈍い音

が背骨に響く。

かつん、かつん。二人の男は革靴をゆつくりと鳴らしながら近づいてくる。

一般客のざわめきが一段階音量を上げる。

「…有希。これからまた走りますが、走れますか？」

落ち着きまくった口調が、どこか現実感を帯びぬまに漂う。

「無理」

「分かりました。逃げます」

多奈は何も分かってくれなかった。さらにそのまま、180度回転して後ろを向く。

「多奈？」

そこにはガラスの壁しかない。

しかも、私が渾身のドロップキックをかました所で、ひび一つ入れる事の出来ない壁。

高さにして三メートル、横幅十数メートルの、ただ単に外が見えるというだけの、壁。

多奈は人差し指を突き出し、まるでエレベーターのボタンを押すように、ゆつくりとガラスの壁にくつつけた。

もしかしたら壁を透過するなんて能力もあるのかもしれない。そんな甘い妄想を抱く私に投げかけられた言葉は、ロマンスの欠片も無かった。

「離れてください。破壊します」

冷静に、もう一度描写する。そこにはガラスの壁しかない。

しかも、私が渾身のドロップキックをかました所で、ひび一つ入れる事の出来ない壁。そんな壁に対し、腕を伸ばして人差し指を前に押し出す。

多奈のアクションはそれだけだった。

——う、嘘だあ……。

分厚いガラスの壁が、たった一人のか細い女の子の人差し指に押され、湾曲を始める。まるで薄手のカーテンを押しているような、一切の抵抗感を取り除いた湾曲。

多奈の右腕には青色に発光する霧が帯び始めていた。抵抗力のベクトルを逆向きに変えた魔女の指は、ガラス板をゆつくりと突き抜けようとしていく。

現実感を地平線の彼方に吹っ飛つとばしながらも、目の前の光景は切なくなる程に現実だった。

一秒もかからず、多奈の右手はガラスの膨らみに隠れて見えなくなる。

多奈は更に指を押し込んでいく。

ぱしっ。

瞬間。微かな音を立て、壁全体に無数の白の筋が走る。弾ける、その一瞬前の現象。

そして。

ぱあーん！

巨大な風船を割ったような破裂音を立て、ガラスの壁は粉々に砕けた。
光の雨。

落下する無数の破片は陽光を乱反射し、周囲に光を撒き散らす。きらきらと輝く破片は一秒の間だけ、周囲に輝く雨を降らせる。

その光景は幻想的で、破滅的で、見惚れてしまう程に美しかった。

光の雨の下、多奈は私を見つめながら淡い笑顔を浮かべている。長い黒髪が僅かに揺れる。それは、魔女という言葉が相応しい程に神秘的で、年頃の女の子のように華やかな笑顔だった。

* * * *

その日も、渡瀬町東商店街は平和に過ぎ去ろうとしていた。

明日もきつと同じように平和で有り続ける事を、皆は意識すらしていなかった。

ファーストフード店の二階の窓ガラスが突然粉碎し、そこから黒のミディドレスの少女がトレンチコートを着た赤茶髪の女の子を抱きかかえながら落下し、猫のような軽やかさで着地を決める。

手を繋いだ二人の少女はそのまま商店街を疾走する。

その後ろを黒スーツの男三人が追いかけていく。

周囲の悲鳴とざわめきの中、当人達は他人事のように気にする事無く走り続けていく。その日、八百屋「みずたに青果」は少女達に売り物台を蹴り飛ばされ、大根三本を碎き折

られた。

セトモノを宅配中だった運送業者の青年はスーツの男にぶつかり、陶器の破壊音を聞いた。家族と海外旅行を楽しんでいた床屋の店主は、二日後に豪快にぶつ倒されている看板を見る事となった。

少女達は商店街を走る。走り抜けた後には悲鳴と怒号が置き去られていく。

その日も、渡瀬町東商店街は平和に過ぎ去ろうとしていた。

明日もきつと同じように平和で有り続ける事を、皆は意識すらしていなかった。

夕暮れが近づいている。

4.

間違えと言うものは、瞬間の出来事ではない。私は常日頃からそう思っている。

何かを選択し、間違ったと思った時は、大概の場合はそれ以前からの選択を間違っている

場合が殆どなのだ。

例えば、調理実習で熱々の鮭のムニエルを思いっきり友人の顔面に叩き付けた間違いは、フライパンが熱くて思わず一本釣りのように振り上げてしまった事が問題ではなく、それ以前にフライパンの持ち手に炎が当たっていた事を見落としていた事が間違っているのだ。ちなみに、その際は結構真面目に謝った。

クリームシチューを注文した後にトマトスープが食べたくなかったとしても、それは事前からトマトスープを選んでなかった事が間違っているのだ。

自転車に乗っていたら電信柱にダイビングしてしまった場合も、ゲームに夢中で徹夜した事が間違いだったのだ。

そう。間違いは、積み重ねの結果なのだ。

後ろも左も右も黒服の敵がいたから、前に進んだ。進んだ先には歩道橋があって、その階段を登っていくと、しつかりと待ち伏せされていた。

これは歩道橋を登った事が間違いではなく、それ以前に「上手く追い立てられていた」事に気づけなかったという間違いの結果なのだ。

「…何ていうか…いわゆる絶体絶命ってやつっ!」

「前方に10名、後ろに7名。前後合わせて17名です。…見事に囲まれましたね」
時間は夕暮れ。沈む太陽は赤く染まり、周囲は美しく赤色に染め上げられていた。
歩道橋の上、私と多奈の影が長く伸びている。

頭の影は黒スーツの男達のズボンに映っていた。

下には休日なのにロクに車も通らない道路が伸びている。橋の先には小学校のグラウンドや校舎が見えた。

地上5メートルから空を望む。赤色に染まる晩秋の秋空には朱色の雲が浮かんでいる。

歩道橋は、幅にして2メートル。通路の長さは15メートル。

そんな狭い所に19人も人間がいる様は目立つ事この上ないが、寂れた町並みには通行人の一人もいなかった。

「私の後ろにいて下さい」

多奈は私をかばうように左腕を伸ばす。まるで騎士とお姫様のようなシチュエーション。左右に伸びる階段から、銃口が私と多奈に向けられている。

間違えと言うものは、瞬間の出来事ではない。私は常日頃からそう思っている。

今、私がすべき反応は、恐怖に怯える少女の反応のはずだった。

しかしながら、胸の鼓動が止まらない。

あまりにも日常からかけ離れた事態が、楽しくて楽しくて仕方がないのだ。

一番致命的なこの間違いは、私が生まれた時から間違い続けていて、きつとこれからも間違い続けていく。

それを一切後悔しないことが本当の間違いであり、それこそが遠野有希であるのだと、そ

んな事を思っていた。

数メートル先から向けられた銃口が、光を反射して輝く。

その日は、夕日がとても綺麗だった。

「我々は魂に正義を刻んでおります。そして、それ以上に紳士で御座います」

歩道橋の上。17名の包囲中から、一人のスーツの男が歩み出る。全体的に細身の男は、サングラスを外し、細長い目を更に細めながら私達に話しかける。

年齢は30前後。口調のキザっぽさとナヨナヨとした物腰が、押しかけセールスマンを彷彿とさせた。

「蒼腕の魔女：もとい、伊勢崎様。我々はただ、伊勢崎様と少々のお話をさせて頂きたいのです。我々も好き好んでこんな鬼ごっこをしているわけでは無い事を、ご理解して頂ければと存じます」

「16の銃口を向けてなければ、もう少し言葉に説得力が出ると思いますが」
男以外は全て銃を構えている。拳銃からライフルまで、16の銃口は確実に多奈に向けられていた。

その銃口は、男の一言で下げられる。

「これは失礼致しました。ですが、伊勢崎様ならば、我々の清い意志をご理解させて頂けると信じております」

「残念ながら、私は貴方達に髪も血も採取させるつもりはありません。研究材料にされるつもりは一切ありません」

「おやおや、これは手厳しい……」

わざとらしい肩をすくめるポーズは、あんまり似合っていなかった。

「我々は紳士です。伊勢崎様がご来訪されるのであれば、後ろのご友人も平和にご帰宅される事を保障致します」

「脅迫する事が紳士の心ですか？」

男は相変わらずわざとらしい笑顔で答えた。周囲の緊張感だけがゆっくりと高まっているのを感じる。

後ろの男が、じりつ、と足音を立てた。

一時の沈黙の後、多奈が口を開く。

「……一つ聞きたい事があるのですが、答えていただけますか？ 返答次第では貴方達に従う事も考えます」

「ほほう……？ 私で宜しければ、何でもお答え致しますよ」

男の目が一層細くなる。

「これで全員ですか？」

「は？」

「私を追っていたのは、これで全員ですか？ と、聞いているんです」

真意が全く見えない多奈の質問。男の目が丸くなる。

「…何故、そのような事をお聞きになられるのです？」

「質問の答えだけ話してください」

多奈の言葉は同じ年頃の女の子とは思えない程に冷淡で、威圧的だった。

「…今、ここにいる17人で全てとなります」

「…そうですか、ありがとうございます」

周囲の男達と私は一様に疑問符を浮かべていた。

秋風。飛ばされたイチヨウの葉が舞い上がる。歩道橋の上まで到達した葉は、夕日に照らされて紅葉のように赤く染まっていた。

多奈はその葉を見つめながら、淡々と語る。

「…有希。先程のお店で言い忘れていた事がありました」

「う、うん？」

「今まで起きた事、そして、今から起きる事に対し、絶対に誰にも口外しないで下さい。推測されそうな単語すら話さないで下さい」

「え？」

最初、別れの言葉なのではないかと思った。だがそれなら、今から起きる事というのは…？私の混乱を置き去りにして、多奈の言葉は続く。

「口は堅い方ですか？これから起きる事に対し、沈黙を守る自信と覚悟はありますか？」

「う、うん！」

反射的に出た答えに、多奈は相変わらずの淡い笑顔で答えた。そして次の瞬間、その右手を大きく開き、前に突き出す。

「貴方の決断に感謝します！」

瞬間。多奈の言葉と同時に、光が爆発した。拡散する白光に、私の視界は目の前の多奈すら映さなくなっていた。

* * * * *

光は一瞬だった。

目を開ければ、そこには一瞬前と変わらない情景と、私達を囲む17人。そして。

とんでもなく長い刀を右手に、警察機動隊が使うような巨大な透明の盾を左腕に。そこには、"武装"を終えた伊勢崎多奈が静かに立っていた。

周囲の男達も私も、何が起きたのか分からずに、ただ多奈を見つめている。

当の多奈は目を瞑り、静かな声で話し出す。その右腕には蒼い光が漂っていた。

「…国宝、直刀 ちよくとう 金銅黒漆塗平文拵 きんどうくろしつずへいもんこしらえ 附刀唐櫃 かたなからびつづき。全長2メートル71センチ。日本最古に

して最大の刀。別名、平国剣」

文章を読み上げるように、淡々とした言葉が響く。

「…とはいえ、私がつ持っているのは、その3つの内の「直刀」の複製品なのですが」

多奈のぶら下げた右手に握られた「直刀」はあまりに巨大だった。道幅の狭い歩道橋の上を狭そうにしながら、威圧的な存在感を放っている。

白い手に握られた柄は黒く、装飾の無い無骨な鋼鉄が伸びていた。

反りの無い刀身は日本最古という言葉を疑ってしまうくらいに錆一つ無く、鏡面のような美しさを保っていた。夕日を反射し、褐色に染まった刀身の危険な美しさに思わず魅入られる。

左腕に固定された透明盾は、ポリカーボネイトという特殊な物質で作られた警察機動隊用の盾。8ミリの薄さながら弾丸すら防げる最新鋭の透明盾だったと、自分の知識から引っ張り出す。縦長の盾は、多奈の頭から足先まで完全に防げる程に大きい。

あっけにと取られていた男達は我に帰ったのか、慌てて銃を構えなおす。説得役の男にも驚愕の表情が浮かんでいた。

「…有希。…確実な逃亡。布団に入る際に一切の不安も残さない、確実な逃亡とは何だと思えますか？」

多奈は私に振り向いて、淡い笑顔を浮かべて聞く。私が何かを言う前に、多奈は言葉を続けた。

「それは、追いかける者を殲滅し、その上で逃げる事です」

ぶおん！

巨大な直刀が鈍い音を立てながら風を風ぐ。圧倒的迫力。小柄な女の子が片手で振り回すには、その刀はあまりに巨大すぎた。

“重力の方向を変える”という無茶苦茶な手段だけが、視界に映る不思議な現象を説明している。

「この機会を待っていました。全員の追跡を振り切れる、この機会を……」

多奈は説得役の男の方へ振り向く。

静かな、それでいて強い意志を持った瞳が夕陽の赤を映す。

ぶら下げた右手の巨大直刀が無音で周囲を威圧する。

「安心して下さい。刃は全て潰してあります」

風が吹いて、周囲の木々が微かな音を立てる。多奈の長い黒髪が風に流れる。

黒いミデイドレスを身に纏い、右手に最古の刀、左手に最新の盾を構えた、現代の魔女。「殺すつもりはありません。……ですが、抵抗します！」

その言葉が、開戦の合図だった。

* * * *

「うわああああ——っ!?」

直刀を横に一薙ぎ。それだけで、2メートルを超える刀身が3人の男達の腹部に突き刺さり、そのまま歩道橋の外へと吹き飛ばす。

私を背にしたままに一回転。反対側で唾然としていた男2人が空中へと飛んでいく。

「…あと12人！」

多奈が叫ぶ。たった1秒で5人を倒してしまった現代の魔女の気迫は周囲に動揺を与える。「撃てっ！」

相談役だった男が指示を飛ばす。

11の銃口が多奈をロックする。多奈はそれを見つめるだけだった。

「多奈っ！」

思わず叫んだ、次の瞬間。

ぱぱぱぱぱん！

11の破裂音。11の弾丸が多奈を襲い…。

「…な、何で…」

銃を構えた男の一人が思わず呟いた。その視界の先には、風に黒髪をなびかせて悠然と立つ、多奈の姿。その体に一切の怪我也見当たらない。

その足元には11の弾丸が転がっている。弾丸は全て、進行方向を曲げられていた。広がる動揺。多奈は音が鳴るくらいに地面を蹴り、前方の男達に突撃する。

「11人！」

振り上げられた刀は一人を高く吹き飛ばし、歩道橋というステージから叩き落とす。

「10人！」

左手の盾で男の顔面を殴りつける。男は吹き飛び、空中で一回転し、階段を転がっていく。
「くそっ！」

仲間が次々とやられていく中、懸命にライフル型のゴム弾銃の銃口を向ける。

多奈はその銃口に視線を向ける。それだけで、放たれた弾丸は多奈に当たる寸前で進行方向を反転し、男の額にぶち当たった。

「あと9人！」

弾丸が無駄だと感じたのか、一人の男がライフルで殴りかかる。

相当の威力だったはずのその攻撃は難なく左手の盾で受け止められ、振り上げた刀の柄がその顎を砕いた。

黒髪が、黒のドレスが踊る。

流れるように敵を打ち倒していく少女を見て、私も男達も驚きを隠せなかった。

武装した17人もの男が一人の少女に駆逐されようとしている。

その想像は、あまりにも常識から外れていた。

——あ、圧倒的過ぎ……。

多奈の戦闘技術は私のような素人が見ても、かなり大雑把なものだった。恐らく、周囲の男達の方がしつかりとした技術を持っているはずだった。

しかしながら、その技術と言うものは、殴ればダメージを負わせられる事、足を蹴り上げれば投げられる事、刃物で切れば血が噴出す事、相手に弾丸が当たれば殺せる事を前提としている。

決して、殴ろうとしても、弾丸を当てようとしても、全てを回避してしまう相手と戦う事は想定されていない。

前提条件すら覆している相手に、どうやって対抗すればいいのか。

視界に映るのは、圧倒的武力による殲滅だった。

夕日に照らされた蒼腕の魔女は、その黒髪を赤く染めて周囲を駆逐していく。

「有希！　しゃがんで下さい！」

何故かと問いかける余裕なんてなかった。夢中でしゃがむ。

すぐさま、私の頭上数センチを巨大直刀が通過する。多奈はフリスビーのようなモーションで、右手の直刀を投げつけていた。

鈍い風切り音。背筋に寒気が走る。

投げつけられた超重量は男3人の胸や腹部にぶち当たり、それらを沈黙させた。

視線を多奈の方に戻せば、左腕の盾を相談役だった男に投げつけている所だった。ガッツ、という鈍い音を立て、盾は男のこめかみを直撃した。そのまま、ゆっくりと男は倒れる。

「あと4人！」

前方に2名、後方に2名。

もはや、残りの男達の戦意は失われていた。目の前の少女は自分達を一瞬にして破壊する力を持っている事を確信した。そして、抗えない事も、逃げられない事も確信した。

魔法の力で相手を駆逐していく魔女の姿に、彼らは心底恐怖していた。

当の多奈はその状態を一切気にせず、容赦もしない。

半歩踏み出し、ガラスの壁すら砕ける拳を男の腹部に突き刺す。小柄な少女の拳は、大柄の男を2メートル上空に吹き飛ばす。

もう一人の男が半ばヤケクソに掴みかかる。黒のショートボレロを握った男は、そのまま力づくで背負い投げをしかけようとする。しかし。

「…な、な…？」

気づけば、男の体は逆さまになって空中に浮いていた。重力の方向を変えられていた。

多奈は宙に浮いた男の右腕を掴み、横薙ぎに投げ飛ばす。3メートルくらい飛んだ所で、正常な重力に導かれるままに落下した。

「2人！」

既に残り二人は逃亡の準備を行っていた。

多奈は振り返り、両足で地面を蹴る。たったそれだけの動作で、歩道橋の端から端まで一瞬にして移動した。その勢いのまま、体当たりをぶちかます。

壁に激突した男は、ぐえ、という言葉を残してその場に倒れる。

「最後っ！」

気迫の籠った声と、残された男が階段を降りきったのは同時だった。

多奈はしゃがみ、数本のベルトが巻かれたブーツからパチンコ玉程度の金属球を一つ取り出す。

それを軽く横に投げると、その球は軌道を一瞬して変え、多奈の周りで楕円軌道を描きながら旋回し始めた。旋回速度は少しずつ上昇していく。

——多奈の周りで、“落ち続けている”…!?

多奈は右腕を上げ、ゆっくりと指鉄砲の形で構えた右手を下ろしていく。重力を曲げられた球は高速で旋回し続けていた。

まるで本当の拳銃がそこにあるかのように、逃げ続ける男の後頭部をロックする。細められた瞳が目標を追い続ける。

「ばん」

その瞬間、高速で旋回していた金属球は軌道を変え、伸ばされた多奈の右腕を何週も旋回し、人差し指の指す方向に射出される。

音速の弾丸は逃げ続ける男の後頭部を直撃し、沈黙させた。

「…ふう…」

男が倒れたのを確認し、多奈が小さく息を吐く。辺りの緊張感が一気に消え去る。
「…大丈夫ですか、有希？」

周囲には男達が死屍累々といった様相で倒れている。

たった数分にもならない時間で17人の相手を倒してしまった現代の魔女は、夕日を背に淡い笑顔を浮かべていた。

駆け寄る私に、多奈は驚愕の一言を言い放つ。

「…実は、実戦は初めてでした」

周囲には男達が死屍累々といった様相で倒れている。

たった数分にもならない時間で17人の相手を倒してしまった現代の魔女は、夕日を背に淡い笑顔を浮かべていた。



千年谷市上空六百フィート空撃戦

Escape 2.

1.

盛られている。だから、食べている。

バスケット上のフランスパンはどこまでもほかほかで、骨付き鶏肉はどこまでもジューシーだった。

「いただきますーす」

夜七時。遠野家のダイニングテーブルには見事な料理が並んでいた。

暖色のライトは部屋と椅子に座る3人を優しく包み、暖かな料理を魅力的に照らしている。多奈の向かい合わせには、有希と、遠野三里^{とおのみさと}という名前の有希の母親が腰掛けていた。幸せそうに料理を口に運んでいる。

遠野家の夕食は非常に手の込んだ料理ばかりだった。

自家製フランスパン。骨付き鶏肉のトマトスープ。自家製フレンチドレッシングのサラダ（赤・黄。パプリカ、ミニトマト、アスパラ入り）。白身魚のカルパッチョ。ベイクドポテト。

「うひゃー！ こりゃ、ワインが欲しい所だね！ みーちゃん、昨日の赤ワイン残ってる？」
「こらこら。有希は一応未成年なのよ？ まるで毎日のように飲んでるんじゃないかって多奈ちゃんに誤解されちゃうわよ？」

言葉とは裏腹に、その表情は優しい笑顔だった。髪を後ろでまとめて有希をそのまま大人

にしたような、そんな有希の母親は多奈にとって非常に魅力的に見えた。

「多奈ちゃん、どう？ おいしい？ 久しぶりにちよつと頑張っちゃったんだけど」

「と、とってもおいしいです…」

遠野家の料理は全てが絶品だった。

トマトスープの鶏肉は箸で切れるくらいに柔らかく煮込まれ、色取りが見事なサラダは新鮮そのもの。

バスケットに載せられた焼きたてのフランスパンは、もちもちとした食感と小麦の香りが抜群で、バターをつけずとも食べられる。小麦粉からしつかりと作って焼いたというのだから驚きだった。

多奈にとつて、こんなに温かみのある料理は初めてだった。素直に感動していた。

「ふふふ。そう言ってもらえると、お姉さんは嬉しいわ」

返答は笑顔だった。オレンジ色の光に照らされたその笑顔は、多奈の鼓動を一度だけ強く高鳴らせた。

「40歳へのカウントダウン始まるのにお姉さんー!？」

「何か言ったかしら有希？ 私は生涯22歳の美人お姉さんよ？」

笑顔で有希の頬をつまむ三里さん。その指に力が目一杯籠っている事は傍目にも分かっ

しまった。
「えううう…。ひ、ひたいでふ、ふおふえーふあん…」

友達のように仲のいい遠野親子を見ながら、ちぎったフランスパンをトマトスープに浸して食べる。

口の中に広がる酸味と旨みに、多奈は思わず頬を緩めていた。

その淡い笑顔は、数時間前に17人もの相手を一方的に薙ぎ倒した現代の魔女ではなく、16歳の少女に相応しい笑顔だった。

* * * * *

『追跡者がまだいるかもしれない。大事を取って、今日一日は帰ってきてはならない』

施設からの指令を端的に言えば、そのような内容だった。

理解は出来るし、多奈自身も同じような対処を取ったと思っている。敵にこちらの本拠を特定されるわけにはいかないのだから。

ただ。一日だけとは言え、家を追い出された気分になってしまい、少しだけ傷ついたのも事実だった。

歩道橋での戦闘後。速やかにその場を立ち去った多奈は、すぐさま施設に連絡を取った。現状の報告、今までのいきさつ、有希との遭遇。そして、敵を倒してしまった事。嘘偽り無く、全てを話した。

有希の案内した運動公園に到着する頃には、既に日は完全に落ち、空には星が輝いていた。緑豊かな運動公園は耳が痛くなるくらいに静かで、等間隔に設置されている白熱灯がどこか寂しげだった。

夜の冷気で冷えたベンチに座る事なく、白熱灯の明かりの下で二人は白い息を吐く。

「どうだった？」

有希が顔を覗きこむように尋ねる。枯葉を踏む足音が周囲に響く。

「…今日一日は帰れない事になりました。適当な場所で寝て、明日の昼に戻ります」

「よしっ、それは丁度いいね！」

「…丁度いい？」

手を叩いて笑顔の有希。多奈は不思議そうに首を傾げた。

「多奈、今日はあたしの家に泊まっていきなさい！」

「え…？」

有希に両手で右手を握られ、多奈は思わず目を丸くする。

多奈にとって、有希の言葉は理解出来なかった。施設以外で過ごした事の無い多奈に、他人の家で寝るといふ発想は無かった。

「期待していいぞー。あたしん家、料理教室なんて小さく開いててね。美味しいもの用意しちゃうよー？」

善意全開の笑顔が白熱灯に照らされる。

——何故？

多奈はそれだけを考えていた。

敵は既に撃破した。偶然に巻き込んでしまった有希を無事に守りきるという義務も果たし終えた。

その後はそれぞれの日常に戻ればいいのだし、そうなるものだとは多奈は信じていた。

「私が有希の家に泊まるべき理由は無いと思うのですが……」

「えー？　だって、多奈は今日一日帰れないんですよ？　ここら辺じゃ宿泊施設もないし、それに……」

秋の夜空の下、有希は笑顔で言い切る。

「友達を招くのに、理由なんていらんじゃん？」

思わず多奈は片手で胸元を押さえる。施設以外の人から「友達」という単語を聞くとは思っていなかった。

自分のような異端の者と、普通の者が仲良くなれることなど無いと思っていた。

「ゆ、有希は、私が怖くないんですか……？」

「え？　どこが？」

当然のように言い切る有希に、多奈は思わず声を荒らげた。

「どこがって……。今さっき見ましたよね!?　私は有希とは違うんです!」

「あー、悪いけどあたし、そういうの全然気にしないタイプなんだよねー」

笑顔は一切崩れなかった。あまりの簡単な物言いに、言葉に詰まる。

「今日みたいに、迷惑をかけるかも知れませんし…」

「それはむしろ大歓迎！」

力いっぱいサムズアップ。

「……」

沈黙する。多奈は何を言えいいか分からなくなっていた。何を否定したいのかも分からなくなっていた。

「よし、そんなじゃ納得した所で、れっつごー！」

右手を引かれる。

「ゆ、有希！」

「うん？」

「わ、私は…」

多奈は顔を伏せる。長い前髪が白熱灯の光を遮り、目元が隠れる。

「…私は、学校に行った事ありません…」

震えた声。それは多奈のコンプレックスだった。

能力者である多奈は一般の学校に行く事を許されず、施設での通信教育だけで学んでいた。テレビや漫画で学生生活というものがどういいうものかは知っていた。けれどもそれは、あくまでも知識であり、経験ではなかった。

——ただ単に、私は怖がっているだけなのだ…。

多奈は素直にその事を認める。

多奈の16年間の生涯において、同年代の女の子と話した事は一度も無かった。何を話せばいいのか、どう振舞うべきなのか。何も分からない多奈にとって、それは真つ暗な闇の中を歩くようなものだった。

頭上には星空が広がっている。季節を少し外れた鈴虫が鳴いた。

冷たい風が周囲の木々を揺らす。白熱灯がステージ上の役者のように二人を照らしている。17の銃口に怯まない現代の魔女は、17歳の女子高生の言葉に怯えていた。

そんな多奈を見て、有希は普段では想像できないくらいに優しい笑顔を浮かべる。

「大丈夫。あたしは多奈を嫌わないし、裏切らないし、傷つけないよ。ただ、仲良くなり
たいだけだから」

握られたままの右手が少しだけ強く握られる。

夜の冷気の中、その部分だけが暖かかった。

有希に引つ張られるようにして、歩いていく。

自分の意志で、歩いていく。

二人の足音が静かな夜の住宅街に響いていた。

街灯の少ない街路から望む晩秋の星空は広く、輝いていた。

多奈は右目を手で拭う。

この時はまだ、嬉し涙という単語を知らなかった。

* * * * *

「今日の良き日と、多奈との出会いと面白アクシデントに、かんぱーい！」

三つの心地よいガラス音が響いて、グラスの赤ワインが波打つ。

「ぶはーっ！ あたしはこの一杯のために生きているー！」

「オヤジを娘に持ったつもりはないっ！」

相変わらずの遠野親子を尻目に、多奈は恐る恐るグラスに口をつける。

結局飲む事になったワインは、伊勢崎多奈にとって生涯初のアルコール飲料だった。

「……んっ」

ブドウのフルーティな味わい。そして、ワイン独特の酸味とアルコールの感触が口の中に広がる。思わず目を瞑る。

飲み干せば、たった一口なのに口の中が熱を帯びてるような感触が残っていた。

「多奈、どうよー？ 多奈は飲めるクチだったりするー？」

興味津々といった笑顔の有希。その右手のグラスは既に空になっていた。

「わ、分かりません……」

決して不味くは無かったと思う。ジュースと比べて美味しいかは分らない。

確かめるように、もう一度ワインを口に運ぶ。そのまま、喉を鳴らして一気に飲み干す。
「あらあら。多奈ちゃんってばいい飲みっぷりね」

グラスを置く。視界が少しだけ揺れる。自分の感覚全てに薄い膜を張られたような感覚。これが酔いなのだと、多奈は初めて実感する。体がやたら熱かった。

「よし！ 多奈も飲めるクチってことで、もう一杯いこうかー！」

「こらこら。お酒は二十歳になるまで一杯だけよ？ はい、没収」

ワインボトルは有希が掴む前に三里さんが颯爽と奪い取っていた。

「えうう。そりやねえつすよおつかさん。もう一杯、もう一杯だけ」
「ああもう、ひつつくなつ！ しょうがないわね。ここは一つ、多奈ちゃんに決めてもらいましようか」

「え？」

「多奈ちゃん、もう一杯飲みたい？」

有希が期待と羨望の眼差しで多奈を見つめている。逃げるという選択肢は選べなかった。

「…は、はい」

「よく言ったぞ多奈っ！ そんじやみーちゃん、もう一杯いこうかー！」

「はいはい。それじゃ、取って置きのチーズも出しちゃおうかしらね」

「ぐっじよぶー！」

暖かい光がグラスを反射する。ワインが注がれ、ガーネット色の水面が揺れた。

楽しい食事は、施設で十数人の兄弟たちと毎日取っている。

けれども、母親というものを知らずに育った多奈にとって、こんなに暖かさを感じる食事は初めてだった。

「かんぱーい！」

三つの心地よいグラス音が響いて、グラスの赤ワインが波打つ。

口の中に広がる葡萄とアルコールの感触が心地よかった。

暖かい食事、暖かい光、暖かい空気。

繰り上げられる親子漫才を見ながら、多奈は小さく声を出して笑っていた。

こんなに気分が浮かれているのは、きつとお酒のせいなのだと、そんな事を思いながら。

2.

瞳を閉じて、呟く。

「これは勝負」

人間の歴史も、私の人生も、それらは勝負の連続で綴られてきた。日常は、事ある事に私に戦いの舞台を用意する。

そして、私は全力でその舞台で勝利を掴まなければならない。栄光の輝きは、常に勝者のみを照らすのだから。

右手を強く握る。自らの闘争本能に火をつけていく。

これからの戦闘における構想を終える。

勝利の際に天に吼える準備と、敗北の際に晒されるであろう屈辱に耐える覚悟を終える。

瞳を開ける。

そこには、見慣れた風呂場の光景が広がっている。湯気が霧のように周囲を曇らせていた。肩まで湯船に浸かっていた私は勢いよく立ち上がり、未だに着替え中の多奈に聞こえるような大声で叫ぶ。

「よっしゃー！ かかってこい多奈ー！」

風呂場は私の大声を容赦なく反響させまくっていた。突き出した私の右腕からは湯気が立

ち上っていた。

決して、小さい、薄い、フラット、平面……といった侘しい単語ではなく、慎ましい、可愛らしいという言葉で描写したい胸は、残念ながら揺れる事は無い。

勝たなければならぬ。勝つ事で、私は自信と誇りを手に入れるのだ。
女としての、自信と誇りを。

最初から劣勢なのは覚悟の上だ。自分の持つカードが切なくなるくらいに弱い事は理解しているし、事実はいつも目に入っている。

しかし、だからこそ賭けるのだ。「どうせ貧乳だし」と認める程には、私はまだ負け続けているわけではない。

私は諦めない。どんなに負け続けていても、次に大勝利が待っていないなんて、誰にも言えない。

ドアが開く。冷えた外気が入り込む。

長い髪をアップにした多奈は俯き気味の顔を真っ赤にし、恥ずかしそうに体をハンドタオルで隠しながらタイルの上に降り立った。

僅差だった。

しかし、明白な敗北だった。

「ガーッテム！」

シヨックのあまり、倒れるように湯船に沈む。

水柱が豪快に立ち上るのを多奈は不思議そうに見つめていた。

酸素の届かない世界、涙がこぼれない世界で、私は心の勝敗表に75個目の黒星を書きこんだ。

* * * * *

わっしやわっしや…。

「お客さん、かゆい所はありませんか？」

「…ないです」

シャンプーの白い泡は膨らんでいく。指先が長い黒髪を梳いていく。

湯気の立ち込める風呂場。二人並ぶように椅子に座り、私は多奈の髪の毛を洗っていた。

「……」

元々大人しい多奈だったが、風呂に入ってから終始無言。

浴槽に入った時なんては、端っこの方で体育座りのようなポーズで湯船に浸かっていた。

「恥ずかしいからです」

理由は、俯きながら言ったその一言。その様は男心をくすぐり過ぎるくらいに初々しかっ

だが、残念ながら私は女の子だった。

その時の真つ赤な顔を思い出し、ついつい頬を緩めてしまう。

今こうして頭を洗ってる際も、多奈としては恥ずかしい事この上ないのかもしれない。

わっしやわっしや…。

指を動かし、白い泡を増やしていく。長い黒髪は洗いがいのあるボリウムで、全体を泡立てるのに結構な苦勞を要した。

「はい、流すよー。普通のシャワーと、滝壺突撃系ハイドロプレッシャー洗浄のどっちがいい？」

「…普通で」

「ちえっ」

シャワーの温水で泡を流し落としていく。心持ち、多奈は心地良さそうにしているように見えた。

泡の流れる多奈の背中。自分よりも小さいかもしれない。傷一つ無い白い肌と細い手足。——こんな体で、17人の男を殲滅、ねえ…。

夕方の出来事を思い返す。赤い夕日を背に、黒のドレスを纏い、巨大な直刀で敵を殲滅していく現代の魔女。

それが、目の前で恥ずかしそうに座る少女と同一なのだから、人生つてのは本当に面白いと思う。

——実戦は初めてでした、かあ…。

その割には、多奈の動きには無駄も躊躇もなかった。もしかしたら、かなりの訓練を受けているのかもしれない。

——こんな平和な国で、何を考えてそんな訓練するんだか…。

疑問は尽きなかったし、永久加速の好奇心は暴れだしそうだった。後でゆっくりと色々聞いてやるぞと心に誓う。

——まあ、時間は一杯あるしね。

動かす手に意識を戻す。コンデイシヨナーを長い黒髪に満遍なく塗りたくっていく。

「ねえ、多奈？　ここで一つお願いがあるんだけど？」

「…何ですか？」

「乳を揉ませろ」

神の意思だった。

視界一杯に天井が見えた。

蒼腕の魔女のアップパーは、私を1メートル上空に吹っ飛ばしていた。

3.

「星を見るのは好きですか？」

夜風が多奈の黒髪を僅かになびかせる。冷たく乾いた風は湯上りの体に心地よかった。星の綺麗な夜空の下。二階のベランダには部屋からの明かりが差し込んでいる。

足にはスリッパ。体にはパジャマ。右手にココアを持った私と多奈は、手すりに腕を置いて星空を見上げていた。

湯氣を立てるココアを口に含む。

牛乳と砂糖がたつぷりに入った、優しい味が口の中に広がる。

「うん」

静かな夜が好きだった。広がる静寂と、凜とした空気の中、星を見上げるのが好きだった。

「…私の住んでる家には、屋上があるんです」

視線は星空に向けたまま、多奈は落ち着いた声で話す。

緩やかな風が髪を揺らす。車の走る微かな音が遠くから聞こえた。

「その屋上は、星が綺麗に見える場所でした。空を見上げると、何も遮らない、視界一杯の星空が見える場所です。幼い頃の私は、そこでずっと星を見ていました。別段、何をするわけでもなく、ただずっと見上げ続けていたんです」

湯氣を立てるココアを一口。多奈はその水面を幸せそうな瞳で見つめる。

「そこに行くのは、いつもお風呂に入った後。私が幼い頃、夜中に遊びに行つては、兄によく怒られていました。それでも私は、毎日のように屋上に行っていました。それが原因で何度も風邪を引いたりもしてました」

その頃を思い出したのか、多奈は少しだけ笑顔を作る。

「…その頃の私は、寂しかったんだと思います」

「そうなの？」

「…有希は、遠足に行つた事がありますか？ 運動会や卒業式は何回経験しましたか？」突然の質問に指折り数える私。多奈は星空を見上げた。長い髪が風に柔らかく揺れる。

「私の家には28人の子供がいました。その内、学校に行けなかったのは私一人だったんです。幼い頃は能力の制御が全くとできず、感情が動く度に右腕が光ってしまつて…。そうせざるを得なかったんです。理解と納得と覚悟は出来ていたんです。でも私は、一度もそういう経験をしていなくて…それが羨ましくて…」

ココアを幸せそうに一口飲み、ゆっくりと白い息を吐いた。

「そんな時はこうして…星を見るんです。ずっと、ずっと…。きつとそれは、逃避だったのだと思います。それでも、それ以上に…星を見るのが好きだったんです」

晩秋の夜風が少しだけ強く吹いた。カーテンと髪が音を立てずに揺れた。すっかり聞き役になつてしまった私も、星空を見上げながら話す。

「これから。卒業式とかは出来ないけど…。これから、色んな事をしようか？ 遠足だった

ら何度だって出来るしね。昔の多奈はタイミングを逃したけど、次を逃さなければいいんだよ」

「…はい」

目を瞑り、多奈は答える。一呼吸して、少しだけ感慨深く一言を加えた。

「…初めて、兄にも話してない事を話してしまいました」

その言葉に、私は緩む頬を抑えられなかった。

11月の冷たい夜風が吹いた。辺りには静寂が広がっている。

「…誰かと一緒に星を見るのも、いいものですね」

部屋から差し込む光に照らされて。多奈の笑顔はこれまでで一番幸せそうな笑顔だった。ココアの冷めるまでのしばらくの間、私と多奈は静かに星空を見上げ続けていた。

夜空にはオリオン座が輝いていた。風が髪を揺らす。緩やかにゆっくりと流れる時間は心地よかった。

静かな夜が好きだった。広がる静寂と、凜とした空気の中、星を見上げるのが好きだった。

* * * * *

「…あ」

静寂を破ったのは私だった。多奈は視線だけで質問する。

夜空には小さな赤の光点が点滅しながらゆつくりとした移動を行っていた。

「飛行機。あたし、実は一回も飛行機に乗った事ないんだよねー」

「私も乗った事ありません」

「一度乗ってみたいよねえ……。滅茶苦茶高い所から見た夜景が見てみたいんだよね。きっと綺麗だよねー」

僅かな間をおいて。

「…見に行きますか？」

「えっ？」

多奈は夜風に髪を靡かせながら、淡い笑顔でこちらを見つめている。部屋からの明かりが瞳に映る。

その右腕には、青の光が霧のように淡く発光していた。持っていたはずのマグカップが、空中で不自然に固定されている。

何も言わず、多奈は左手を差し出す。私は半ば反射的にその手を取った。

「うわ…っ！ うわわわ…っ!？」

途端、上から引つ張られるような浮遊感に包まれ、ほんの少しの高さながら二人の足が大地から離れる。

何も踏む事の無い不安感から、思わず足をばたつかせてしまう。そんな私の様を見て、多

奈は小さく笑う。

「大丈夫ですよ。いきなり空に向けて落ちるなんてことはありません。1秒に100回、重力ベクトルを上下に変えてますから」

言葉の内容が凄いかどうかは分からなかった。それ以上に私は、初めての無重力に胸の高鳴りが抑えられない。

つまり、これは…。

「空…飛べるんだ？」

言って、自分の言葉に少しだけ酔う。

叶うわけが無い憧れが、いきなり目の前に現れている。

空中浮遊…もとい、空中落下の中。多奈は長い髪をふわふわ浮かしながら、笑顔で答えた。

「…この季節は寒いですから、着替えないとならないですね」

奇声を上げながら多奈に抱きつく。突然の出来事に能力の制御が出来なかったのか、そのまま硬いベランダに押し倒してしまっていた。

「ちよいと出かけてくるー！」

玄関でブーツを履きながら大声で叫ぶ。

今はもはや、ブーツの紐を結ぶ時間すら惜しかった。

開け放したドアの先では、多奈がいつもの黒ドレス、黒ブーツ姿で待っている。

それに合わせて、私もトレンチコートとチェックのミニスカートといった、多奈と出会った時と同じスタイルでまとめた。

「あら。コンビニでも行くの？」

お風呂上りのみーちゃんがビール缶片手に聞く。私は満面の笑顔で、上を指差した。

「空！ ちょっと飛んでくる！」

ブーツの紐を結びきって、走り出すように玄関から飛び出す。

そこには星空案内人の魔女がいて、案内する星空がその背に広がっていた。

4.

私の家からはいつも、一本の電波塔が見えていた。

赤と白のストライプの入った、東京タワーのミニチュア版のような電波塔。

夕日に浮かぶシルエットが特徴的なその塔は、夜になればライトが緩い間隔で赤い光を点滅させ、常に存在感を放っていた。

どこにでもある電波塔だったが、それはこの街で一番高い建造物でもあった。

小学生の頃、何とかして登ってやりたいと思っていた。

野望を胸に、友人と一緒にその根元まで向かった所、周囲に張り巡らされた鉄格子と有刺

鉄線に愕然とさせられた記憶を思い出す。

意識を戻す。視界には一面の夜景が眼前に広がっている。痛烈にぶち当たる風が頬を冷やし、コートの裾を強く揺らし続ける。

私は今、その塔の遥か上空を飛んでいる。

「うっ……ひゃあ——っ！」

思わず上げてしまった大声。爆発しそうな血流。興奮のあまり、このまま心臓がスタミナ切れを起こして死んでしまうのではないかと、そんな事すら思っていた。

上空600フィートの夜空。重力加速度に従って、私は地面と水平に落下し続けている。鋼鉄の翼も無く、燃料を爆発させる動力も無く、ただ重力に引かれるままに落ちていくという、無音の夜間飛行。

何にも遮られない、フルパノラマの夜景を見下ろす。

マンションの窓の明かり、商店街のイルミネーション、駅のホーム、街灯。黒のキャンバス上に無数の光点が輝いている。

コンクリートの模様、電信柱の落書きですら知っている町並みは、上空からでは別世界にすら見えた。

耳元では風音がごうごうと音を立てている。晩秋の夜風は痛いくらいに冷たかったが、溢れ出す興奮は勝手に痛覚を蚊帳の外へ追い出していく。

赤茶色の髪の毛が派手に暴れる。トレンチコートは、今にも脱がされそうなくらいの空気に抵抗に立ち向かっていた。

速度は上がり続け、道路を走る乗用車を簡単に追い抜いた。

二台、三台、四台……。次々に追い抜いていく。

私は多奈と離れないように手を強く握る。この手を離したら、私は地面と垂直の重力に引かれ、爆雷投下のような軌道を描いてしまうのだから。

極寒の空気抵抗の中、繋いだ右手だけが暖かかった。

「有希、寒くないですか？」

多奈は顔だけ向けて聞く。長い黒髪、黒のミディドレスが暴風に舞う。

右腕を包む霧のような青色の光が日中よりも強く輝いていた。速度に流されるように表面を僅かに削られ、光の粉末が夜空に青の軌跡を残していく。

「全然大丈夫！ それよりもさ、もつと下の方飛んでみない!!」

「分かりました」

瞬間、下向きの重力を感じる。今までひたすら地面と水平を描いていた軌道が放物線落下の軌道へと変わっていく。

下には車通りの少ない新4号国道がまっすぐに伸びていた。

仮にも四車線道路のためか、その道沿いにはそれなりに大きい店舗が所々に点在し、それぞれのネオンを輝かせている。

さらにその周囲には水田と畑と林が広がり、民家の明かりが所々に灯っていた。

まるで地図を見ていたかのような景色は少しずつズームアップしていき、道路脇のランプと同じくらいの高さまで高度を落とした。

重力は平行方向へと戻り、車と並走するように空中を飛行していく。

ランプが私のすぐ横を高速で何度も通過していく。一定のテンポで光は近づき、離れるを繰り返していく。

「ひゃ——っ、ほお——！」

急な坂を自転車で一気に駆け下りていくような、そんな高速のスリルと爽快感を何十倍にもしたような感覚に、思わず叫ぶ。

対向車線から走ってくる車が通り抜ける度に、風を切り裂く音が聞こえる。

しばらく飛んでいると、進行方向に水色で彩られた鉄骨の巨大なアーチが見えてくる。

新利根川橋と命名された巨大な鉄橋は所々がライトアップされ、周囲の闇の中でその存在をアピールしていた。

「よし、伊勢崎航空隊長——！ とつづけい——！」

「……了解です」

何のアクションも無く、慣性だけが左に曲がる。

高速で走る大型トラックの上へと移動し、同じ速度で飛び落ち続けていく。

土手の傾斜に沿って上昇する。

青色に点滅する信号を寸前でかわし、青色のアーチの下に入っていく。

周囲のライトが二人を強く照らす。中心から魚の骨のような形で伸びていく鉄骨を一本一本横切っていく度に、ライトの光は体の上を高速で通り過ぎていく。

橋の外には川幅百メートルを越す日本有数の河川が流れているはずだが、今見えるのはライトの輝きを映す黒の水面だけだった。

「ねえ、多奈！ あのだ、あのだ！」

「何ですか？」

「このままさ、海まで行ってみない!？」

もつともつと飛んでいたい。私の心にはそれだけしかなかった。

一番近くても、海までは約100キロの距離。今現在、恐らく80キロくらいの速度だから……と、数式を頭に並べ、1秒で計算を諦める。

「……、です」

対向車線に爆音を響かせるバイクが現れ、フロントライトの光を撒き散らしながら高速で過ぎ去っていく。

多奈の言葉は爆音に消されて聞き取る事が出来なかった。

「えー!? 何ー!? 聞こえなかったからもう一回ー!」

「だ、だから! ……あ、明日の朝食に、三里さんの作ったココアを出してくれるなら、いいです!」

自らの大声で顔を真っ赤にした多奈に、私は満面の笑顔で答える。空いた左手のサムズアップを添えて。

「あははっ、それならいつでもオーケー！」

横切る鉄骨も終盤にさしかかり、視界には鉄橋の先の景色が広がった。

少しだけ高い土手から見下ろす街並には住宅が立ち並び、窓の明かりが光点のように浮かんでいた。

鉄橋を抜け、今度は上向きの重力が発生する。

引かれるまま、私と多奈は夜空に向けて落ちていく。

風は強く冷たく、上空に向けて加速し続ける。

「ねえ！　そういうえば、あたし達が飛んでる所、他の人に見られまくったけど大丈夫だったのかな!?」

「大丈夫ですよ、有希」

視界の先には長い黒髪とその先の星空だけが見えた。

地面と真逆に落下し続けるという異常な状況の中、多奈は淡い笑顔で次の言葉を紡ぐ。

「人は、空を飛んだりしませんから」

* * * *

ひたすらに南下を続けている。

それがやっと分かったのは飛行：もとい、落下を初めて20分経った頃だった。

上空600フィートからの景色に、高層ビルやテレビで見た事のある繁華街が見え始めていた。

無駄一つ無く大地に建造物が敷き詰められた町並みは、夜になって輝き始める。

高層ビルを飛び越える。眼下の道路ではどうやら事故が原因の渋滞を起こしていた。海まで、あと少し。あと、40キロくらい。

ばらばらばら…。

闇の中、エンジン音が接近してくるのを聞いた。

足先から斜め下。体に響くようなその重低音は、巡航速度200キロ、航続時間3時間で、50メートル四方の平坦な場所があれば離着陸が可能、とある乗り物を連想させた。

音は明らかに、フルスピードでこちらに向かってきている。

「…有希、この音って…？」

「いやー、まっさか、さすがに、そーれはないよねー…？」

ゆっくりと後ろを振り向く。

ヘリコプターの運転手は獲物を狙うスナイパーのような視線を送り、その隣の席の男からは冗談めいたウインクを放つ。両手に構えたライフル銃の銃口を向けたままに。

よく見ると、ライフルを持った男は、夕方に多奈がぶんなげた盾を容赦なくこめかみにめりこましていた男だった。

二人揃って頬を引きつらせた。鳥肌が背筋を疾走した。

「……うっひやあああ——っ！」

寒いから、という理由で抑えていたスピードは一切の枷をはずし、落下速度は重力加速度に従って急激な上昇を始めた。青色の光は輝きと範囲を増していく。

顔面に叩きつけられる風は痛いほどに冷たく、お気に入りのトレレンチコートは千切れてしまいそうな程に暴れ回る。

ぱしゅんっ。圧縮した空気を抜くような音と同時に、弾丸が耳の脇を音速で通り過ぎる。「振り切ります！ 絶対に手を離さないで下さい！」

風音とエンジン音だけが聴覚を支配する中、切迫した多奈の声を何とか聞き取る。

重力の方向は上向きに変化し、更に高度を上げていく。視界の先にはフルパノラマの星空が広がっている。ショートボブの赤茶髪が暴風に流れた。

言葉に従うように、右手に力を入れる。

空撃戦が、始まる。

5.

180度ロール。背面飛行のままループ軌道を描いて真っ逆さまに落下し、180度下方に向けて飛ぶ。

この、戦闘機用の空戦機動をスプリットSと言う。

特徴は、上方に向けて180度方向を変えるインメルマントーンに比べ、重力の効果で素早く向きを変えられる事。そして、強烈なGが掛かる事。

夜景の広がる大地を“見上げる”というのは初めての経験だった。軌道が変わる度に世界はぐるぐると回転していく。

「よっしゃー！ 次はバレルロール行ってみよう！」

「落ち着いて下さいっ！」

既に二人の落下速度は時速200キロを超えていた。空気抵抗と重力が均衡し始め、最終落下速度に限りなく近似していく。

ヘリコプターと並走する私達は、星空に青光の軌跡を描きながら、地面と水平に落下し続ける。

旋回するヘリコプターのエンジン音。最大速度の違いか、少しずつ差が縮まってく。

「甘い！ 空を制するのはスピードじゃなくて、空戦能力だって事をその脳みそに刻ませてやるっ！」

「盛り上がらないで下さいっ！」

弾丸が脇を通り過ぎる。

もはや寒さは感じている余裕なんて無かった。首が痛くなりそうな程の空気抵抗が顔面に叩きつけられるけれども、私は前方を見つめ続ける。

今度は上方へとループ軌道を描く。世界が縦に流れる。ひゅううー、と風の音が聞こえた気がした。視界に一面の星空が広がる。

ひねりを加えて水平飛行へ移る。

再度Uターンをかけられ、ヘリコプターの運転手の顔が悔しげに歪むのが見えた。

「ねえ！ 何とかしてヘリコプター落とせないの!？」

「破壊するだけなら10秒もかかりません！」

多奈はあっさりと言い切り、さらに続ける。

「空中で破壊するのは簡単です！ しかし、落下した機体が爆発炎上して、無関係の人を巻き込んでしまう事だけは全力で避けます！」

風音がやかましく鼓膜を叩く為か、1メートルも離れてないのに多奈は大声を上げていた。

「じゃあ、どうする!？」 燃料切れでも待つてみる!？」

「その案は使いません！」

「何で!？」

「三里さんが、帰りの遅い有希を心配するからです！」

真顔で言い切る多奈に、思わず目が丸くなる。命の危機かもしれない事態で、そんな事を考えていたとは思わなかった。

そんな作戦会議を邪魔するように、ヘリコプターのエンジン音は近づいてくる。

「多奈！ とりあえず今は、ビルの間を飛び回って追手を撒くって案はどうよ！」

「賛成です！」

多奈の右腕から光が一瞬にして消え、正常な重力による落下を開始する。

胃の中身が上に引っ張られるような、上向きの強烈な慣性。頭の中が真っ白になる。

高度は下がり続け、眼下に広がっていた光点の群れが高層ビル群だと分かる程に近づいていく。

その先には海が広がっているのを私は知っていた。旅行ガイドブックでお馴染みとなっている、何もかもが真新しい港町が眼下に広がっている。

車輪全体を赤いネオンで輝かせる観覧車。国内最長と謳われる巨大なタワービルには法則性の無い明かりがストライプ状に灯っている。

そのタワーの下には、観光用の帆船がコンクリートで囲まれた水面に浮かび、煌びやかにライトアップされていた。

街路樹すら電球を巻き付け輝く、夜景の街。

コンクリートの断崖で囲まれた海だけが闇の中に沈んでいる。

「多奈！ ここって超有名な観光地なんだよ！ おみやげ買って帰ろうかー!!」

「後にしてください！」

多奈のツツコミに切れが出てきたのを確信しつつ、近づいていく夜景に見惚れる。光点の集合というよりも、街全体が光を放っているような圧倒的光量に頬が緩む。

下向きの速度は加速していき、高度は10メートルを下回った。

テニスコートが4つ入りそうな駅前広場には、碁盤目状に設置されたお洒落な街灯が光を放ち、その下でストリートミュージシャンがギターを掻き鳴らしている。

コンクリートの地面が視界の半分を覆う。衝突まで、あと1秒以下。

「た、多奈っ！　ぶつかる！　ぶつかるって！」

落下は続き、鼻先と地面が20センチの距離まで近づいて、そこで初めて落下軌道は水平へと移行する。

時速200キロでコンクリートの上を滑るように飛んでいく私達を、仕事帰りのサラリーマン達が咄然とした顔で見つめていた。

後ろを振り向けば、ワンテンポ遅れてヘリコプターが地面ギリギリを滑走していた。

駅前広場は一瞬にして騒然となるが、お構いなしに騒動の元はすぐさま飛び去っていく。右に旋回し、超低空飛行で爆風を撒き散らしながら、ビル街の歩道を飛び落ちていく私達を追いかける。

「こ、怖あ……」

「口は閉じていて下さい！　舌嚙んでも私は治療できません！」

手を伸ばせば届く距離で、コンクリートの歩道が高速移動する。道沿いにはコーヒー店やケーキ屋といった可愛らしい店が並び、イルミネーションが輝いている。

その中、カップルや仕事帰りのサラリーマンがまばらに歩く歩道を、人の間を縫うように飛び落ちていく。

飛び去った後には驚きと悲鳴が残されていく。その音量は、追跡するヘリコプターの爆音でかき消されていく。

「あ、危ないっ！」

歩行者用信号は赤だった。車も落下も急には止まれない。交差点に差し掛かり、右から車が向かってくるのを寸前で左旋回してかわす。急ブレーキとクラクションの音が鳴り響く。そのまま少しだけ高度を上げ、ビルの側面に沿って飛ぶ。窓越しの光が何度も私と多奈を通過していく。

後ろを見れば、ヘリコプターは周囲をビルに囲まれながらも器用に左折してみせた。

「た、多奈！ 何か拍手したい位に見事な操縦で付いてきちゃってるんだけど!!」

「予定外です…。まさかこんな狭い所まで着いてくるとは思いませんでした…」

乗用車を簡単に追い抜きながら、谷のような高層ビル街を飛行し続ける。電飾を体に着込んだ街路樹が何本も横切っていく。

立体交差のような歩道橋の下をくぐり、ヘリコプターはその上を跨ぐ。人とヘリコプターのドッグファイトに、歩行者の悲鳴と騒音が軌跡のように広がっていく。



スピードを上げていく。風を切り裂く音が耳に響く。

周囲の建物は暖色の光に照らされた赤レンガの建物に変わり、突き当たりには客船ターミナルと書かれた建物が聳え立っていた。

多奈は空中で前転するようにくると一回転し、足を下にしながら落下を行っていく。手を繋いでる私も自動的に同じように回った。

客船ターミナル入り口前のコンクリートを音が鳴るくらいに蹴る。

跳躍距離は30メートル。

ターミナルを飛び越えると、視界が一気に開ける。

その先には海が広がっていた。一面の暗闇に、体を電球で包んだような豪華客船が浮いている。

「多奈、このまま国外逃亡しちゃおかー!?」

「する気はありません!」

体を90度ロールして左に旋回していく。

暗闇に、輝く滑らかな半円の軌跡が描かれていく。

180度反転すれば、先程走り抜けた夜景の街が一望できた。一部では騒然としている事など感じさせないほどに、夜景はただ静かに輝いている。

「多奈っ、前方のグランドホテル2つをSの字で抜けてみよう!」

並んで建つ40階建てのホテルを指差す。

「何故ですか!？」

「え、えと、目隠しになるんじゃないかな！」

「なるほど！」

実は「S字決めたらかッコイイ」なんて理由だって事はここだけの秘密。

白一色のグランドホテルの窓には斑模様光点の輝き、下からの強烈なライトアップが闇夜の中で存在を主張している。

一直線に突撃する。落下速度は減速した分を取り戻し始めていた、後ろにはヘリコプターが律儀に追ってきている。

白色の壁にぶつかる数メートル前で、軌道を一気に左へ捻じ曲げる。

壁に当たる寸前まで接近しながら、その周囲を飛び落ちていく。

数十枚の窓ガラスを通過して、今度は右旋回。ヘアピンカーブが外向きの強烈な遠心力を生む。

息つく間もなく、2つ目のグランドホテルの右側へと飛行し、通り過ぎたと同時に左旋回。体を完全に横に傾けた状態で、滑る様に180度のカーブを曲がりきる。

戦闘機でも仰天するような、見事なS字カーブだった。思わず、二人揃って息を吐く。しかし。

ばらばらばらばら…。

聞き慣れたエンジン音。二人揃ってゆっくりと振り向く。

ヘリコプターのフロントガラス越しには、操縦桿を握った男が血走った目でこちらを睨みつけていた。その表情は若干の笑顔すら浮かんでいて、凶器じみた雰囲気周囲に撒き散らしている。

もう片方の窓からは、ライフル銃を持った男が半身のみを外に出してこちらを狙っている。

「うあー…。きつとあのパイロット、操縦桿を持つと性格変わるタイプだよ」

「あんな破天荒な操縦すれば、誰でもああなるのでは…」

そういえば、私の従姉妹のお姉さんはハンドル持つと性格変わるんだよ…と言おうとしたところで、視界に赤い光が飛び込んだ。

視点を前方に戻す。

そこには赤色のネオンを輝かせる巨大な観覧車が、まるで巨大な盾のように待ち構えている。円の中には巨大な電子時計が埋め込まれており、今が21時43分である事を周囲に伝え続けている。

「た、多奈っ、ストップ！ ストップ！」

「えっ…？」

接近する。多奈が顔を向けた頃には、既に50メートル程の距離にまで近づいていた。時速200キロに近いスピードが、その距離を一瞬にして縮めていく。

大急ぎで右旋回する。しかし、スピードによって発生した強烈な遠心力を操作し切れなかったのか、慣性が私達を観覧車の方へと容赦なく引っ張っていく。

巨大電子時計が目の前に接近する。赤色の数値は丁度44分へと変わった。ぶつかる。そう思った瞬間。

「…ごめんなさいっ！」

ばきいっ！

多奈は巨大電子時計の液晶画面を思いっきり蹴り碎いていた。まるで雪を巻き上げたように、細かく砕けた画面の欠片がスローモーションで舞った。

その勢いを得て、沢山のカップルを搭載した観覧車を横切っていく。間近で見るネオンは眼球に厳しかった。

「多奈、これじゃ埒が明かないっ！ これ以上観光地をぶっ壊すのは、観光大好きっ娘として心が痛いぞ！」

「そうですね…。…仕方ありません、武力行使を考えます」

「あのでっかい刀で一撃？」

「いいえ。あのヘリコプター内を制圧し、安全な所に降ろします。これがベストの手法です」
多奈は手短かに手順を説明する。

手順と言っても、ヘリコプターのドアを巨大直刀で叩き割って、中にいる操縦者以外の人間を戦闘不能にし、安全な所に降下させるという、物凄くシンプルな作戦だった。

この作戦の重要ポイントは二つ。一つは、その制圧する場所を海上としなければならない事。もし操縦者が暴れて墜落したとしても、被害を最小限に抑えるため。

そしてもう一つは、ヘリコプターの後ろを取って、ドアまで接近しなければならない事。観覧車を横切り、ジェットコースターのコースをくぐる。視界には、コンクリートで囲まれた湖のような海が広がっていた。

前方には、早くも騒動から回復したらしい駅前広場。

左には先程走り抜けたビル街が見える。

右手には日本最長のビルタワーと、ライトアップされた帆船。

夜景に囲まれ、ひととき夜の闇に包まれている湖には一直線に橋がかけられ、駅前と遊園地を繋いでいた。

「：あそこでターンして、あの場所でループして…。うん、うん。　　よーっし！　これならいける！」

私は、夢にも出てきた程にプレイしすぎたフライトシミュレーターゲームの画面を頭の中に展開していた。三次元の箱の中を、自分達とヘリコプターが軌跡を残して動いていく。相手の背後を取るための空戦機動をシミュレートしていく。

「有希？」

「よーっし、計算完了！　多奈っ！　騙されたと思って、あたしの言うとおりに飛んで！」
多奈の回答は接近したヘリコプターの音にかき消された。ライフルから弾丸が発射させる音が聞こえる。

回答はイエスだったと勝手に信じ、多奈に大声で指示を飛ばす。

「急降下！ 水面ギリギリを飛んで！」

軌道が一気に垂直降下へと変わり、水面に激突する寸前で水平軌道へと戻る。

ホバー船のような水面ギリギリの高速飛行。切り裂いた風が水面に水柱を作る。

突然の飛行物体に驚いたカモメが散り散りに飛んでいった。

水面に水柱の航跡を残しながら飛ぶ私達の前に、橋が迫ってくる。

コンクリートブロックを積み重ねたような橋は複数のアーチを描き、一つ一つは小船がやっと通れる程度。

「橋の下をくぐって！」

指示通りに橋の下へ突入する。視界が黒に染まる。見た目よりもずっと狭く、少しでも頭を動かせば、高速で動くコンクリートに頭蓋骨ごと削られてしまうような気がした。

一秒もかからず橋の下を通過する。目の前には高層ビル群が立ちふさがっていた。

「はいっ、ここで180度ターン！」

水面から跳ね上がるように、上空に向けてループ軌道を描く。

追いかけていたヘリコプターを真下に捕らえた位置で、水平飛行へと戻す。

「今度！ あのタワーに突撃！ 寸前で急上昇！」

「は、はい！」

日本最長を誇る、300メートルのタワーを指差す。

後ろでは、何とか方向転換を終えたヘリコプターが追跡を再開していた。

数百メートルの間隔は少しずつ埋められていく。

周囲からの煌びやかなライトを浴びる観光用帆船を飛び越えると、灰色のタワーは寸前にまで迫っていた。駅とタワーを繋ぐ歩道から、突撃してくるヘリコプターを見つけた人々による思い思いの悲鳴が響いてくる。

落下軌道は一気に垂直に曲げられる。

空に向けて長く続くタワーの表面はカタパルトを連想した。

視線の先には夜空が広がっている。窓ガラスからの光が何度も通過していく。

速度は毎秒加速していく。強烈な空気抵抗に、顔面が冷たくなっている事を今更ながらに気づいた。

視界が一気に開ける。

日本最長のタワーを5秒で登り切った私達の前には、一面の星空だけが広がっていた。

距離感の全く掴めない光景。強烈な浮遊感と感動。

「90度ターン！ さっきの湖っぽい所に戻って！」

指示を飛ばし、背面のまま後方へと軌道を変更する。視界の先に、逆さまになった夜景が映った。

エンジン音は相変わらず、しっかりと私達を追ってきている。

ひっくり返った世界が戻り、先程の湖のような海、その先の橋や高層ビル街が見えた時、私は最後の命令を飛ばした。

「ここでループ！ 空中宙返り！」

視界が一気に縦に流れる。視界一杯の星空を見て、夜空に青色の円を描いた時には、丁度私達が飛んだ場所をヘリコプターが通過していた所だった。

完全に後ろを取っていた。そして、ヘリコプターまでの距離は数メートル。

女子高生パイロット遠野有希、初空戦、大成功。

「いよつしやあーっ！ どうだ多奈！ あたしの操縦テクニクに惚れるなよー！」

多奈の驚きっぷりが非常に心地よかった。左手の人差し指をターゲットに向けて叫ぶ。

「よし、多奈！ 後は任せたよ！」

「はい！」

ヘリコプターとの距離が少しずつ縮まっていく。数メートルという所で、多奈は空いた右手を前にかざした。

「貴方の策略に感謝します！」

溢れ出す閃光。

光が止む頃には、多奈の右手には3メートル近い直刀が握られている。腕を包む青色の光は刀身を廻り、神秘的な輝きを放っていた。

「不思議だったんだけどさ、その刀ってどうやって取り出してるの？」

「秘密です！」

力強い断言にツツコミを入れる暇も無く、ヘリコプターのサイドドアに接近する。

フロントガラス越しには驚いた顔が二つ並んでいた。多奈は直刀を上段に構える。

「てやあああああ——っ！」

ガキイイン！

鉄の塊が思いつきり振り下ろされ、ドアから火花が散った。頑丈なはずの鋼鉄は、振り下ろされた刀の形に落ち窪む。

ヘリコプターがその機体を大きく揺らす。フロントガラスに一筋のヒビが走る。

多奈は再度、直刀を上段に構えた。

振り下ろす、その瞬間。

サイドドアが突然開く。その先にいたのは、ライフルを構えた男。

一瞬だけ、多奈の動きが止まった。振り下ろす直刀が停止した。

それは僅かな、瞬き程度の一瞬だったが、トリガーを引くには十分な時間だった。ぱしゅん。

圧縮空気が弾丸を打ち出す。高速で打ち出された弾丸は多奈の喉に突き刺さった。

白く、長細いダーツのようなフォルム。先には針が付いており、半分以上が多奈の喉に刺さって揺れている。

「……っ！」

多奈は直刀を投げ捨て、針を抜き取る。

そして、その右腕に青色の光が無い事に気づいて、顔を蒼白にした。

「蒼腕の魔女と言えど、案外あつけないものですね！」

ライフルを持った男の顔が笑顔で歪む。思わず、勝ち誇ったその顔に拳を叩き付けなくなるような笑顔だった。

自然落下。

重力は正常に戻り、私と多奈は自然界の法則に従って落下を始める。

ヘリコプターから離れていく。下には真つ暗な水面が静かに待ち受けている。時間がゆつくりと流れていく。

頭から真つ逆さまに落ちていく中で、私は広がる夜景を見つめていた。

逆さまに映っていたが、それでも街全体が夜の黒をバックに輝く姿は、幻想的で綺麗だった。

——受験終わったなら、絶対観光に来てやる。

静かな海に、水柱が立った。

6.

「…あつけない。非常にあつけないと思いませんか、蒼腕の魔女？」

「…すうー…。すうー…」

「……はああ…」

答えは寝息だった。その相槌は溜息だった。

私と多奈は、電車の座席に並んで座っている。

窓越しの景色から、先程の夜景が高速で遠ざかっていく。ガタガタと縦に揺れる度に中吊り広告が揺れた。

多奈の頭が肩に乗ったまま、私は背もたれに寄りかかり、全力の溜息をついた。

落下の寸前。

巨大直刀が水面に大きな水柱を立てた後、多奈は全力を振り絞って落下軌道を変えた。水面ギリギリを飛行して、コンクリートの大地に叩きつけられるように着地する。

倒れたまま、多奈は早口で状況を説明した。

さっきの弾丸には一時的に能力を封じる薬と、睡眠薬が入っていた事。自分はここに置い

ておき、その隙に私は逃げる事。

それだけを言つて、小さな呻き声と共に多奈は顔を伏せた。

「た、多奈っ！」

「…すう…」

思わず叫んだ私に、帰つてきた言葉は寢息だった。

分かつていたものの、少しだけ肩透かしを食らつた気分になつたのは正直な所だった。

その後の展開はもはや喜劇じみていた。

勿論、多奈を置いていくという選択肢を選ばない私は、多奈を背負いながら海近くの階段の影で息を潜めていた。

そこに、先程のスーツの男が二人現れる。ヘリコプターは何処かに無理矢理着地させたようだ。

耳を澄まして、会話を聞き取る。

「…平塚主任。海に落ちちゃつて、そのまま沈んだままだったら捕獲部隊の意味が無いじゃないっすか…」

「効き目が良すぎた。二宮隊長の話では、すぐに効果が出る事はないと聞かされていたんだ。不時着する魔女を捕獲するというプランにおける対応としては間違っていない。それにだ、

早川。俺が撃たなければ、今頃俺らは蒼腕の魔女に半殺しにされてたぞ？」

「そりゃ、そうっすけど……」

夜景をバックに、二人は静かな海を見ながら深い溜息をつく。

「蒼腕の魔女、上がってこないっすね……」

私は会話も途中で立ち上がり、その場を後にした。そこから逃げ出すのは、多奈を背負ったままの状態で改札を抜けるよりも断然簡単だった。

「……っつかれたあ……」

思わず呟く。

相当な距離を飛んだようで、家に帰れるのはこれから一時間半後となりそうだった。ぐっすりと眠る多奈の体温を肩越しに感じる。

電車は走る。この電車も上空から見れば一つの光点でしかないかもしれない。瞼を閉じる。

未だに空を落ちる感触が体に残っていた。風が頬を通過するイメージを感じていた。夜を走る電車は今日も、人々をそれぞれの居場所へと運んでいく。

車掌によるアナウンスが聞こえる。知らない駅名が車内に響いた。

時折揺れる車内。椅子の感触が心地よく、足に吹き付ける暖房が少しだけ熱かった。



伊勢崎多奈による謙虚で律儀な情報戦

Escape 3.

1.

次回予告！

魔法のツナ缶を露天商のオジサンから買い取った有希ちゃん。

蓋を開けるとまあ不思議！ 溢れ出すサラダ油の香りと共に、フリル満載エプロンドレスに魔法ステッキのまぢかる☆ゆきちゃんに大変身！

魔法の力で地球の平和を守ります！

山一つ消し飛ばす”まぢかるどろっぷきつく”が今日も無実の民家に炸裂するっ！

ある日、憧れの先輩が尿道結石と慢性関節リウマチで入院した事を知った有希ちゃん。

先輩の大好きなワンカップ酒を持ってお見舞いに行こうとする有希ちゃんだったが、病院は既に悪の軍団ニョッカーによって占拠されていた！

どうする有希ちゃん！ そして、先輩の結石の行方は!?

次回、『デッドリーエンジェルまぢかる☆ゆきちゃん第五話、『爆発炎上！ さよなら先輩…』夢オチ編』をお楽しみに！

「来週も絶対見てねっ！ 見ないとお前ん家燃やすぞ！」



決めポーズをカメラに送る。ウインクのタイミングや人差し指の伸び具合まで完璧。その先には、フリル満載の黒色エプロンドレスを着込んだ多奈が立っていた。

「お、多奈。やっほー」

「……」

多奈は答えず、右手を高々上げる。その手にはいつのまにか、巨大な直刀が握られていた。

「そ、それは、まちがる直刀!？」

そう、伊勢崎多奈は実はニョツカーの手先で、魔法美少女の私を狙っていたのだ!

そのまま巨大な直刀は振り下ろされ、私の視界は真っ暗になった。消えかかる意識の中、多奈の声だけが最後に聞こえる。

「貴方の安眠に感謝します」

* * * *

夢だった。

目覚まし代わりのMDコンポから、シヨパンのワルツ第1番変ホ長調作品18「華麗なる大円舞曲」が爆音のように流れていた。

耳が悲鳴を上げつつも、包み込む布団の温もりがしっかりと私を離さない。

「うー…。リモコン、リモコン…」

寝ぼけた頭で、MDコンポのリモコンを探す。

探すと言っても、ベッドから腕を出してぶらぶら動かすだけだったりするのだけなので、見つかるわけがないのだけれども。

脇を僅かに開けると、机の上に見慣れた灰色のリモコンが見えた。

その間は2メートル。

腕を伸ばしても届くはずのない距離だったが、布団様は私を包んで離さない。

寝ながら腕を伸ばす。指の間の先にリモコンが見える。爆音がファイナーレへと向かっていき、さらにボリウムを上げていく。

「ううー」

私の腕が自由自在に伸びない事を恨む。リモコン君も、もう少し私に対して優しさと誠意と言うものがあってもいいんじゃないかと思う。

私はこのまま二度寝がしたい。本能の赴くまま、惰眠を貪りたい。

今日は月曜日なので普通に学校があつたりするけど、目の前の睡眠欲にとつては些細な事に過ぎないのだ。

来い。私の手の中に飛んで来い。リモコンに向けて念を送る。

この爆音を消し去るには、リモコンから発射される電磁波が必要なのだ。布団から出たくない私にとって、それは必要不可欠なのだ。

腕を伸ばし、指の間の先にリモコンを捕捉しながら、念じる。

「…リモコン、来い」

来た。

机の上にあつたはずのリモコンは瞬間的に姿を消し、私の右手の中に移つていた。

早速私は赤色の電源ボタンを押し、爆音を退治して、再び臉を閉じる。

ああ、何て布団は暖かいのだろう。何て静寂は心地よいのだろう。ありがとうリモコン。全ては君のおかげだ。

温もりの中、意識は夢の世界へと落ちていく…。

……。

……。

…あれ？

上半身ごと一気に跳ね起きる。派手に布団がめくれ上がった。

「なーんか今、ものすつこい事が起きちゃった気がするー！」

どたどたどたどた。遠野家の階段は今日も重低音を家中に響かせた。

「大変だ大変だー！」

階段を大急ぎで降り、ダイニングキッチンへと繋がるドアを豪快に開ける。

「どうしました、有希？」

そこにはキッチンに立つみーちゃんと、可愛いクマのプリント。パジャマを着こんで優雅にココアを飲む多奈の姿。窓から差し込む朝日が平和な朝食の風景を演出していた。

トーストの香ばしい匂いが届く前に、私は満面の笑顔とVサインを突き出して言い放つ。「あたし、超能力に目覚めちゃいましたーっ！」

私の元氣一杯ぶりに着いていけず、マグカップを口につけた状態で目を点にする多奈。そのマグカップに向けて、私は右手を突き出す。目一杯手を広げ、人差し指と中指の間にターゲットを入れて、念じながら言葉を放った。

「レッドスネークカモン！」

呪文は確実に間違っていた。けれども、瞬間的に私の右手には多奈のマグカップが握られている。

少しぬるくなっていたココアを一気に飲み干す。

笑顔にサムズアップを添えた時、多奈の吹き出したココアが朝日に輝いた。

* * * * *

11月25日、月曜日。午前7時。本日も渡瀬町の空は雲一つ無い青色を広げていた。冬に向かいつつある風は冷たく、黄色のイチョウが原色の青空に舞っては綺麗なコントラ

ストを描いている。

窓から差し込む朝日は部屋に輝きを与え、朝食のパンを一層美味しそうに際立たせ、テーブルクロス上に描かれたココア色の模様を目立たせていた。

朝のさわやかな食卓がテーブル上に展開されている。

焼きたてのバターロール、淹れたてのコーヒー。キャベツとベーコンのコンソメスープから湯気が立ち上り、手作り苺ジャムの甘酸っぱい香りが漂っていた。

多奈は千切ったバターロールにバターを塗りたくる。塗りすぎて山のようになっているバターを、みーちゃんは興味津々な様子で見つめている。

「信じられません」

「そうは言ってもさー」

そんな多奈の前に、私は右手を突き出す。

指の間の空間に捕捉したバターナイフが一瞬で多奈の右手から私の右手へ移動する。

「…信じたくありません」

「多奈ちゃんってば結構頑固だったのねー」

みーちゃんがほのぼのと言う。そんな笑顔の遠野親子を見て、多奈は盛大に溜息をついた。

「…こんな事態はイレギュラーです。未だかつて、後天性の能力者なんて見た事も聞いた事もありません」

「あははっ。現にここにいるんだから認めようよ多奈。真実はいつも一つだよ？」

奪い取ったバターナイフでバターを塗りつけ、食べる。17年経っても食べ飽きないシンブルな味わいが口の中に広がる。

「…有希。何で有希はそんなに陽気にしていられるんです？ 目覚めたらいきなり超能力が使えるようになっただなんて、異常だと思いませんか？」

「うーん…」

確かに多奈の言う通りなのかもしれない。

朝起きたら超能力者になる確率なんて、商店街のくじ引きの一等賞でハワイ旅行。ペアチケットを取る確率の数億分の一…あるいはゼロなのかもしれない。

ただ。怖いかと言えば、全く怖くない。何と言うか、この能力が自分のものという感触がないのだ。

能力の根源が私以外の所でふわふわ浮いていて、私はそれを少しだけ借りているような。そんな漠然とした感触だけを感じ取っている。

何故かと考えれば、それは分からなくて。

ただ“そういうもの”だと、何処かで理解している。

そして、それ以上にワクワクする。他の人には味わえないものを自分が楽しめるという事実の方が私にとって大きかった。

我ながらお気楽だなと感じるが、私はそんな私が好きだった。

「面白いから問題無し！」

「そんな簡単な…」

額を手で押さえる多奈を見ながら、バターロールを口に詰め込む。そのまま、椅子から立ち上がる。

「もうっ、もうっもうっ！」

「有希。ちゃんと飲み込んでから喋りなさい？」

飲み込む。

「思ってたんだけど、この能力ってさ、人も動かせるのかな？ …ね、多奈。ちょっと立ってみて」

「…はい」

少々不安そうに、多奈が椅子から立ち上がる。私は、そこから2メートル程離れた位置に移動した。

「すうっすうっ」

深呼吸を一つ。心を静かに落ち着けるために、昨日見ていた星空を頭に描く。思考をシャープにしていく。

体を横向きにし、右腕をまっすぐ伸ばす。右手を開き、不安そうな表情の多奈を人差し指と中指の間の空間で捕捉する。

——多奈が昨日、能力の使い方は人に説明出来ないって言ったけど…確かにその通り。能力発現におけるイメージを見る。実際の映像ではなく、あくまでも私だけのイメージ。

背景は全て黒に塗りつぶされ、私と対象……多奈だけが浮かび上がる。

——行けっ。

始まりは右肩からだった。薄い緑に輝く小さな三日月形の光が生まれ、私の右腕の上を滑るように飛んでいく。

光は指の間でホップし、対象へ向けて滑空を行う。滑らかな光の放物線が空間に描かれる。
——戻れっ。

三日月形の光は多奈の胸元にぶつかり、今度は私の方へ戻っていく。多奈の胸元には僅かな光点が輝いていた。

そして、三日月は私の手元まで戻り、壁にぶつかったかのように粉々に飛散する。小さい花火のように鮮やかな光の粉末が煌いて落ちていく。

——よし、成功。

時間にして1秒も掛かっていない。そんな瞬間的なイメージが終わると、私の目の前には多奈が立っていた。

移動位置の設定に失敗したのか、唇が触れ合いそうなくらいの至近距離。

逸らす場所も無い程に接近した視線が合わさる。突然景色が変わった多奈は驚きに目を見開いて驚き、同時に顔を真っ赤にした。

「実験成功っ！」

私の笑顔と同時に、多奈は腰が抜けたように座り込む。

「ち、近すぎます…」

「あははっ。ごめんごめん。まだまだ不慣れでさー」

あまりに驚いたのか胸を押さえて俯く多奈。私は右手で頭を掻こうとした。その時。

「…ん？」

ぬるつとした感触と共に、右手がひどく濡れている事に気づく。確かめるように右手を目の前に持ってくる、そこには。

血まみれの右手。

「……………う、うふええええええええ——!?」

「ゆ、有希？」

多奈が見上げる。その時、多奈の頬に血の雫がぼたりと落ちた。

指で拭い、その色を見て、顔を青ざめる。

「有希！こ、これは一体!？」

「いや、あたしにも何が何だか…」

ぴゅー。

その瞬間。注射器を思いっきり押し込んだような勢いで、こめかみから血液が軽快なア—

チを描きながら発射された。

爽やかな11月の朝。外には原色の青空と、黄色に色づいたイチョウが風に踊っていた。輝く朝日は街を照らし、空には小鳥の囀りが響く。そんな、雲一つ無い平和な朝の青空の下で。

床に血液の斑点が描かれる。

血に濡れた遠野家の食卓に、多奈の悲鳴が響き渡った。

* * * * *

「要点をまとめます」

「はい、先生」

いきなりの血液噴射事件から二十分後。大急ぎで拭いた床には血痕一つ無い。

べつとりと髪についてしまった血液はシャワーで落とし、ついでに私はブレザーの制服に着替えている。

多奈も、いつもの黒ミディドレスに身を包んでいた。

朝日がココアと血液の跡を残したテーブルクロスを照らしている。みーちゃんが隣で小さく、「買い替えね…」と呟く。

いきなり噴射した血液は大した量ではなく、すぐさま止まっていた。

ただ不思議なのは、血が出ていたのに一切の傷口が無かったという所。

「信じたくないですが……。いきなり今朝に現れた有希の能力は、離れた場所にある物を移動させるという能力のようです。そして……」

「使いすぎると、血がぴゅーつと出ると！」

「元氣よく言わないで下さい……」

盛大な溜息。

「……とにかく、この能力は危険です。使わないで下さい」

「おうー！ 用法、用量を守って正しく使うから安心しろっ！」

「だから使わないで下さいっ！」

多奈は思わず上げてしまった大声に照れるように、小さく咳き込む。

「……とにかく。危険すぎるので今後、この能力を使う事を禁じます。いいですね？」

「ええー？ やだやだー。っーかーいーたーいー！」

子供のように駄々をこねる私。多奈はゆっくりと右手を突き出して、直刀を呼び出した。

「……………」

「わ、分かりました！ 不肖遠野有希！ 能力は使わないであります！ サー！」

直立して敬礼する私に、多奈はいまいち信じられないような視線で見つめていた。

* * * * *

「行つてきまーす！」

飛び出すように玄関を飛び出す。朝の騒動のためか、登校時間はかなり切迫していた。
——何かあたし、昨日っから走りっぱなしだなあ…。

駅までの道のりは徒歩で15分。走れば10分。12分後に発車する電車に遅れば、間違ひなく遅刻する。

大して何も入っていない鞆を振り回し、制服のスカートを風に揺らしながら、イチヨウの舞う街路を走っていく。

緩い下り坂を一気に駆け下りながら、上空に広がる青空を見上げた。

昨日、自分がこの空を飛んでいたのだと思うと、頬が緩んでしまうのを抑えられなかった。

——今日もきつと、楽しい事があるに違いないっ！

強く大地を蹴り上げる。

そうすれば重力が変わって飛んでいけるんじゃないかと、そんな事を考えていた。

2.

——無理だ。今は出来ない。

よくある公立高校の教室。中年教師の声がけだるく響く中で、千年谷高校三年C組26番である楠木遙は微分方程式の計算を諦めた。

決して、解けないからというわけではない。彼女は赤茶髪の幼馴染と違い、授業を真面目に受けているので成績は常に上位だった。

ポニーテールにまとめた髪を揺らし、窓際の席を見つめる。

そこには、幼稚園からの幼馴染である遠野有希が、

「うへ、うへへへ……」

頬杖をつき、窓の外を見つめながら口元をだらけさせまくっていた。正直な所、怖い。

有希の奇行は今に始まった事ではないが、それでも気になって仕方がなかった。授業に集中なんて出来そうに無かった。

「ね、ねえ、可奈……」

周りから「大人しい子」として評される遙に、二席分離れた有希に話しかける勇氣は無く。前の席に座っている宇奈月可奈の肩を叩くのが精一杯だった。

宇奈月可奈は、同性ですら憧れるくらいに長くて綺麗な黒髪を空気に踊らせながら振り向く。

「ん？ 遙、どしたの？」

シャーペンで有希を指す。可奈は小さく、「うわあ…」と声を出した。

「何？ 有希ってば、ついに受験勉強の果てに壊れちゃったの？」

「そ、そんな事は無いと思うんだけど…」

少なくとも、昨日の昼に電話をしていた時はあんな状態ではなかった。散々と受験勉強の文句は言っていたが。

そしてそれ以上に、遙は幼馴染に対して一つの確信を持っている。

——有希は、おかしくなるほど勉強をするような子じゃない。

失礼な確信ではあるが、実際の所、この幼馴染の確信は正解だったりする。

「何か変なものでも食べたんかな？」

「犬じゃないんだから…」

数学教師からの注意が有希に向けて飛んだ。結果的に三回目の注意でやっと反応した有希の台詞、

「起きてます！ 話は聞いてませんっ！」

は、教室内に若干の笑いと苦笑を生み出していた。

結局、楠木遙は幼馴染が空を見ながらニヤニヤしている理由を知る事は無かった。

例え、休み時間に、

「そーいや知ってる？ 昨日、渡瀬駅前のハンバーガーショップの窓ガラスがど派手に吹っ飛んだんだって！ 爆破テロってやつかな？」

そんな情報が入ってきたとしても、

「へえ……」

といった、何とも普通の返答を返していた。

例え地元であろうと、彼女にとってそんな話は遠い世界の話にしか聞こえなかった。

そういう事が起きているのは分かる。けれども、それは自分とは一切関係ない事なのだと、そう思っていた。

だから。幼馴染がその事件の当事者で、今さっきはその事を思い出していたなんて、考えもしなかった。

窓越しの席。赤茶髪の幼馴染は空をぼんやりと見つめ、時折頬を緩ませていた。

* * * * *

「体育だー！ 授業という名目の下、散々遊んでやるのだー！」

「堂々と言うことじゃないと思うよ……」

視界にはイチヨウ並木が続く昇降口。

幼馴染である楠木遙の小言は一切気にせず、授業で凝った体を伸ばしながら空に吼えた。晩秋の青空は深い青色を広げている。

11月も終わりということもあり、体操着では若干肌寒い。

「そーいや、今日の体育は何やるんだっけ？」

「えーと…。確か、ドッジボールだったかな」

「よし、全員残らず皆殺しだー！」

「殺すなっ！」

ホイッスルの音色が高らかに響いた。

皆、受験勉強の鬱憤が溜まっているのかもしれない。そんな事を考えるくらいにドッジボールは白熱していた。

飛び交うボールは、乙女が放ったとは思えないほどの殺気と破壊力に満ち溢れている。

「唸れ必殺！ トリプルアクセル避け！」

「有希、邪魔…きやあつ！」

コンマ1秒で編み出した必殺技は非常に華麗な回避を見せ付けたが、同じ内野だった楠木遙に激突するという難点を持っていた。

大地に倒れた二人は仲良く、外野から放たれたボールの餌食となる。

「有希いい…」

「ドンマイドンマイ。必殺技には犠牲が付き物なんだって！」

ジト目で睨む幼馴染の視線は笑顔で回避する。この技はもう少し研究の余地がありそうだ。

その後も白熱を極めたドッジボールは、ついに3回戦目を迎えた。

体も温まりきり、さらには受験勉強という鬱憤を晴らさんとばかりに勢いづいた花の乙女達は、それぞれに戦士の眼光を灯していた。

敵を倒し、自らの生存を勝ち取る。そんな殺伐とした戦場が学校の小さなグラウンドで展開されている。

「てやあああ——っ！」

クラスメートの宇奈月可奈が黒髪をなびかせて跳躍する。自らの運動能力を最大限に発揮したジャンプショットが私のチームの内野の命を刈り取っていく。

気づいた時には既に、生き残っている内野は私だけだった。全てのボールを回避しきった私と、私以外の内野を刈り取った宇奈月可奈の視線が交錯する。

「有希、命乞いするなら今のうちだよ？」

ボールを持ち、宇奈月可奈が目を輝かせる。風に舞う黒髪に、蒼腕の魔女を連想した。

「そっちこそ！これから授業終了の間まで、あたしに当てれると思うなよ！」

「上等おっ！」

助走をつけて跳躍。体を最大限にまで捻ったジャンプショットを、軽やかなサイドステッ

プでかわす。

地面に叩きつけられたボールは、バウンドして外野の後ろまで飛んでいった。ニヒルな笑みをお互いに交わした、そんな瞬間。

カキン！

「危ない！」

痛快な金属音。野球をしていた男子からの大声が聞こえる。上を見上げれば、硬球が私達の方へ向けて飛んで来ていた。

気づいた女子から、甲高い悲鳴が上がる。

——当たる！

硬球の軌道は一人の女子に当たるルートを取っていた。当の本人はその場で座り込んでしまっている。

腕で頭を防いでいるつもりなのだろうが、そうすれば頭に直撃しないなんて樂觀は出来ない。

気づいた時には既に、私は右手を硬球に向けて突き出していた。

「……鳥よ！」

授業中に考えていた『呪文』を唱える。言葉を発する必要は無いけど、実際に口に出した方がイメージしやすいのも事実だった。

右腕を走り右手から発射される、三日月形の光を発現させる。

私はこれを『鳩』と呼ぶ事にした。

「飛べっ！」

瞬間。音速で射出された『鳩』が放物線を描いて硬球を捕らえる。そのままのスピードで『鳩』は手元に戻り、拡散した。

いきなり落下地点を変えた硬球は目の前の地面にぶつかり、私の身長よりも高くバウンドする。

状況が状況だったためか、誰も私の行動や硬球の軌道を不思議に思う事はなかった。周囲の緊張が一瞬にして和らぐ。

「…ふう…」

思わず安堵の息をこぼす。いくら使っても疲れない能力ではあるが、気分的に僅かな疲労を感じる。

「よし！ そんじゃあ試合再開ー！」

人差し指を勢いよく突き出したが、当の相手は驚いたような視線を私に送っていた。見れば、誰もが心配そうな表情で私の方を見つめている。

「あ、あれ？ どしたん？」

「…ゆ、有希…！」

幼馴染の遙が、今にも泣きそうな顔で私を指差す。正確には私の首元あたりを。

——ま、まさか…。

手を当てれば、そこにはべったりとした液体。間違はなく血だった。髪の中の毛の間を潜り抜けた血液が頬を通過し、首を濡らし、体操服の右肩を赤色に染め上げていた。

「あ、あはははは…」

私の乾いた笑い声が逆に怖かったのか。

先程よりもボリュームの上がった悲鳴が、秋空の下に響き渡った。

3.

「ごめんなさい」

遠野家流し台前に、多奈の高音で落ち着いた声が響いた。

蛇口から勢いよく放たれた水は、落下した先の皿によって無数の飛沫を作り出す。

窓の先には堀越しの青空が広がっている。オレンジに似た食器用洗剤の香りが周囲に漂っていた。

「多奈ちゃん？」

いきなりの謝罪に、遠野三里はスポンジを動かす手を止め、皿を拭く手が止まっている多奈を見つめた。

多奈は僅かに顔を伏せ、その表情は前髪に隠れていた。

「ごめんなさい。私のせいで、有希は…」

布巾越しに皿を強く握る。静かなキッチンに洗濯機の回る音が微かに届く。その中では、血液に染まった有希の寝巻きが洗淨液に揉まれている。

友達と言ってくれた人をこんな目に合わせてしまった。

その事実が多奈には重く、辛かった。

「間違ひなく、有希にあんな能力がついてしまったのは私のせいです。私なんかが来なければ…。…謝って済む問題では無いですけど、本当に」

「あ、別に気にしないでいいわよ？」

「え…？」

言葉の途中で三里は軽々しく答えた。多奈は思わず言葉を失う。

「だ、だって、いきなり血が出るような…」

「使わなければ問題ないんでしょう？」

「そ、そうですけど…」

「なら大丈夫よ」

簡単に言い切った三里の顔には笑顔が浮かんでいる。母親を知らない多奈にとって、その柔らかな笑顔を見る度に胸が締め付けられるような気がした。

土下座をしろと言われれば喜んでする覚悟さえしていた。辛い叱責が飛んでくるのだと思

つていたし、それが当然だと思っていた。

「……」

「納得いかない？」

「…はい」

今朝方に三里が有希に言った台詞を思い出していた。

多奈が必死に能力を使わぬよう説得する中、三里が有希に言った言葉はたった一言。

「有希が選びなさい」

それだけだった。

「私は私の娘を誰よりも信じているの。ちゃんと、有希は有希なりの正義を貫くわよ」

窓越しの日差しが笑顔を照らした。蛇口からとめどなく流れる水流が音を立て続ける。

三里は小さく笑い、「親馬鹿ね」と呟いて、スポンジで皿の油汚れを落とす作業に戻った。

「多奈ちゃん、はい」

汚れと洗剤を落とされた白いプレートを渡される。多奈は反射的に受け取り、その表面に浮かぶ水滴を拭い取った。

白の表面がキュッと音を立てる。綺麗に洗われた皿の音と感触が、キッチンを照らす秋の日差しが、三里の隣にいる事が、何故か多奈には心地よかった。

「取って置きの話してあげよつか？」

笑顔を添えた三里の発言は、最後の皿を洗い終わつた時であり、有希が小学校の頃の運動会で客席に巨大大玉を突撃させた話の後だった。

三里の「娘自慢」は聞いていて非常に楽しかった。抑揚のある説明と、ユーモアに飛んだ口調が相手を惹きつけていく。

「これ言うと、有希は怒つちやうからオフレコね」

片目を瞑り、可愛らしく唇に人差し指を当てる。多奈は思わず頷いた。

「有希ってさ、何だかいつも笑ってるでしょ？ 小学校辺りからずーつとあんな感じ。でも昔ね。一回だけ大泣きした事があるの。後にも先にも本当に一回だけ。それはね…」
語り部が窓越しの青空を見つめ、昔話が始まる。

* * * * *

渡瀬東小学校の校舎に夕陽が差し込んでいた。

校庭のジャンブルジムもブランコも、赤色を輝かせていた。

机の上。夕陽に照らされたランドセルが、何処か寂しげだった。

逆光に照らされたクラスメート4人を前に、私はただ、一つの事だけを思っていた。

——私は絶対に屈しない。

例え小学校と言えども、そこは一つのコミュニティーであり、一つの社会であり、世界の

縮図でもあった。

僅か1クラス32人によって構成される世界において、遠野有希は勢力として貧弱だった。ただ、それだけだった。

クラスで一番大きな女の子グループという一つの勢力が今、私の幼馴染を引っ張ろうとしている。

夕陽によって作られた長い影は教室を横断していた。

「遙は、」

小学生にしか通用しない論理で懐柔は開始される。

——遙なら、大丈夫。

それは確信だった。幼稚園以来の親友で、いつも一緒に、お互いがお互いを信じている関係は切断できやしない。

楠木遙は、私の親友は、絶対に私を裏切ったりしない。確信していた。

当の幼馴染はポニーテールを左右に揺らしながら、私の顔と相手の顔を何度も見比べていた。

その顔には紛れのない混乱が浮かび、目元は僅かに潤んでいた。

相手の言葉に、遙の肩がびくつ、と震える。

私はただ、その光景を見つめ続ける。確信を胸に抱き、幼馴染との友情を信じていた。そして。

「…ごめん、有希ちゃん…。私、怖くて…」

幼馴染は顔を伏せながら、窓の方へ一歩進んだ。私から一歩離れた。窓際に立つ4人の、勝ち誇った表情が逆光に照らされた。

——あれ…？

崩れる。私の中で確かだったものが瓦解していく。

「…つく」

思わず口から出た音は言葉をなす事は無かった。

裏切られた。その単語だけが頭に浮かぶ。

衝動が一瞬にして駆け巡っていく。止まらない。止められない。止まる理由なんて、きつと、無い。

私の中で、ぷつつ、と糸が切れるような音を聞いた。何も考えず、考える余裕もなく、三歩踏み出して、そして、振り上げた右手を幼馴染の頬に、

ぱあん！

空気と、音と、時間が止まった。静寂の世界で、ポニーテールだけが逆方向に揺れた。

右手には嫌な感触だけが残り、心には刃物を突き立てられたような痛みが走った。

遙は頬を押さえ、驚いた顔で、私を見た。その大きな瞳には涙が溢れていた。

その視線は殴られるよりも強い破壊力を持っていて。私はこの時、私の敗北を確信して。遙が目を瞑る。その目元から涙が溢れ、頬を伝い、床に落ちて弾ける。

その両手は硬く握られ、僅かに震えていて。

「…有希ちゃんなんか大っ嫌い！」

私の中で、もっともっと大きな物が壊れる音を聞いて。

気づけば、私は教室を飛び出していた。

ドアに右半身を思いつきりぶつけたけれども、痛みなんて全く感じなかった。

夕陽の帰路を走っていく。息が上がっているのに、足だけが勝手に動く。

あの場所から離れるために。逃げるために。

家の玄関まで来て、やっと私は肌がふやけるくらいに泣いていた事に気づいた。

注射の時も、転んだ時も、絶対に泣いた事がない私が、絶対に負けないはずの私が、ただただ泣いていた。

初めて、部屋の鍵を閉めた。電気をつけず、カーテンを閉めて、ベッドに自らの体を打ちつけ、真っ暗な部屋の中で泣き続けていた。

「…つく、ひつく…」

喪失感と、敗北感と。沢山の感情が体中を廻り、壊していく。そんな感触の中、涙だけが延々と流れていく。

「…有希？」

お母さんの声がドア越しに聞こえる。しばらくして、鍵をかけたはずのドアが開いた。外からの光が、少しずつ私の部屋を侵食していく。

部屋に入ったお母さんはカーテンを開けた。窓から夕陽が差し込む。

そのまま、私が倒れたままのベッドに座り、頭を撫でた。振り払いたかったけど、振り払えなかった。少しでも顔を上げたら、涙まみれの顔が見られてしまうのだから。

「何か、あったの？」

「ううん」

生まれて初めての嘘と拒絶だった。初めての嘘は、胸に刃物が食い込むように痛かった。私は今、裏切ったのだと。自分の発想は勝手に言葉となつて頭を廻り、涙腺を更に攻撃した。

「……つく、ひつく……」

嗚咽が止められなかった。私に出来る事は、出来る限り声を小さくして、この状態を伝えない努力だった。

お母さんは何を言わずに、ただ私の頭を撫で続けている。

頭を撫でる手が暖かかった。髪を梳く指が心地よかった。

それはたつたの数分だったのかもしれない。

私にとってその時間は、数時間にも数日にも、永遠にも感じられた。

部屋には静寂が流れている。

この静寂を打ち壊すには、私が全てを話すしか手段がなかった。

頭を撫でる手が暖かかった。髪を梳く指が心地よかった。

どこまでも愛に溢れ、優しく、柔らかく、暖かい、そんな拷問の時間は、私が泣き止むまで続いていた。

「…遙と喧嘩した。…引つ叩いちやった」

「…うん」

ついに白状した私は、せき止められた水が溢れ出すように話し始める。

「そしたら、遙が、”有希ちゃんなんか大嫌い”って…」

「うん」

「…ひつくっ…」

言い出して、思い出して。また悲しくなって涙が溢れる。胸が軋む。嗚咽が止まらない。

「ねえ、有希。有希は、遙ちゃんの事が嫌い？」

「…うん」

悲しくて仕方が無いが、未だに遙の行動を怒っているのも事実だった。

それでも、嫌いになるというのは別問題だった。

一人の帰り道は嫌だった。隣にはいつも大人しい幼馴染がいて、馬鹿な話をして、少しだ

けいじめて、すぐ泣きそうになるから慰めて。

それでも笑顔でいられる、そんな時間がなくなってしまう事が嫌だった。

「有希のした事は、間違ってたと思う？」

「…わかんない」

間違ってるように思う。けれども、衝動を抑え切って笑顔でいる事が正しかったとは思えなかった。

ただ、それでは正しい行動とは何かと思う。誰がそれを正しいと判断するのか。その誰かの正しさは誰が判断するのか。

勝手に始まる考察が形に成りかけ、消えていく。

「うん。有希のした事は間違ってたの。有希が間違っていないと思ってたんだから、間違ってたなかったんだよ。有希は有希の正義を貫いたの」

でもね。私の頭を撫でながら、さらに言葉は続く。

「人によって正義は違うの。時々、その方向が逆な人もいたりする。どっちも正しくて、どっちも譲れない、そんな時が来るかもしれない。その時は…立ち向かうか、逃げなくちゃならない。逃げてもいい。それが正しいと思うのなら、それは正義なのだから」

言葉の内容は半分も理解出来なかった。

ただ、大切な事を伝えようとしている意志だけを強く感じていた。

「…有希。有希は、有希が正しいと思う事…。有希なりの正義を貫きなさい。自分が正しい

と思う事を主張して、行動するの」

「正義？」

「そう、正義。とつても、大切な事。誰のものでもない、有希だけの意志。…だから…」
ゆつくりとした暖かい口調で、なだめる様に。

「自分の足で、自分の体で、自分の人生を選びとる事。有希が正しいと思った事を貫きなさい。悪いと思っているのならば謝りなさい。そして、それは有希が選びなさい」

私は顔を上げた。

この時に見た、夕陽に照らされた優しい笑顔を、私は一生忘れる事は無かった。

「胸を張って。そして、今日と明日と一年後を楽しい一日にするために、精一杯頑張って、時々泣いて、物凄く落ち込んだりもして。それでも、有希も周りも一杯一杯笑えるような、そんな優しい子に…」

インターフォンが鳴った。

ドア越しに、聞き慣れた幼馴染の、私を呼ぶ声が微かに聞こえた。

「…有希が選びなさい」

再度、私を呼ぶ幼馴染の声が聞こえた。

微かで、弱々しい、そんな呼び声が私に判断を問いかけている。

三度目の呼びかけは涙声だった。

私は飛び跳ねるように起き上がり、階段を駆け下り、体当たりで玄関を開け放った。

そこには、大粒の涙をぼろぼろ落とす幼馴染が、夕陽を背に立っていて。

「ごめんね、有希ちゃん、ごめんね……」

泣きながら謝罪の言葉を何度も並べる幼馴染に、「ああ、遙は私より強い子なんだ」と確信して。

こんな時にでも意地を張って謝れない私が、何だか物凄く悲しくて。

涙だけが勝手に溢れて、前が見えなくなつて。

だから。

初めて幼馴染に言った謝罪の言葉の後、私は声を上げて泣いていた。

悲しくて、嬉しくて。泣かないと衝動を抑えられなかった。

夕陽が綺麗だった。その日、世界は鮮やかな赤に輝いていた。

* * * *

「馬鹿っ！」

幼馴染の楠木遙は、思いつきり私の腕を引っ張って保健室へずんずんと向かっていく。

昇降口を土足で入り込み、普段からは想像できないくらいのにステリックな大声を上げる。

歩きたびにポニーテールが左右に揺れた。

すれ違う生徒が遙の只ならぬ雰囲気驚き、私の体操服の血痕に驚いていく。

「だ、だからさ、大した怪我じゃないんだってば…」

「うるさいっ！ いいから歩くの！」

問答無用の怒り口調の中、その目は涙で潤んでいた。

落ち着いた口調でお姉さんぶる幼馴染の姿はそこには無く。私は夕陽に照らされた10年前の光景を勝手に思い出してしまふ。

引き摺られていく。

いつの間にやらお姉さん役が変わっていた関係。この関係は、根本的な部分では何も変わっていない。私は今も、この泣き虫な幼馴染を信じている。

「有希！ 笑ってる場合じゃないでしょう!？」

引き摺られていく。

跡が付く位に強く握られた右腕の感触が、不思議と心地よかった。

4.

千年谷駅東口から総合体育館行きのバスに揺られる事30分。

更に歩く事10分という非常に面倒な所に、児童福祉施設「リープリーフ」は住宅街に溶け込むようにひっそりと建っている。

周囲は大人の背丈以上の白色コンクリートの壁で囲まれ、正面玄関は鉄格子のような重厚な門が待ち構える。中にはサッカーグラウンド程の広大な芝生が広がり、所々が錆びたブラコンコが風に揺れていた。

二階建ての建物は白のコンクリートで形成されており、図書館のような風貌を見せている。屋根の頂点には丸く大きな時計が嵌め込まれ、2時を指す短針の後ろには、丸く反り返る広葉樹の葉が模様として刻まれていた。

この施設に登録されている37人の殆どは能力者であり、その他は能力者の兄弟で形成されている。

その中には元々親がいない者から、行き付けの診療所のように学校の後にだけ訪れるケースもある。多奈は前者だった。

多奈は門の前に立ち、2メートル強の鉄格子を飛び越える。

伊勢崎多奈の家であり、生まれ育ってきたその施設は、子供の帰りを無言で歓迎しているように感じた。

「いい友達を持ったね」

それが、報告をし終えた後の多奈に返ってきた言葉だった。

ただし、有希の能力に関してだけは報告を伏せた。

「…友達、ですか」

多奈は思わず右腕を左手で握る。昨日の夜の公園での出来事を思い出す。

児童福祉施設「リープリーフ」二階の館長室には、さながら社長室のような調度品が並んでいる。重厚な机に両肘をつけて手を組む人物は、背後の大きな窓から差し込む光を逆光にして微笑^{さわめ}んでいた。

名前は沢目道隆^{さわみちたか}と言うが、皆からは館長、あるいは「お父さん」と呼ばれる。

ロマンスグレーの髪はきちんと整えられ、細身ながらも長身の体軀にはワイシャツとネクタイが締められている。

顔には若干の皺が浮かんでいるが、それが逆に初老^{はつら}の落ち着きと思慮深さを感じさせた。その隣には館長の娘であり、副館長でもある沢目舞佳^{さわみまい}が、さながら一流の秘書のように静かに立っている。

年齢は20代前半。ブラウン色の入った長い髪を緩い三つ編みにし、その顔にはフレームレスの眼鏡がかけられていた。クリーム色のレディーススーツから知性があふれ出しているような、そんな空気が周囲に漂っている。

しかしながら、その空気は口を開くまでの間しか持続しない事を、この施設の人間は全員知っている。

「いやったね多奈ちゃん！ もー、お姉さんつてば多奈ちゃんが帰ってこれないって聞いて、夜も全然寝れなかったよー…って、ごめん、やつぱりかなり寝ちゃったりして。あははっ。いやー、まさかその間に追手ぶつ倒しちやったり海まで飛んじやったりしてるなんて！

さっすが多奈ちゃん！ 今年のカッコ可愛いで賞は私のものって感じ!？」

アニメのキラクターのような甲高い声と早口でまくし立てられる。先程の雰囲気は嘘のような笑顔とコミカルな動きに思わずたじろぐ。

「…あ、はい、ありがとうございます…」

幼い頃から世話をしてもらった姉のような存在であるが、多奈はどうしても舞佳のこの勢いに慣れずにいた。

「しかし、彼らがそんなに攻撃的に動くとは。よほど…」

館長は誰宛でも無い呟きを漏らす。

後半部分は聞こえず、口だけが音の無い言葉を紡いでいた。

視点は机の一点に集中していたが、注視しているわけではない。それは彼が思考に沈む際の癖だった。

しばらくして、目元に深い皺を刻んだ両眼が多奈を見る。

「多奈。昨日の夜の件だが、何故に多奈がヘリコプターなどに捕捉されたか分かるかね？」

「さあー！ 一人でー！ 考えよー！」

それは多奈にとっても疑問だった。昨日の昼間のように後を付けられていた以外の理由は想像出来なかった。

「…分かりません。あんな暗闇の中、目視で確認する事は困難なはずです」

「ざーんねーん！ 正解はー！」

「正解は私から話すよ、舞佳。さて…。この話は多奈が18歳になってから伝えるつもりだったんだが…。状況が状況だ…仕方が無い」

「その感情を人は妥協と言うのだから！」

「舞佳」

「むう…」

館長の目が真っ直ぐに多奈を見据える。その表情にいつもの笑顔は無い。

「多奈」

周囲の温度が一気に下がった気がした。

多奈は足が僅かに震えているのを感じていた。知ってしまう事で、これまでの何かが変わってしまうような、そんな漠然とした感触。

思わず、多奈が喉を鳴らした時。館長はゆっくりと口を開いた。

「我々は常に監視されているのだよ」

「彼らの中に一人。サーチャーと呼ばれる能力者がいる。その名の通り搜索する人物だ。その一人がいる事によって、彼らは我々に対し、圧倒的なアドバンテージを握られている状態なんだよ」

「サーチャー、ですか」

「もうちょい捻ったネーミングは無いのかー！」

「舞佳」

「むぐうゝ…」

「…さて。その能力は非常に貧弱ではあるが、どんな能力よりも脅威でもある」

「その能力とは何ですか？」

「"お友達探し"だ」

「…は？」

目を点にする多奈だったが、館長はあくまでも真剣な表情を浮かべている。

「我々が能力を使った瞬間、サーチャーはその能力者の位置を掴む事が出来る。ただそれだけの、能力者探索能力なんだ。攻撃力なんて一切無い。ただ"あの辺にいる"と伝えるだけの能力だが…これ以上の脅威は無い。どんなに強い銃を持っていようと、まずは相手が探せなければ意味が無いのだからね」

「それでは、昨日の夜に私達が見つけられたのも…」

「そう。そのサーチャーによつて発見された為だ。サーチャーが見つけ、違う部隊が捕獲する…。困った事だが、非常に効率のいいやり方だと思える」

「…それは、どこに居ても見つけられてしまうのですか？」

多奈は有希の事を考えていた。

もし有希が学校で能力を使ってしまった場合、サーチャーによつて見つかってしまうのでは無いか…？

「いや。どうやら、一応は探査範囲というものがあるらしい。といつても、半径数十キロ以上はカバーできるようだが……。それに」

館長は舞佳に視線を送る。

当の舞佳は腰に手を当てる胸を張って、自慢げな笑みを浮かべていた。

「よつくぞ言ってくれましたっ！ 皆には黙ってたけど、そのサーチャーの探査網を振り切るのが、この私のエクセレントな能力つて事なんですよっ！ この施設一帯は、私の“警鐘”の能力によって探査網から守られているのであったー！ キヤー！ 舞佳さんカッコイイー！ ……つて、あれれ？ 多奈ちゃん？ 多奈ちゃん？」

言い終える前に、多奈はドアノブを握っていた。

「戻ります」

もしかしたら既に敵は有希の位置を捕捉し、向かっているかもしれない。いや、既にもう遅かったりするかもしれない。

そんな想像を浮かべた途端、多奈の心に焦燥が走る。

「多奈、いきなり急いでどうしたのかね？」

多奈は背を向けたままに話す。顔を向けたら、目が合ったら、嘘がばれてしまう。有希が能力に目覚めている事がばれてしまう。

その事は隠しておきたかった。有希にはこの世界と関わりを持たず、普通の女子高生としての生活を送って欲しいと思っていた。

「…敵は、有希が私と一緒に居た所を目撃しています。有希が狙われる事は…」

「それはないよ、多奈。彼らは彼らなりの正義がある」

思いついた出任せは即座に看破される。

「…まあ、行くというのなら、一穂君と一緒に行きたまえ」

兄の名前が登場する。

表向きは運転手だが、実際の所は自分の監視役なのだと気づいていた。

再び振り向く。

「…いつも疑問に思っていました。何故、私には常に護衛をつけるのですか？ 先程の話だ

と、能力さえ使わなければ捜査網に引っかからないはずですが」

「友達とは二人きりで会いたい。その気持ちには分らないでもない」

そういう意図で言ったわけではないが、本当の意図を話すわけにもいかず、沈黙する。

「友情は素晴らしいものだよ、多奈。別に二度と会うなんて言わない。電話も毎日したっ

ていい。ただ…」

「出かける時は護衛付き、ですか」

「そうだ。…多奈には悪いが、これだけは譲れない」

一時の間、重い沈黙が流れる。

「…蒼腕の魔女」

「ん？」

いきなり多奈の発した単語に、館長は疑問符を浮かべた。

「敵の名づけた、私のコールサインです。そして、コールサインを付けられたのは施設内でも私だけです。…つまり私は、常に護衛を付けねばならない程に、敵に狙われている。そう…考えていてよいのですか？」

館長は僅かの間だけ目を閉じ、呼吸を吐き、そして重々しく答えた。

「……そうだ。確かに彼らは我々能力者の髪、血液といった研究材料を非常に欲している。だが、それ以上に欲しているのは…多奈。君なのだよ」

「何故ですか？ 何故、私なのですか？」

館長は椅子から立ち上がり、多奈の前まで歩く。舞佳はその様子を心配そうに見つめる。細身ながらも長身の館長は、しゃがんで多奈の右腕を優しく握った。

「…多奈。遠野有希という女の子は、能力に目覚めたかね？」

「な…っ!？」

背筋に寒気が一瞬にして走りぬけた。思わず言葉を詰まらしてしまった事に強烈な失敗を確信する。その反応は質問に対してイエスを確実に返していた。

「この腕には、『開花』の能力が埋め込まれている。能力を使うと青色の光が出るだろう？ それに当たると、一般人でも能力を使えるようになるんだ。もつとも、全員が全員と言うわけではないがね。我々のように先天的な資質も必要とされている」

淡々とした説明が頭の中でグルグルと回る。

16年間もの間知らされなかった事実が次々と明かされていく。一言一言に、鼓動が跳ね上がるような衝撃が走る。

「あくまでも埋め込まれているのであって、多奈のものではないんだ。ただ、これは質量も無く、決まった形も無い。言うなれば”存在”だけが浮いているようなものでね。多奈の能力：”アルバレスト”だけが、この存在を固定する事が出来るのだよ。そして、どこかでの事を知った彼らは、これに対して非常に興味を持った。だから、多奈は狙われている」

多奈は右腕に意志をこめる。外の明るい光の中、青色の光が僅かに腕を覆う。

「…これのせいですか？ 私のせいで、有希は…あんな…」

思い出したのは床の血痕。

「そう。遠野有希という女の子は、元々素質があつたということだよ」

「そんな話じゃありません！」

握られていた手を力いっぱい跳ね除ける。反抗期も無かつた多奈にとって、育ての父への初めての反発だった。

振り返り、ドアノブを強く握る。

「多奈ちゃん！ どこに行くの!？」

舞佳の高い声が部屋に響く。

多奈は僅かに沈黙した後、僅かに体を振り向かせて答える。その瞳には強い意志が籠っていた。

「遠野有希の：記憶を消します。元はと言えば全て私のせいです。こんな無駄な力のせいで、有希の人生を変えてしまうなんて事は耐えられません。能力に目覚める前：。私と会った後の記憶を消して、終わりにします。全てをゼロに清算します」

「出来るのかね？」

「記憶に残しておきたい」という意志のベクトルを反転させれば可能です。出来ます」

「多奈。可能不可能の話じゃないよ。多奈にそれが出来るのか、その意志があるのか、それを聞いているんだ」

「……」

即答できなかった。

「記憶と言うものは尊いものだよ、多奈。それを消す事は、遠野有希という友達と多奈の関係をゼロにしてしまうという事なんだ。その後の彼女はもう多奈の事を呼んだりしない。思い出したりもしない。：多奈。それに耐える覚悟と意志があるのかね？」

「私は：」

思い出す。いきなり車から引きずり出された時の腕の痛さ。イチヨウ舞う中を走り抜けた時の手の暖かさ。初めて食べたハンバーガーの味。歩道橋からの夕焼け。暖かい夕食。星を見た夜の冷たさ。手を繋ぎ、飛び落ち続けた夜景の街。

自分の事を友達と言ってくれた、夜の公園。

記憶を消しても、この事実は無くならない。その時の感触を多奈はきつと憶え続ける。

けれども、有希にとつては全て無かつた事になる。

二人の出来事なのに、多奈の中だけでしか存在しなくなる。

あの時は楽しかつたよね。そんな会話は一生出来なくなる。そしてこの先、有希との思い出は増える事は無い。

胸が軋みを上げる。

それでも。

この先に有るべき有希の人生を自分の所為で捻じ曲げてしまうのは耐えられない。

血液を流した有希を思い出す。三里さんの顔が浮かぶ。彼女は笑顔で「別に構わない」と

言つたが、それでも多奈は納得しきれなかつた。

どんなに辛くとも、有希の為になるのなら、それを選びたい。

だから。

「私は……。私は、遠野有希の記憶を、消します。私が、私の意志で、有希に別れを告げに行きます」

「……君の選択を応援するよ」

館長室のドアが、大きな音を立てて開いた。

5.

「ねえ、有希…。本当に大丈夫？」

「あーもー！ 大丈夫だって！ これで13回目だぞ遙ー！」

千年谷高校の校門から昇降口までの間には、東京大学を真似て作ったと言われるイチヨウ並木が続いている。

今年は葉も多く、色も鮮やかな黄色を輝かせていた。

思わず写真として収めたくなるような、そんな見事な光景が広がっていた。

この高校で一番好きなのこのイチヨウの景色は、たった10日程度で葉が落ち切り、また一年後を待つしかなくなるのだが、その儚さが逆に好きだった。

下校時間。未だに心配そうな表情の遙と共に、並木道を歩いていく。

周りのテニスコートやグラウンドでは部活動に精を出す威勢のいい声が轟いていた。

結局。心配性な幼馴染は、電車に乗って、それぞれの家路に着く分かれ道に着くまで、事有るごとに、

「有希、本当に大丈夫？」

といった言葉を繰り返していた。

さすがに超能力に目覚めちゃいましたなんてことは言えず、かなり強引にはぐらかしたが、さっぱりと納得はしていないようだった。

「それじゃね、有希。ちゃんと受験勉強しなきゃ駄目だからね？」

「はいはい。やりますやります頑張りますって！ …ゲームのレベル上げをな！」

「またそういう事言ってる…」

呆れ顔のまま、遙は家へと歩いていく。

気づけば日は傾き、夕陽へと変わっていた。

「さあって、あたしも帰ろうと…」

お菓子とボールペン2本しか入っていない鞆を後ろ手に、帰り道を歩いていく。

晩秋の夕陽は空とイチョウを赤色に染め、鮮やかな世界を演出していた。

息を大きく吸い込む。11月の冷気が心地良かった。進む足は軽く、乾いた足音が響いていた。

歩き始めて5分。

家から十数メートル離れた住宅街路に、多奈と、電信柱に寄りかかるようにしてもう一人…恐らく多奈のお兄さんが立っていた。

バックに夕陽を背負い、長い影法師が道路に伸びている。

風に揺れる黒髪は夕陽に照らされて赤く染まり、昨日の歩道橋での出来事を彷彿とさせる。

「お、多奈。隣のはもしかしてお兄さん？」

「有希」

私の疑問に回答することなく、多奈は私に真剣な眼差しを送っている。

強い風が吹いた。散り終えたイチヨウが空へと舞い上がり、多奈の髪が大きく靡いた。

突風が止み、吹き上げられた葉が夕陽を照らされて降り続ける中、多奈はしっかりとした声で言った。

「お別れを言いに来ました」

「ええつと…、お兄さんのお迎えが着たから今日は帰るって事？ そんなじゃ、帰る前に携帯の番号」

「有希」

多奈は静かに目を閉じ、私の声を遮った。

「…これから私は、私に関する有希の記憶を消します。そして私は、二度と有希の前に現れません」

その顔は全くの無表情で、口調はいつもと同じようなのに、泣きそうなくらいに悲しい雰囲気が多奈を包んでいる。

多奈は握手を求めるようにゆっくりと右手を差し出した。

その腕には、青色の光が輝いている。

私は、その手を握る事で、記憶が消されてしまうのだと理解した。

「絶対に断る！」

差し出された右手を横薙ぎに叩いた。多奈の悲しそうな表情が胸に突き刺さる。けれども、苛立ちの方が上回っていた。

「理由は？ 絶対納得しないけど説明してくれる？」

「…説明した所で、その内容の記憶も無くなりますよ」

「いいの！ どうせ一切何も納得しないから！」

多奈の瞳が悲しげに細められる。

「有希の能力が非常に危険であると私が判断しました。私が、私の意志で、私と会った後の記憶を全て」

「やっぱり絶対断る！」

「有希…」

「いい、多奈？ 記憶つてのは物凄く大事なものなんだよ？ あたしがあたしで在るって言う事は、今までのあたしの記憶を持つているって事だからね？ その蓄積こそが、自分なんだって思うもの。記憶喪失つてのは、死ぬ事と同じ。体は無事でも、今のあたしはそこで死ぬって事なんだよ。だから、記憶を操作するなんて、絶対にあたしは認めないからね！ この今の、多奈を知っているあたしは殺させない！ あたしは全力の抵抗を持って、それから逃げる！」

一気に言い切る。多奈は叱られた子供のように肩を落としていたが、その悲しげな目には強い意志が浮かんでいた。

「…納得してもらえないのは承知の上です。私は、私の正義を、力づくで遂行します」

秋風に黒髪を揺らす。その言葉が誓いの言葉だったかのように、多奈の表情が昨日の歩道橋上で見たような、任務を遂行する冷徹な意思をこめた表情に変わる。

右手の光が一層光度を増した。

「ごめんなさい、有希。私は良い友達になれませんでした」

多奈が地面を蹴る。その瞬間。

「…あ…っ」

突然、多奈が前のめりに倒れる。

「多奈!？」

今まで沈黙を徹してきた兄が駆け寄る。

倒れた多奈の首元には、昨日の夜に見た白いダーツのような麻酔針が突き刺さっていた。

「…手順が違うのよ」

声は多奈の背後だった所から聞こえた。

夕陽を逆光にしたそのシルエットはゆっくりと近づいてくる。

「今から捕まえます、って言った後に捕まえるなんて馬鹿馬鹿しいと思わない？　そういう事は、問答無用に捕まえてから言えばいいのよ。建前なんて最後でいいのよ。よく言うじゃない、まずは行動、って」

硬い革靴の音を鳴らしながら、その声とシルエットが近づく。

そこに現れたのは、多少崩した感じのセミロングヘアーに眼鏡をかけた女子高生だった。着ている緑色のブレザーの制服は明らかに自分の学校の制服よりも可愛かったが、見た事も無い制服でもあった。

「はい、こんばんは。蒼腕の魔女とその他の方々」

夕陽が眼鏡を光らせる。高圧的な視線が私達二人を睨みつけていた。

「敵かつ！」

お兄さんは胸ポケットから取り出した拳銃を素早く取り出し、その女子高生に銃口を向けた。

その光景に、女子高生はわざとらしい溜息をつく。

「…だから、手順が違うのよ。まず撃つの。撃って、撃ちまくって、私をボロボロにした状態になってからでいいのよ、その台詞」

銃口を向けられたまま、眼鏡の女子高生は平然と近づいてくる。

お兄さんの指が、ゆつくりとトリガーを引いていく。

「残念ながら手遅れよ、お兄さん。もう状況は限りなく手遅れなの。もっともっと最初の段階から手を打っておくべきだったのよ。さて…」

人差し指が、ゆつくりとした動作で目元を指す。

「はい、二人とも。私の目に注目」

明らかに罠なのは分かっていたが、いきなりの言葉に視線はその眼鏡の女子高生の目に向

かつてしまっていた。

眼鏡越しの目には、輝くような緑色の黒目が映っていた。

その瞬間。私の中で爆風が吹き荒れた。実際に起きた風ではなく、ひたすらに体感だけが爆風の中に飛び込んだ。

脳を直接揺らされ、心臓をこのまま持っていかれるような、爆風。

「……うぐっ……」

視線がその緑の相貌に固定される。金縛りに在ったかのように指一本動かせない。

「はいはい、気持ちちは分かるけど、ちよつと蒼腕の魔女から離れてくれるかな？」

その言葉が甘く甘美なものに聞こえる。動かせないはずの体が勝手に動き、多奈を差し出すようにして離れていく。

——何やってんだ私！ 動け！ 抵抗しろ！

女子高生はゆつくりと近づいてくる。その姿を睨みつける事しか出来なかった。

そんな私を見ながら、サデイスティックな笑みを浮かべる。

「視線って不思議だと思わない？」

答えられる訳が無い事を知りながらの質問だった。

「視線って、所詮は眼球がどっちを向いているかってだけの話なのよね。そこから物理的な運動は一切発射されてないの。なのに、私達は何故か視線を感じ取れるし、視線だけで侮辱されているように感じたり、恋が芽生えたりするのよ。不思議だと思わない？ そういう意

味だと、この視線つてものは十二分に超能力の領域に入ってるような気がするのよね」
動け。その命令を体にするが、どこかでそれを拒否する力が発生する。

「だからね、その中には、目が合っただけで、歯向かえない」つて思わせる視線があつてもいいかなつて思うのよね。つまりそれが私の力です、地味で大変申し訳ありません…つと眼鏡の女子高生は、同じ体型の多奈を重そうに担ぎ上げる。

連れてかれてしまう。しかも、自分の目の前で。

「…まあ、そういう敵意全開の視線も嫌いじゃないけどね。でも…」

空いた右手には散弾銃のような長い銃身の銃が握られていた。その銃口は私をポインティングしている。

「少し寝ててくれる？　そんでもって今日の夜とかに物凄い悔しがって、それでも勝てない事に気づいて、一年くらい経ったら綺麗さっぱり忘れてくれる？」

ばしゅつ。

肩に白いダーツが刺さった。一瞬にして意識は混濁し、闇の中へと落ちていく。

——絶対、助ける。

それだけを強く思い、私の意識は一気に停止した。



新4号国道追討戦

Escape 4.

1.

静かに肺に空気を送る。マイクに近づくために、体を僅かに前に倒す。薄暗い放送室。周囲には、放送機器の僅かな電子音が響く程に静寂が広がっている。外からの音は防音壁によつて届くことなく殺されていく。

「……オーケイだ。遠野有希」

隣に座っていた伊勢崎一穂が音量のつまみを縦にスライドさせる。

その合図に、私は無言で頷く。

かちっ。四角のボタンを押すと、聞き慣れた音が放送室内に響き渡った。

ぴんぽんぽんぽん♪

「あー、あー。こちらリープリーフ館内放送室！ 全員聞いてる？ 聞こえてる？ 皆さん

初めまして。あたしは千年谷高等学校三年C組31番の遠野有希です！」

館内のあちこちからどよめきが走ったのを感じ取った。

「これからあたしの言う事を、受け止めて、よく考えて、そして、素直な感情で答えて下さい。っていうか、もう時間も無いからとにかく答えなさい！」

すう……。音が鳴るくらいに勢いよく息を吸い込む。そして、マイクを通して自分の意志を相手にぶつけるイメージを持ちながら、一気に言い放つ。

「今から！ あたしは戦争を行うっ！」

目覚めた時には既に多奈の姿は無く、夕陽も落ちきっていた。

街灯の下、未だに意識を失っている多奈の兄は、倒れてる酔っ払いにしか見えなかった。その体を揺すって起こす。

「…多奈は!？」

目覚め、立ち上がり、状況を思い出した彼の一言目はそれだった。私は横に首を振る。年齢は二十台半ばだと思う。ショートレイヤーのサラサラとした黒髪。多奈に似た落着いた瞳。

長身に黒のコートを着込んだ姿は、＂知的でカッコイイお兄さん＂と言える風貌だった。「ね、ねえ…。お兄さん。多奈がどこに連れてかれたか分かる？」

私の声が震えていた。大変な失敗をしてしまった後のような、強烈な喪失感が胸に風穴を開けたののような、そんな漠然とした痛みが走っている。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。その言葉だけが頭の中で連呼する。答えは出ぬまま、質問だけが反響する。

そんな私とは関係なく、視界は静かな夜の住宅街が広がっている。

その静けさが、逆に更なる焦りを生み出す。

肺が心臓に圧迫されたような感覚が走り、何の異常もないのに咳き込んだ。吐き気すら感じていた。

「…冷静になれ、遠野有希」

「なれるかっ！」

思わず叫ぶ。お兄さんの冷静さが、返って私を焦らせる。

そんな様子の私を見かねてか、お兄さんは私の肩を掴んで顔を近づけた。

「…俺は多奈の行方を見かねない。館長に今から聞く。その間に…遠野有希。お前は家に帰って荷物を置いて、着替えて来い。その間に冷静になれ。…お前も俺も、今出来る事はそれだけだ」

視線が交差する。肩を掴む手は若干震え、痛いほどに力が込められていた。彼は冷静を装っているだけなのだと、その事実を伝えている。

思わず、私はその言葉に頷いていた。

大急ぎで着替え、みーちゃんには多奈の家に遊びに行くと伝えた。

夕暮れの商店街を逃げ切り、夜景の街でも逃げ切れたトレンチコートを縁起担ぎのように羽織り、玄関を開ける。

そこにはお兄さんが大型で黒色のバイクをふかせながら待ち構えていた。

駆動するエンジンからは重低音が発射されている。

月が綺麗な夜だった。凜とした空気に、私の思考がシャープになっていくのを感じる。焦りながら、思考だけが明瞭になっていく。

「…通信手段を全て破壊されていた。バイクの内側に仕込んでいた通信機ですらだ。これから、直接施設に戻らなければならない」

「お兄さん、冷静になれた？」

「…そっちは？」

「全然」

笑顔で答えた。

そのまま、促されるままにバイクの後部座席に乗り込む。

「ヘルメットは？」

「破壊されていた」

短的な会話の連続に、「多奈を助けるかどうか」を問う質問は言葉として存在しなかった。その質問と回答は視線だけで交わされていた。

それは二人にとって根本ともいえる意志であり、私とこの黒コートのお兄さんの信頼を繋ぐ紐だった。

エンジンが唸り、バイクは夜の住宅街に騒音を撒き散らしながら加速する。振り落とされないよう、お兄さんの体に掴まる。

冷たい夜の風が二人の髪とコートをはためかせた。

「そーいやさ、お兄さんの名前聞いてなかったんだけどー！」

「一穂。伊勢崎一穂」

「うわっ、女の子みたいないな可愛い名前だね！　ちゃんづけで呼んでいい!？」

交差点を左折した。時速80キロのスピードで周囲の景色が通り過ぎていく。

空を見上げれば、雲ひとつ無い夜空が広がっている。月が綺麗な夜だった。

* * * * *

ロマンスグレーのオジサン：館長は、多奈がさらわれた事を聞いて、大して驚かなかった。それは、私の不信感を臨界点突破させるのに十分な理由だった。

児童福祉施設「リープリーフ」の館長室。どこかの社長用かと思わせるような巨大な机の先に広がる窓には、夜の帳が落ちきっている。

ガラスに映る私は、昨日と同じようにトレンチコートとミニスカートにミリタリー風のブーツを着込み、自分でも驚くくらいに陰しい顔付きをしていた。

「多奈なら自力で帰ってこれるだろう。我々がどうこうする必要はないよ」

「あたしは、そんな答えを聞きに来たんじゃない！」
ばんっ！

机を両手で思いつきり叩く。分厚く重い机はその衝撃を全て受け止め、ボールペンを僅かに動かす事すら許さなかった。

「いい!? そんな希望的観測なんてどうでもいいの! 現に多奈は捕まってる! いっくら多奈が強かったって、麻酔銃で撃たれたら抵抗できなくなるっていう事実がある! その間に何もされないなんて保障はどこにも無い! あたしは、神様に祈って全てオーケーに出来る程、お気楽な考えは出来ないっ!」

眼鏡の女子高生にやられて既に2時間が経過している。焦りだけが先走る。握る手に汗が滲んでいた。

館長と呼ばれるオジサンは考えるように瞳を閉じ、しばらく経ってから口を開いた。

「:君の主張は理解した。場所は言う。地図も渡そう。ただ、私が出るのはそこまでとさせてもらうよ」

「何で!? 多奈が心配じゃないの!?!」

「先程も言ったように、多奈なら一人で帰ってこれると私は考えている。それに:この施設の間人は、自衛力以外の力を行使する事を禁じ、忌んでいる。そういう信念で動いている。そもそも、我々は能力を”障害”という認識で受け止めている。一般社会を普通に生きる事においての障害としてね」

昨日の夜のベランダ。星を見上げる多奈の表情が頭の中に浮かぶ。

「この施設は、能力を消す事を目的として存在している。受動的なのだ。出来るならば

能力なんて一度も使わず、平和に人生を過ごしたいと思っている。一般人らしく生きたいのだよ、我々は。だから、能力で物事をどうにかするなんて事はナンセンスなんだ」

もう一度、机を豪快に叩いた。秘書っぽいお姉さんが肩をびくくと動かし驚く。

「ああもうメンドイ！ 能書きなんてどうでもいい！ 主張と、多奈と！ どっちが大切か！ そこだけはつきりさせようじゃないの！」

「どちらも大切だよ」

微笑さえ浮かべ、館長はしれっと言つてのけた。

その様子に、私は言葉を失う。

「…館長…」

後方から聞こる一穂の低い声には、明らかな憤慨が込められていた。

「…一穂。能力者でない君には分からないかもしれないが、能力というものは本当に障害なのだよ。君は多奈が何度、自らの能力で泣いたかを知っているかね？ 私の主張は間違っているかね？」

一穂は僅かに言葉を紡ぐとしてが、それは音にはならなかった。

「もういい！ 場所だけとつとと教えない！ もうそれ以上は頼まない！ …それと、一穂！」

「…？」

「この施設に放送室ってある？ このオジサン以外なら協力してくれる人いるかな!?」

* * * * *

盛り上がるテンションを抑えるためにも、もう一度、肺に空気を送る。

マイク越しの相手に伝わるよう、感情をこめて、ゆっくりと話し始める。

「あたしの友達こと伊勢崎多奈が、2時間くらい前に連れ去られました。いわゆる、敵と呼んでる奴らに。しかも、あたしの目の前で……！」

思い出して、悔しくて。勝手に拳が握られているのが分かった。

冷静になれ。その言葉を心の中で数回連呼する。

「……あたしはあたしの全力をもって、多奈を助けに行く。多少の怪我也危険が待っているかもしれない。それでも、あたしは行く。そういう覚悟と決意を、あたしはこの放送を使って行ってる……」

気づけば、考えていた台本とは違う台詞を喋っていた。それでも、言葉が止まらない。

「はつきり言って、あたしと一穂だけで何とかなるかなんて分からない。……だから、これに聞いている貴方の力を貸して欲しい。多奈を助けるために、少しでも多くの力が必要で……5分だけ。5分だけ、皆の返事を待ちます。その間によく考えて、そして覚悟と決意が出来たなら、放送室の前に来なさい……ああ、えっと、来て下さい。……以上！」

ぴんぽんぽんぽん。流れる音がどこか間抜けだった。

つまみを引き下ろし、ボリウムがゼロになる。放送が終了する。

強烈な疲労を感じ、パイプ椅子に座り込む。大きく息を吐いて、目の前の机を枕にするように頭を置く。

「…誰か来ると思う？」

「…まあ、来ないだろうな」

「そうだねー…」

カチツ、カチツ、カチツ。

備え付けの置時計の秒針が微かな音を立てて時間を刻む。

静寂の広がる放送室には夜の冷気が漂っていた。吐く息が僅かに白い。

「…ねえ、一穗。これからあたし達、どうするんだっけ？ …まずは、あと数分後に誰も来

ない事にしよんぼりしてからスタートだよしゅくがわらね」

「それから、バイクで新4号国道を南下する。二時間後には宿河原センタービルに着くはずだ。その後、多奈を奪還する」

「きつと、また何十人もの黒服さんが邪魔するんだだろうね。…出来るかな？ あたし達二人だけで」

「無理だろう」

「そうだね。あたしもそう思う…」

カチッ、カチッ、カチッ。

秒針の音が時間を刻み、静寂を際立たせる。

「：今だけ休んでようか。：三時間後には多奈を返してもらって、五時間後には安心して布団で眠って、そして、明日の朝ごはんを多奈と一緒に食べなきゃなんないんだから」

私は少しだけおかしくなってしまうているのかもしれない。

どこまでも冷静な頭でそんなことを思っていた。

きつと無理なのだろう。

私は現代の魔女ではない。銃を持った男達を数分で殲滅する事なんて出来ないだろう。

恐らくは、どこかで負けて、捕まって：それだけの結末が待っているのだろう。

「馬鹿だなあ：あたし」

結局の所、それだけの理由なのだ。

私は逆境が好きで、自分の正義を貫かなくてはいらなくて、多奈が好きだった。

だから、助けに行く。私は一度で良いからヒーローになったかった。常に胸を張って生きたかった。もう一度、多奈と一緒に星空を見上げたかった。

総じて言えば、馬鹿なのだ。遠野有希という、この偏屈な私は。

思わず笑いがこぼれた。今はただ、冷たい机の感触が頬に心地よかった。

カチッ。

秒針が5週し、短針は8を指した。

放送室のドアを開けても、そこには誰もいない暗い廊下が伸びているだけだった。その光景を、どこか皮肉っぽく口元を緩めて見つめる。

ぴんぽんぽんぽん。

「一応言っておく！ あたしは皆を恨まない！ 考えた結果、選んだのがそれならば、あたしはその正義を尊重する！ 多奈の帰りを期待しないで待つてなさい！ 以上！」

2.

ぼんやりとした視界が少しずつ明瞭になっていく。

思考をリブートし、多奈は状況把握を開始した。

思い出したのは夕焼けの住宅地。有希の記憶を消そうとして、力いっぱい否定されて…。多奈の記憶はそこまでで、次の瞬間が今だった。

「…ん…っ」

クリアになった視界で周囲を認識する。

天井に設置された白熱灯からは褐色の弱々しい光がスポットライトのように落とされ、天井の中央には豪華なシャンデリアが暗闇の中で吊るされていた。

部屋の大きさはテニスコート一面程度。その一辺、多奈の正面は全てガラス張りで、その先には月の浮かぶ夜空と綺麗な夜景が広がっていた。床には柔らかいカーペットが敷き詰められ、幾何学的な文様が刻まれている。小さめのパーティ会場のような部屋には椅子もテーブルもなく、走り回る事すら出来そうだった。

じやらつ。右手を動かそうとすると手首に冷たい金属の感触が走る。

そこにはサビ一つ無い手錠がはめられ、そのチェーンが壁のフックにかけられていた。

どうやら壁にもたれたまま長時間座っていたらしい。背中と尻が痛かった。さらには、暖房が入っていない為か、僅かに肌寒い。

——私は敵に囚われている。そして、これは現実。

瞳を瞑り、左手で右腕を握り、息を大きく吸う。心の中で3秒数える間に状況と対策を整理する。こんな時だからこそ、冷静さを維持しなくてはならない。

——まずはこの手錠を破壊する。その後、目の前のガラス窓を破壊。落下飛行で逃亡…。そこまで考えて、それが上手くない事を悟る。

昼間に館長から聞かされた言葉を思い出す。

——落下飛行をする限り…能力を使う限り、サーチャーの捜査網に引っかかる…。
振り切るには能力を使わなければならない。そしてまた網に引っかかる。引っかかれば敵

が向かってくる。それを振り切るには……。そんな堂々巡りを理解する。

多奈には、その後に逃げ切れるイメージが湧かなかった。

——それでも、無駄でも……やるしかない。私の選択肢はそれしか残ってない……。

右腕に意志をこめる。

万物に発生するベクトルのイメージを知覚し、その一つを反転させるように念じる。

「……くう……」

がちやつ。手錠はそんな金属音を鳴らすだけで、多奈の手首を掴み続けていた。

腕は光らない。手錠に発生する抵抗力のベクトルは変更されない。

昨日の夜に多奈の能力を停止させた薬を打たれたのだと、今頃になって気づいた。

「お目覚めかな？ 蒼腕の魔女」

突然の声に顔を上げる。夜景の広がるガラス窓の前に、白衣を着込んだ男が立っていた。ドアを開けた音は無かったから、暗がりになっていたのかもしれない。

年は多奈の兄と変わらない程度。シャギーのかかったブラウンの髪と長細い眼鏡をかけた細身の男は、薄暗いパーティ会場で月光を背に浴びながら薄い微笑を浮かべている。

ゆつくりと近づき、胸ポケットから小さな名刺を取り出し、多奈の目の前に突き出した。

「初めまして。君の目の前のカツコイお兄さんこと俺は、株式会社フロントグリップ新薬開発部Nグループ主任、二宮^{みやがずと}一刀。一振りの刀って書いてカズトって読むんだ。洒落てるだろう？ ちなみに現在の業務はプロジェクト名、ウィッチハント。まあ、その名の通り、蒼

腕の魔女捕獲部隊の隊長なんてやってたりするわけだ」

がちやつ。驚きで僅かに動いた右腕から、手錠の音が響く。

「おっと。あまり抵抗しないでくれよ？ あの手錠は効き目がアバウトなんだ。あと一分で効果が切れるかもしれないし、一週間切れないかもしれないしね」

軽い口調で、聞いてもない情報を話す。

男はしばらくの多奈を観察し、白衣のポケットから長細い直方体の物体を取り出した。ボタンが沢山付いたそれは、テレビのリモコンにしか見えない。

それを薄暗い闇の中へ向け、ボタンを押す。途端に駆動音が鈍く響いた。

「しっかし、予想外だったよなあ。蒼腕の魔女って、もつとゴツいヤツを想像してたんだけど、こんなに可愛い子だったとはなー？」

冷たい手が多奈の顎に触れる。

不快感と怯えから睨み返す多奈を、白衣の男は愉快そうに見つめる。

「そんじゃあ、蒼腕の魔女。これでも見ながらゆつくり話でもしようか？ やつと捕まえたんだ。話したい事は沢山あるんでね……」

顎を無理矢理曲げられると、その先には光を当てられたスクリーン。そこには。

「……有希……っ！」

バイクに二人乗りして乗用車をどんどん追い抜いていく、兄と有希の姿が映されていた。

* * * *

「は、速あーっ！　ちよ、ちよっと一穂！　速すぎるってば！　死ぬ！　死ぬうー！」
「このくらい普通だ！　黙って掴まってる！」

今日も車通りの少ない新4号国道。

ヘルメット未着用のままで二人乗りのバイクが時速100キロで南下していく。

風音とエンジンがごうごうと爆音を鳴らす。頭上では褐色のランプが高速で過ぎ去っていく。一般車両の脇を次々に追い抜いて走っていく様子は、一人舞台のカーチェイスの様相を見せていた。

ロデオに乗ったらこんな感じなのかもしれない。僅かな地面の段差ですら車体は踊り、そのまま空中に放り投げられそうな恐怖感が連続する。

足を閉じる力を強める。一穂の腰に腕を巻く。皮製のコートの感触が頬に心地よかった。叩きつける風が強烈だった。髪の毛とコートが暴れだすように踊り狂っている。

「うひゃー！　うにゃー！　うひえうー！」

「うるさいぞ遠野有希！　少し黙れ！」

物静かを超えて無口と思われていた伊勢崎兄妹の兄が大声で叫ぶ。

それでも、私に到達する頃には周囲の爆音の中に潜む僅かな音になってしまっていた。バイクはエンジンをフル回転して夜を走る。

次々に乗用車を通り越す。私達の背中にフロントライトが眩しく照らされる。

「うわっ、うわっ！ 浮くっ！ か、一穂っ！ シートからお尻が離れたりしちゃったりな
んですけどー！」

「掴まり方が弱いからだ！ もっと体全体をくっつける感じに掴まって、体を固定してお
け！」

「ら、らじゃー！」

スピードと一穂の声に急かされるようにして、一穂の背中に抱きつく。

言われた通りに、体全体を押し付けるように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

——まるで恋人達の乗り方のように。

頭を振る。勝手にリピートし始めた自分の発想はやっと消える。

「……落ち着け、あたし」

状況は切迫していた。

そんな思春期の乙女の胸のときめきを演出している暇も余裕は無かった。

それでも。私は頬が真っ赤になっていくのを感じてしまっていた。鼓動が今までとは違う
理由で激しく脈打つ。

これが遠野有希の、唯一にして最大の弱点だった。

こういう演出にひたすらに弱いのだ。意識し始めると、途端に抜け出せなくなる。足の下30センチが時速100キロで移動していく。風がコートをはためかせ、褐色のランプが何度も頭上を通過していく。

私の沈黙を、やつと落ち着いたのだと解釈したのだろう。現実はその真逆だという事を知らない一穂は運転に集中する。

「……うう……」

緊張を誤魔化すように唸る。今は乙女心を感じて居る場合じゃないと心の中で私が叫ぶ。しかしながら、頬にくっつくコートの感触が、抱きつく腕に感じる体温が、胸に伝わる一穂の呼吸の動きが、腹立たしいくらいに私の冷静さを投げ飛ばしていく。爆音の中、お互いに沈黙が流れる。

本当に自分は馬鹿だと、そんな事を思いながら。さらに少しだけ腕に力をこめた。

しばらくして、バイクは強烈な減速を行う。

理由は単純で、目の前で赤信号が点滅していたからだだった。

停止線の前でバイクはきちんと停止し、一時の安心を感じる。エンジンは車体を小刻みに揺らしていた。

「何か間抜けだよなー。こんな時にも交通法規を遵守するってのも」

「赤信号突っ込んで、車に突撃される方が間抜けだろう」

左右の歩行者信号が赤に変わる。前方の赤信号は点灯を始める。

一穂は体を捻り、私の方へ視線を向けた。

「…遠野有希。少々言いにくい事があるんだが」

「な、何？」

少し冷たさを感じるような目つきが私の視線と交差する。ランプに照らされたショートレイヤーの黒髪が僅かに揺れる。

悔しいが、その姿は掛け値なしにカッコイイと思ってしまった。

気づけば私は、先程までの頬の赤さを一瞬にして取り戻してしまっている。

「…遠野有希」

「う、うん？」

信号が青に変わった。

一穂の視線が私の胸に向けられる。

まるで、捨てられた子猫でも見ているかのような、そんな哀れみの視線で。

「お前は毎日牛乳を飲んだ方がいい。多奈ですらもう少しは」

ぶん殴った。

「うるへー！ これはこれで需要があるんだよー！」

虚しい抗議が交差点に響き、バイクは再度加速を始める。

見上げた空には綺麗な月が浮かんでいる。何だか自分の悩みがちつぽけなものに思えてきて、もう一回だけ一穂をぶん殴った。

* * * *

「ねえ一穂！ あたしと多奈でね、昨日の夜、この橋を飛んでたんだよ！」

新利根川橋は昨日と同じように、鉄骨で出来た水色のアーチをライトアップさせていた。限界ギリギリの速度でバイクは走る。

日本有数の河川の上を架ける橋は長く、体にぶつかる風に若干の水分を感じた。爆風に鼓膜が慣れていく中、私は大声で話す。

当の一穂は私の話など聞いてもないかのように無反応だった。背中越しではその表情は見えない。

「おいっ！ 聞いているのかー!？」

締め付けるように腕に力をこめる。毎日の牛乳が必要と診断された胸部が、一穂の背中の体温を感じる。

「…遠野有希。後ろが見えるか？ 後ろに車両は何台見える？」

切羽詰った口調。私は首が痛くなるくらいに後ろを振り返った。

「後ろには車はいないよー！」

私の言葉に対し、一穂は舌打ちしながらハンドルを悔しそうに叩いた。

「…してやられた！」

「え、何？ どうしたん？」

「前を見てみろ」

一穂の背中 で 前方の景色は全て隠されている。

無理矢理に頭を動かすと、道の先、橋の終わりにフロントライトの明かりが5つ見えた。目をこらせば、それは全てバイクのライトであり、まるで道を閉鎖するように並んでいる。

「あれって…いわゆる、待ち伏せってやつー!？」

昨日の歩道橋の事を思い出す。逃げ場のない所に追い込んで挟みこむ手法。

私達が橋に入った途端に封鎖したのだろう。長く巨大である橋には、私達以外の車両は存在しなかった。

「何故だ？ わざわざ俺達なんかをマークしてたのか…？ …何故だ？」

「ぶつぶつ言ってる場合じゃないぞ一穂！ どうするどうする!？」

スピードは落ちない。橋の終端は近づいていく。

「…どうせ後ろも封鎖されている！ まともにやりあっても勝てない！ このまま突っ込む！」

エンジン音が更に一段階大きくなる。体全体に加速を感じる。

「ああ神様！ アグレッシブな人生に感動します！」

ぶち当たる風にコートと髪の毛は激しく踊る。

鉄骨を通り過ぎる度、視界にランプの光の筋が高速で走る。

迫るバリケード。私は思わず強く抱きつき、服を握り締めた。右手の感触に、私は自分の力の存在を思い出す。

「：ねえ、一穂！ ワープって憧れない！？ 胸に熱いものを感じない！」

「はあ？ よく分からんが落ち着け遠野有希！」

「あたし、滅茶苦茶に最高な名案を思いついたよ！ 上手くいったら盛大な拍手と賞賛の嵐をよろしく！」

「何をするんだ!？」

「このまま突っ込め！」

「変わってねえー！」

三桁のスピードでバリケードは迫る。

ついにはライダーの服装まで分かるくらいの距離になった。

衝突まで、あと数秒。

まさか突撃してくるとは思わなかった彼らは、バイクを置いて逃げる者、驚いて何も反応出来ない者の二種類に分けられた。

遠くから見えなかったが、バイクとバイクの隙間にはハードルのような工事現場の看板が

敷かれていた。バイク一台すら通りぬける間も無い。

衝突、3秒前。

「鳥よ！」

右腕を走る緑の光。それを全力で広げ、私と一穂を包むイメージを見る。

右手を前方に向け、光の『鳩』を射出する。放物線を描いた光は前方のバリケードを飛び越え、その先で拡散した。

衝突、1秒前。

「飛べっ！」

瞬間。私達は障害を越える。

3.

スクリーンが消され、二人しかないパーティ会場は再び薄暗さを取り戻した。

ガラス張りの壁から差し込む月明かりを浴びながら、二宮は笑顔で多奈を見つめる。

「はい。今日はここまで、ってね」

「…今の画像は？ 誰が撮影しているんです？」

「企業秘密。そんな事より、いちいち蒼腕の魔女なんて言いにくい名前を呼ぶのも何なんですね。名前をお聞かせ願えるかな？」

「…………伊勢崎多奈。…既に調べてあるのでしよう？」

二宮は頭をかいた。

「いやー、実は全然調べられなかったんだよね、実は。いきなり二週間前に社長から『蒼腕の魔女を捕まえろ』っていう業務命令が来ちゃってさ。聞かされたのは、蒼腕の魔女っていう単語と、右腕に能力者育成機能を埋め込まれているという事だけ。無茶苦茶もいい所だよなあ？ そんなんで出来るかっての！」

まるで仕事の愚痴を部下に話すかのような口調で話す。

「それがさ、三日前。いきなり社長から、『11月24日に蒼腕の魔女を乗せた車が国道4号線を走る』っていう情報が車のナンバー付きで回ってきてね。訳分かんなかったけど、社長がいきなり用意してくれてたゴツイおっさん達引き連れて…後は多奈ちゃんの方が分かっているかな？」

多奈はひたすらに二宮を睨みつける。結局の所、彼は、あるいは社長とやらは何を多奈に求めているのか。それを見極めるために。

「営業の平塚さん…。あ、昨日の夕方に多奈ちゃんがボコボコにしちゃった人なんだけど。平塚さんなんて、家に帰って小学校に入ったばかりの娘と遊びたかったのに、いきなり夜に出動命令。泣く泣くヘリコプターなんて乗って、結局失敗しちゃって。悲しい事に大減給だ

とさ。…まあ、上司の俺もそうなたちゃんたけどさ。元自衛隊員ってだけで現場の陣頭指揮任されちゃってさ、ホント可哀想だよなー？」

大きな溜息。仕事の愚痴を延々と話すその姿は、目の前で少女に手錠をかけて繋いでいる光景に合っていないかった。

「今日は今日で、今度は1県1都離れた千年谷市で反応があつたからって言われてさ、作戦会議を開けたの人を集めるだのと大慌てだったよ。しかも、社長出席のミーティングでいきなり娘の辻堂都ちゃん登場。多奈ちゃんは知ってるかな？ 眼鏡の可愛い女の子なんだけど。その都ちゃんが俺の下に付く事になってさ、そしたら五時間後には多奈ちゃん連れてきちゃって」

話の途中で扉の鍵を開ける音が響く。開いたドアからは廊下からの明るい光が差し込み、ブレザーの制服を着た少女が入ってくる。

薄暗いパーティ会場に、その制服は似合っていないかった。当の本人はそんな事を気にせず、眼鏡を指で押さえながら多奈と二宮を交互に見る。

「どう？ 説得出来た？」

「おつ、噂をすれば都ちゃん！ 丁度、都ちゃんの話をしてた所だよ」
いきなり肩を抱き寄せようとする二宮の手を淡々とした動作で払う。

「父から与えられた仕事は蒼腕の魔女の箠絡ではないはずですよ、二宮さん」
「はいはい。都ちゃんはクールだねえ…。まあ、そこがいいんだけど」

手錠の音が響く。多奈は都と呼ばれた女子高生を睨むように見つめる。

「…有希は…！ 私を攻撃した際に近くにいた、女子高生と男性はどうしました!？」

がちやつ。手錠が手首に食い込む。返答次第では殴りかからんばかりの勢いで、多奈は辻堂都を睨みつける。

「他の二人に危害を加えたりはしていないから安心なさい。…そういう視線を一日に二度も見せられるのは堪えるわね…」

都の溜息に押されるように、二宮は多奈の前に座り、その瞳を見つめた。

「さて、多奈ちゃん。俺らの苦勞を聞いた上で、ちよつとしたお願いがあるんだけど」

「二宮さん、言い方が優しすぎない？」

「俺ってばフェミニストでね。どんな状況でも女の子には優しいんだよ。勿論、都ちゃんにだってね？」

「…私が悪かったわ。貴方の趣向なんて物凄くどうでもいいから、さっさと続けて」

「はいはい…。さて…」

二宮は多奈の右腕を握り、その目を見つめる。

その瞳には先程までのヘラヘラした雰囲気は無く、研究者が実験対象を見るような、そんな冷淡な視線に変わっていた。

「蒼腕の魔女。我々は君の右腕に埋め込まれた物質を摘出する。…ごめんね。君に拒否権は無いんだ」

いつの間にか握られていた拳銃。発射された麻醉弾が、多奈の首元に突き刺さった。

* * * * *

「一穂！ もっとスピード出ないの!? 追いつかれちゃうよ!」

「それでもアクセルは踏みっぱなしだ！ 型落ちの中古品にしては良く働いてる！」
橋を越え、高架に入ると新4号国道はさらに交通量を減らした。

前方に車両のランプは見え、後方からは私達を追う5つの光点のみ。

二車線の道路に沿って、高さ4メートル以上の防風柵が張り巡らされている。外の景色はおろか、対向車線の車すら全く見えなかった。

晩秋の夜風がコートを躍らせる。手袋をしていなかった手が凍える。エンジン音と風音が鼓膜を派手に揺らす。

速度は既に時速130キロを超え、僅かなカーブや段差ですら振り落とされそうな慣性を生む。一穂の体に抱きつく力をさらに強めた。

まっすぐに伸びた道路を暖色の光点が等間隔に照らす。

全てが高速で動く中、夜に浮かぶ月だけが静寂を保っている。

「……うーん、やっぱりコレってまづいよなあ……」

抱きつきながらも右手は握ったままだった。

その指の中には、傷口もないのに溢れ出した血液が握られている。先程の跳躍で能力を使った事による失血だった。

「何か言ったか!？」

「この窮地は美少女のあたしに対する試練だって言ったの!」

「現実逃避している暇なんて無いぞ! 第一、その台詞はもう少し牛乳を」
殴打。

「うるへー! とつとと運転しろ!」

体を曲げ、後方へ視線を送る。こんなくだらないやり取りをしているうちにも、後ろの光点は少しずつ距離を詰めて来ている。

横に並ぶまでの時間は思っている以上に少ないだろう。

胸が興奮で爆発しそうなくらいに鼓動する。テンションのギアが勝手にどんどんシフトアップしていく。

「一穗! 一穗さんはバイクチェイスのご経験は御座いますかー!？」

「昨日が生まれて初めてのカーチェイスだったよ! バイクチェイスなんて経験はない!」
「奇遇だね! あたしも初めてだよ! この共通点って何か運命的なものを感じない!？」

「勝手に50億人と運命を感じてろ! 漫才なんてしている暇なんてないだろうが!」
「ばあん!」

後方で破裂音が響き、空気を切り裂く弾丸の音を聴いた。

振り向けば強烈なフロントライトの光が目を打ち付ける。

黒のバイクスーツに黒のヘルメットをかぶった4人は、既に10メートルの所まで近づいていた。

——逃げ切れない。でも、逃げなきゃならない。だから……。
血に濡れた右手を強く握る。

ヌルヌルとした感触が非常に不快だったが、覚悟を決める事においては効果的だった。

——覚悟を決める、遠野有希。そして、やる時はとことん派手に、かっこよくやれ。

目を瞑る。息を思いっきり吸う。これから私の始める事に対し、全力を尽くす事を誓う。締め付けるくらいの勢いで抱きつく力を強める。もしかしたら、この感触は二度と味わえないかもしれないのだから。

「よお——っし！」

手を開き、右腕を勢い良く横薙ぎに振る。手の平から数滴の赤い雫が飛んだ。僅かに開いた一穂と私の間に強烈な風が吹き込み、トレンチコートが巻き上がる。

思わず頬が緩む。もしかすると興奮で目が輝いているのかもしれない。

「……どうした遠野有希？」

不思議そうに一穂が愉快で仕方が無い。テンションだけが勝手に上昇していく。

「あのさー！ このコートってー！ 高かったりするー!!」

風音とエンジンがごうごうと爆音を鳴らす。

頭上では褐色のランプが高速で過ぎ去っていく。

後ろに光点が5つ見えるのを確認しながら、私は風音に負けないように大きな声で質問する。私が振り落とされないようにしっかりと掴まっている一穂は、多分「安い」と言ったと思った。

「これからー！ このコートねー！ あたしの血まみれになっちゃうけどー！ 笑って許してねー！」

一穂の質問が飛ぶ前に。

両手で押し込むように、一穂の背中を思いっきり叩く。
生まれた斥力が、私を後方に突き飛ばす。

「有希っ!？」

一穂の叫びが届く前に。

私はバイクの後部座席から自ら飛び降りていた。

——昨日の夜、空を飛びまわって培った、このあたしの空中感覚を見よ！

そう言いたかった。

空中で回転し、足を突き出す。そのまま、後方に控えていたバイクの運転手に強烈なドロップキックを打ち込む！

予定だった。

「によへえええー！」

現実には私に対して厳しかった。回転しようとして捻った体はあらぬ方向への遠心力を生み、思わず出た声は果てしなく格好悪かった。

ドロップキックどころではなく、私の体は空中で横ばいになってしまっていた。

一穂から見れば、打ち揚げられたマグロが空中に浮いているような絵を想像するかもしれない。

1メートルちよつとを落下するまでの僅かな時間。

ゆつくりとした相対速度で、後方を高速で走るライダーへと私の体が出っ込んでいく。

ライダーは腕で顔を覆っていた。ヘルメットに隠れて表情は見えないが、その中ではこんな事を思っていたのかもしれない。

何だこいつは、と。

「ごふえふ！」

そのヘルメットに目がけて、私の脇腹が激突する。

その姿は何とも言えないほどに間抜けだったと確信した。

相対速度と全体重を掛け合わせた運動エネルギーがライダーを座席から吹き飛ばす。同時に、私もそのまま吹き飛ぶ。脇腹に激痛が走る。

落下していく。90度傾いた視界。その左側ではコンクリートの地面が高速で移動していた。一秒も無い瞬間が飴のように伸ばされていく。

バイクが横転するのを見る。夜に光るランプが綺麗だった。地面が迫る。私を殺せる衝撃と摩擦力が目の前まで迫る。

右腕を突き出す。その先には驚いた顔でこちらを見つめる一穂。

——鳥よっ！

時間がスローモーションで流れていく。コートの肩が地面に擦れて音を立てた。

私は一穂の背中感触を思い出す。あの場所に戻る。それだけを強く祈って光の鳩を飛ばす。

「運べえええ——っ！」

キィイ——ン……。耳にノイズ音が響く。

瞬間。視界は一面の黒に切り替わり、それが一穂のコートだと気づくのに1秒を消費した。振り落とされないように大急ぎでしがみつく。

「な、何やってんだ!？」

「あ、あははは……。し、失敗しちゃったい……。った、いたたたたー！」

驚きと興奮と痛みが一気に溢れ返る。踊り狂う鼓動。激痛に呼吸が乱される。

痛む脇腹を押さえる事も出来ぬままに後ろを振り向く。横ばいに倒れた一台のバイクが高速で遠ざかっていく。

「はあっ……はあっ……。あ、あはははは……。い、一機撃破ーっ！」

ガッツポーズも出来ないので、溢れ出す興奮を抱きつく力に変換する。

そうでもないしと収まらないし、それでも収まりきれていない。

達成感なのか爽快感なのか分からない、ただただ跳ね回りたくなるような感情だけが暴れ回っていた。

「な…なっ…。…遠野有希！ 失敗したらどうなるのか分かったのか!？」

「一穂、覚悟つてのは無茶するためにする物なんだよ!」

言葉を失う一穂。そのコートに私の血が滲んでいく。右手を真つ赤に染める血液がどこからともなく溢れていく。

——大丈夫。まだ全然大丈夫。

自分に言い聞かせる。人間はどのくらい血液を失うと死ぬのか…そんな発想を頭から追いつ出す。

ぱあん！

すぐそばから破裂音。右に一車線離れて並走するライダーは、左手に持った拳銃の銃口をこちらに向けていた。

ぱあん！ があん！

二発目はバイクの車体に直撃する。僅か数グラムであるはずのゴム弾が数百キロのバイクを揺らした。

「…遠野有希、顔を伏せていろ！ 当たっても死ぬ事はない!」

一穂の声が届く前に、私はそのライダーに向けて右腕を向けていた。無傷で血まみれの右

手が通り過ぎるランプに何度も照らされる。

「鳥よ！」

「遠野有希？ お前、まさか……」

ライダーの銃口と私の右手が直線で繋がる。

発射速度はどちらが速いのだろうか。そんな事を思いながら音速の鳩を飛ばす。

「奪え！」

鳩の拡散を見た直後には、右手にずっしりと重い拳銃のグリップが握られていた。

相手のライダーは銃を握ったポーズのままに、何が起きたのかを理解できずに固まる。

グリップが血で滑る。

初めての銃の重さに驚きつつ、それでも横撃ちに構え、銃口を相手に向ける。

「自称、下町の銃撃小町をなめるなあっ！」

「ぱあん！」

『命中率なんて気にしない。スタイルが命』を合言葉に、鍛えに鍛えたガンアクションゲームでは抜群の自信があったが、実際の銃では容赦なく明後日の方向へ飛んでいった。

更には発射時の反動が腕を走る。グリップが血で滑る。

「自称が無理するな！」

「うっさい！」

「ぱあん！ ぱあん！ ぱあん！ ぱあん！」

連射するも、弾丸は対象に当たることなく飛んでいく。

更には頭皮を伝って流れた血液が右目を濡らし、大急ぎで拭う。

「……ったく！　こう狙うんだ！」

一穂は胸ポケットから銃を取り出す。無骨なデザインの拳銃だった。

銃口が無駄の無い動きで相手を捕らえる。

「ぱあん！　がんっ！」

放った弾丸はバイクのハンドルに直撃。

強制的に右ハンドルを切らされたバイクは防風柵へと突っ込んでいった。

「す、すげえー！　かつこいいー！」

「…………。すまない。流石にアレはまぐれだ」

「……」

頂点まで盛り上がったテンションがそのままマイナス値になるような感覚に襲われたが、一穂にツツコミを入れる暇も無く状況は高速で流れていく。

「ぱあん！」

破裂音が背中越しに聞こえ、少しの間離れた緊張を取り戻す。

延々と真っ直ぐに続く道路には相変わらず車両の陰も無い。時速100キロを超えた中で
の戦闘が続いていく。

顔に当たる冷たい風が、流れた血液を急速に固まらせていく。

「あと二機！」

背中にフロントライトを感じる。後ろ向きに銃撃を放つものの、相変わらず当たる事は無かった。

——まだ。まだ大丈夫。

背筋に血液が流れていくのを感じ、寒気を感じる。

どうやら、出血する箇所は手や頭とは限らないらしい。

右手の出血は相変わらずで、こめかみを伝う血液が首を通過し、トレーナーを赤に染めていく。

——白のトレーナーは大失敗だったなあ…。

普通、服を選ぶ際に血で汚れる事なんて考えるわけが無い。大急ぎで用意した服なのだから仕方が無いと自分に説明付ける。

「ほらほら！ 残り三機！ ちゃきちゃきぶっ倒すよ！」

「倒すのが目的じゃないんだが…」

月夜の下に4つのエンジン音が響く。

差は開くことなく、相手の数は減らしても、追い立てられる構図だけが崩れない。

「よし、一穂！ こうなったら連携攻撃しかないね！ 名づけてツインスパイク！」

「何が」こうなったら「なのかさっぱり分からんが!？」

「いいから！ 失敗したら、多分あたし死ぬんで宜しく！ 鳥よー！」

「もう少し安全な方法を考えろ！ …ああくそっ！」

右腕を左のライダーへ向ける。光の鳩がバイクごと捕獲していく。

「飛ばせー！」

瞬間、左を走っていたはずのバイクは私たちの進行方向先に現れる。

「はいっ！ そのまま突撃！」

「出来るかー！」

前方に飛ばされたライダーは大急ぎでハンドルを左に、一穂は右に切る。その間はすぐさま詰まって行く。

避けきれず、前方のバイクの後輪に前輪が擦れるように衝突する。

僅かな衝突だったが、送られた運動エネルギーは膨大だった。後輪を当てられたバイクはその場でスピンする。

「鳥よ！ 舞えっ！」

スピンするバイクの上空に向けて右腕を突き出す。血液が跳ねて後方へと散っていく。

キイーン…。ノイズ音が脳に響く。視界が紙芝居のように瞬間的に変わる。

スピンを続けるバイクの3メートル上空。突然現れた私は重力に従って落下する。

「ふいに——————つしゅ！」

回転するバイクを踏みつける。

バランスを完全に失ったバイクが横ばいに倒れ、コンクリートに削られて火花を上げた。

同時にバランスを崩した私は、一穂の背中に向けて鳩を飛ばす。一瞬後には後部座席に戻っていた。

「ただいまー！」

「……」

お迎えの言葉は呆れと疲労をたつぷりと配合した溜息だった。

そんな中、二人にまで減らされたライダー達は、左右から挟み込むという手法を取った。左のライダーは銃の代わりに一メートルほどの鉄の棒を手にし、徐々に近づいて来る。

ぱあん！

右のライダーからの銃撃。弾丸は私の後ろを通過し、高い防風柵に当たって衝撃音を生む。遠くからでは当たらないと踏んだのか、近づき、再度銃口を向ける。その射線は一穂に向けられていた。

当たってしまう。

そう思った瞬間に私は右肩を押し出し、一穂の体を覆うように抱きついていった。

ぱあん！

「あ……っ！　くううう……っ！」

激痛。右肩に直撃した弾丸は、大男に殴られたのかと思うくらいの、予想を遥かに超えた衝撃。思わず呻く。

「有希っ!？」

「騒ぐなっ！ …あーもう！ 勝手に体が動いちゃったんだからしょうがないだろー!?」
銃撃された部分がずきずきと痛む。思わず涙が出た。

ぱあん！

右からは先程の成功を励みにしたかのように銃撃が飛んでくる。

「黙ってる！」

素早いモーションで行われた一穂の銃撃は、ライダーのヘルメットの側頭部に直撃し、座席から落下させた。

乗り手を失ったバイクはそのまましばらく走行を続け、横転する。

「あと一機！」

二人の声が同時に響く。

その間にも、最後の一機は着実に私たちとの間を詰め、右手に携えた鋼鉄の棒を振りかぶっていた。

振り下ろす先は、私の頭部。

——間に合わない！

腕は一穂にしがみ付く為に使われている。振り下ろされる凶器を、私はただ見つめるだけしか出来なかった。

接近する鉄が私を、

ぱあん！

一穂の銃撃。破裂音と共に、ライダーの振り下ろす腕が再度振り上がる。肩に直撃したのか、右肩から大きくのけぞっていた。

「…この距離ならば外れない」

ばぁん！ ばぁん！

左腕に、右足に。二発の銃弾がライダーに直撃する。それでもバランスを崩さなかったのは奇跡だったのかもしれない。

鉄の棒を持ったライダーは距離を離していく。

「逃がすかつ！ 鳥よ！」

痛む右肩を堪え、その手をライダーの持つ棒へと向ける。

「奪え！」

瞬間、右手にずっしりと重い感触。血で滑り落ちそうな所を左手で握って支える。

両手を鉄の棒で塞がれ、バランスを失う。そのまま一穂の背中を強く押し、バイクから飛び降りた。

「鳥よ…」

「有希っ!? お前また…!?!」

空中に放り出され、一瞬にして距離が離れる。

瞬間の開放感を感じつつ、視線をライダーへと向ける。意識の中で光の鳩が飛んでいく。
「運べ！」



次の瞬間、ライダーの背中を見下ろす景色に変わる。私は思いつき鉄の棒を振りかぶった。

振り向いたライダーのヘルメットに私の姿が映る。

映った私は背中に大きな月を背負い、コートを大きく広げていた。ランプを反射して褐色に輝く鉄。襲い掛かるその姿は、自分とは思えないくらいに格好良かった。

「てやああああああっっ！」

一閃。

派手な衝撃音が雲のない月夜の下に響き、バイクチェイスの終わりを告げていた。

4.

赤信号だった。停止線の上で、エンジンが小刻みな振動を生む。

私は無言のまま、もたれるようにして一穗にしがみついている。

頭が重く感じる。動悸が激しかった。文字通りの貧血の症状を起こしていた。

「……多奈から、どういう能力なのかは聞いていた」

一穗が私の右手を握る。滴るくらいに血液で濡れた手を。

夜風で冷えた手に感じる体温は心地よかった。

「…すまない。妹の為にこんな無茶をさせてしまつて」

——あたしは、あたしの為にこうしているんだけど…。

反論は頭痛に消される。血液に濡れたトレーナーが背中中に張り付いた。

——あたしは、ただ自分の正義を貫きたいだけで…。

考えた言葉は勝手に消えていく。今はただ、右手の暖かい感触が心地よかった。

しばらくの間、お互いに沈黙が続く。今はただ、落ち着いた静寂が心地よかった。

青信号になった。右手は離れ、バイクは加速を始める。

振り落とされないように、強く一穂にしがみ付く。

その日は月が綺麗だった。冷たい風が心地よかった。

いつまでも続くような11月の月夜の下。

非現実的なカーチェイスを終えた私にとって、背中越しに伝わる体温だけが、やたら現実的だった。

A black and white illustration of a city street. Two tall, dark buildings with many windows line the street. A bright sun is visible in the sky, partially obscured by clouds. The style is sketchy and expressive.

遠野有希による我儘で身勝手な戦争

Escape 5.

1.

「ららく♪ お前は黙ってコレを食え♪ 四の五の言わずに食って寝れ♪ 栄養抜群♪ 糖分全開♪ 死なない体に一日一本、ばくらんすすういんぐ♪」

顔の血痕はハンカチで拭い、血まみれのトレーナーはトレンチコートで隠す。

そんな手間暇をかけて夜のコンビニでバランス栄養食を買った私は、月夜の下、24時間光り続ける照明に照らされながら歌声を響かせた。

「…何だ、その奇天烈な歌は？」

「あれ、一穂は知らない？ これこれ。これのCMソング。はっちゃけた感じが個人的にグツと来るね！」

一穂に手渡したのはバランス栄養食の包装紙。中身は既に私の胃の中に投下されている。

『バランススウィング』と力強い文字で英語表記された赤色の包装紙の裏には、異様な長さの成分表が書かれている。

「…まあ、鉄分とかタンパク質が摂取出来れば問題ないが」

「そんな速攻で血が出来るとは思わないけどねー」

一穂はバイクに寄りかかりながら肉まんを頬張る。私はコートのポケットにバランススウィング（バナナ味）を数本突っ込んだ。

時間は22時を超えており、周囲は夜の静寂が広がっていた。何も食べてない私たちは空

腹に負けて、今こうして簡単すぎる食事を取っている。

これから親友を悪者から救出していくヒーローとしては、最悪に地味な光景だった。

「んー、最後の晚餐がコレっても何だかなあって感じ」

「最後の晚餐と決まったわけじゃないだろう…」

一穂は私の背中越しの景色を仰ぎ見た。私もつられて後ろを振り向く。

宿河原センタービル。約200メートルの巨大なビルが威圧的に私たちを見下ろしていた。

40階建ての二本のビルが並ぶように聳え立ち、その中間を渡り廊下が繋いでいる。

月夜を背にし、アルファベットのHのようなシルエットは煌々と光を灯していた。ガラス張りのエレベーターが上下している。

正面広場には等間隔にケヤキの木が植えられ、地面に埋め込まれた照明の光で照らされている。その先には噴水があり、そろそろ深夜に近いというのに、溢れ出す水が煌びやかなライトに照らされて輝いていた。

周囲は工場のような建物が広がっており、そのビルだけが異様に突き出たような景色が広がっている。

「多奈はあれの何階にいるんだっけ？」

「36階から40階のどこかだ。どっちの建物かは知らん」

再度、ビルを見つめる。これから私が戦争を挑みこむ、戦場を見つめる。

「……しっかし、何で製薬会社が多奈を誘拐するんだろうねー？」
包装紙をひらひらと振り回す。

やたら甘くて腹にたまるバランス栄養食品の製造元の欄には小さく、株式会社フロントグリップの文字がプリントされていた。

しばらくして、合図も無しに二人は歩き出す。静寂の夜に二人の足音が響いていた。
冷たい夜風が葉の落ちきったケヤキの枝を揺らす。

地面に設置された周囲の照明が私の影を多方向へ伸ばしていく。
ゆっくりと息を吸い込む。夜の冷気が心地よかった。

瞳をしつかりと開け、胸を張って歩く。

血を拭い取った右手には汗が滲んでいた。

高揚感だけが先走る。

恐怖と好奇心と闘志と焦燥が複雑に混ざり合い、鼓動だけが高鳴っていく。
雲のない月夜の下。静寂の空気に二人の足音が響いていた。

遠野有希による、我儘で身勝手な戦争が始まる。

2.

正面玄関には丁寧な、このビルの何階にどの会社があるかを網羅した案内板が設置されていた。

二つの建物と渡り廊下で形成されているビルは、それぞれイーストタワーとウェストタワーという名称が当てられており、それらは4階の食堂と16階の渡り廊下で接続されている。株式会社フロントグリップはウェストタワーの36〜40階と表記されていた。

巨人ですら通れそうなガラスの自動扉を抜けると、簡素で広いエレベーターロビーが広がり、その手前を塞ぐ様に自動改札機と受付窓口。

警備室と兼用でもしているのか、窓口には警備服を着込んだ中年男性が2人。改札機の前に1人。

「すいませーん。案内板には載ってないんですけど、ここってイーストタワーですか？ それともウェスト？」

「はいはい、ここはね…。…ん!?」

私の可愛さ全開の笑顔による質問に対し、頭頂部の毛髪密度がアラートを上げている中年男性は途中で言葉を詰まらせ、もう一人に小さく相談するというアクションを返した。

「…おい！ この二人ってさつき言ってた…!？」

もう一人は引き出しからコピー用紙を取り出す。

そこに映っていた写真と私と一穂の顔を見比べて、その顔を真つ青に変えた。

「：茶色のトレンチコートを着た中学生あたりの少女と、20代後半の黒コートを着た成人男性の二人組……」

警備員二人は顔を見合わせる。中年太りした体に似合わず、その後の行動は素早かった。ジリリリリリリリリッ！

突然、目覚まし時計のような大音響がフロア全体に響き渡った。

背後の自動扉が素早く閉まり、自動改札機の扉がウェーブのように順序良く閉まっていく。「あ、あ、あれ？ 何これ!?」

周囲を見回して慌てる私。一穂は苦い表情で小さく舌打ちした。

鼓膜が痛くなるような音響の中、警備員は喉を枯らすような勢いで受話器に向けて叫ぶ。

「こちらイースト正面玄関！ 先程通知された、連続企業爆破犯の二人組が現れた！ 至急応援求む！ ……応援求む！」

「ば、爆破犯……!?!」

「遠野有希、強引にでも突破するぞ！ この警備員は誤情報で扇動されている！」

いきなり走り出した一穂に右手を引っ張られる。痛む腕を耐えながら、私も大急ぎで走る。立ち塞がった警備員に対し、一穂は容赦なくその眉間に拳銃を発砲した。

「とおっ！」

自動改札機を飛び越えたのは初めての経験だった。無銭乗車の罪悪感は一瞬だけ。

サイレン音がけたたましく鳴り響く。

人々に警戒を与えるための音響が、無条件に焦燥感を滾らせる。

「イースト正面玄関！ 爆破犯は検札機を無理矢理突破！ 大至急応援求む！ 警備員一人倒され！今二人！」

警棒で殴りかかっていた中年男性の側頭部に一穂のキックが直撃する。黒のコートが舞う。「ちよ、ちよっと一穂！ この人たちって無関係の人じゃ!？」

「そんなの構ってる余裕があるか!？」

飾りも何も無い簡素なエレベーターホールを走る。

僅かな距離がどこか遠く、引つ張られる右手が痛かった。

エレベーターの乗り口は3つ。

向かう階数別に分けられた乗り口には、それぞれ6つのエレベーターが設置されている。

ぴんぽーん。エレベーターの到着音がサイレン音の中に紛れ込み、そこから5人の警備員が登場する。さらには従業員専用と書かれたドアからも数人の警備員が現れた。

おのおの警棒を携えた彼らに向けて、一穂は容赦なくゴム弾を打ち込む。直撃した警備員

が倒れ、他の警備員が敵意と恐れ of 混じった視線を向ける。

一穂と私は逃げるようにその場を走り抜け、殴るように『1→16』と書かれたエレベーターのボタンを押す。

ぽーん、と気楽な音を立て、駆動音が僅かに聞こえる。

ここまで来るのは何秒後だろうか、もどかしさを感じる。

「連続爆破犯！ 追い詰めたぞ！」

振り向けば、十人を超える警備員が退路を塞ぐ形で並び、警棒片手にこちらを睨みつけていた。

こんな事態は彼らにとつても初めてだったのだろう。

明らかにその表情と声には興奮が現れていた。

「ま、待つて！ あたし達、別にそんな爆破犯とかそういう者じゃ……」

私の説得など気にせぬように、一穂が容赦ない発砲を行う。弾丸は正確に警備員の額に命中し、強烈な衝撃は運の悪い一人を沈黙させた。

「た、竹下ー！」

「お、おい一穂！ 折角あたしが説明しようとしてる時に何やってんだよー!？」

「今更説得が通じるか！ 俺らに出来る説得は……！」

一穂の銃口が警備員達に向けられる。ショートレイヤーの黒髪が僅かに靡き、冷淡な瞳が彼らを射抜く。

「……撃たれたくなかったら、動くな！」

警備員達の動きが一瞬にして止まった。

けたたましいサイレンは未だに鳴り続けている中、双方の間にだけ静寂が広がっている。

昏倒している竹下さんと言う名の警備員が小さく呻き声を上げる。

他の警備員達は喉を鳴らした。

それは数秒程の硬直だったが、エレベーターが到着するには十分な時間だった。

ぼーん。気楽な音と共に、エレベーターの扉が開く。

一穂は銃口を警備員達に向けたまま、後ろ向きにエレベーターの中に入っていく。右手を引く張らればなしの私も乗り込み、大急ぎで『16F』と開閉ボタンを押した。

苛立つ位にゆっくりと閉じていく扉。睨みつける警備員達の視線が少なくなり、そして扉に完全に遮断された。

ガタン、という駆動音を立てて、エレベーターは上昇していく。

「……ふうふう……。びっくりしたああ……」

広がる安堵感に、思わず息を大きく吐いた。鼓動は落ち着く事を忘れてしまったように激しく脈打ち続ける。

「……まさか、ビルの警備員を誤情報で扇動するとは思わなかった」

「……っていうかさ、あたし、『中学生くらいの少女』って言われてたのが結構ショックなんだけど……」

「……」

殴った。

「……何も言っていないんだが」

「考えてた事は大体分かる！ あーもう！ 人を乳で判定するなー！」

「遠野有希。人の価値は胸部で決まるものじゃないぞ」

「励ますなー！」

敵陣の中とは思えない程に緊張感の無い会話をしている間も、エレベーターの電光表示板に表示される数値が増えていく。

張り倒してしまった警備員は、今いる場所がイーストタワーと言っていた。多奈のいるウエストタワーには16階の渡り廊下を通らなければならない。

先程の騒ぎが嘘のように静かなエレベーター内。私は少しずつ値を加算する表示板を見つめている。

——もう、後戻りは出来ないんだよね…。

昨日までずっと、普通の女子高生の生活を送ってきた。

そんな私が今、警備員を張り倒してビルに殴りこみをかけている。

後悔は何も無かったが、この急激な変化に適應するための覚悟は必要だった。静かに息を吐く。

「ところで遠野有希」

「うん？」

「…そろそろ手を離して欲しいんだが。弾倉が交換出来ない」

16階に到着したのは、私が慌てて手を離し、一穗が私の顔が真っ赤だと指摘して、私が一穗を思いつきりぶん殴った、丁度その時だった。

* * * * *

宿河原センタービル16階。

イーストタワーとウエストタワーを繋ぐ渡り廊下には、静寂と夜の冷氣が漂っていた。外から見れば、ビルとビルの間に浮いているようにすら見える程の細い通路。

歩く度に床が僅かにしなるのを感じる。強度を得る為の設計だと思うが、少しだけ怖かった。

「ねえ一穗！ 外がすごい綺麗だよ！」

左右はガラスが張り巡らされ、その先には一面の夜景が広がっていた。

マンションの明かり。ビル正面広場で照明に輝くケヤキの木々。駅のホームに並ぶ人々。そのホームへと走る電車。

その先には大きな川が流れ、光の点描の世界に一筋の黒を描いていた。

渡り廊下に設置された蛍光灯からの光は弱く、若干薄暗い。その事が逆に、視界一杯に広がる夜景を際立たせていた。

右手をガラスにくっつけて、顔をぶつかる寸前まで近づけて夜景を見つめる。

冷たいガラスの感触が心地よい。

綺麗に磨かれたガラスは外の夜風が吹き込んできそうな程に、その存在感を確実に消していた。まるで地上16階に架けられた橋の上にいるような、そんな感覚を私に与えてくる。

「…そんなのを見てる暇は無いと思うが…」

ショーケースのおもちやを見つめる子供のような私に、一穂は疲労をたっぷりと含んだ溜息を吐いた。

「はふうう…」

一穂の溜息など聞こえぬまま、私は恍惚の溜息。

多奈の一緒に飛んだ夜の事を思い出す。

このガラスの先の空間を飛べたら、どんなに綺麗な景色が見えるか…。

「…遠野有希」

「…うえっ!? あ、あ! えーと、う、うん。 わ、分かってるって! ちょっと芸術家

の血が騒いじやっただけ!」

「…いつ警備員達に追いつかれるかも分からん。 走るぞ」

「らじゃー!」

たんっ。軽やかな足音を立てて、30メートルほどの渡り廊下を走っていく。

ガラス窓の先にはウエストタワーの外壁が見える。未だに明かりのついた窓の中にはパソコンに向かう会社員の姿がちらほらと見えた。

このタワーのどこかに多奈は囚われている。

夕暮れ時の別れを思い出して、胸に悔しさが滲む。

——待っててね、多奈。もうすぐ、あたしと一穂が華麗に助けに行くからね…。

たんっ、たんっ、たんっ。

ブーツを鳴らし、コートをはためかせて走る事、数十歩。

先を走っていた一穂がいきなり止まり、勢いを殺しきれなかった私とその背中に突撃した。視界が黒コート色に染まる。鼻が痛かった。

「うわっ！ い、いきなり止まるなよ一穂！」

ばぁん！

ここ二日で聞きなれた破裂音は一穂の視線の先から響いてきた。狙いが外れた弾丸が天井にぶち当たり、鈍い音を立てる。

黒コートの視界から逃れると、その先には黒いスーツを着込んだ男達が12人。それぞれの手には拳銃が握られ、私と一穂を確実にロックしていた。

「…逃げるぞ！」

振り返り、一穂が私の右手を引っ張って一気に走る。

しかしながら、絶妙のタイミングでもう一方の道は、

「爆破犯、発見ーっ！」

迫いついてきた警備員達にて封鎖された。完全に逃げ道を封鎖され、一穂の足が止まる。

思わず後ずさりをするも、一方から離ればもう一方に近づくというジレンマに陥る。警備員とスーツの男達は状況から意思疎通したらしい。私達が逃げられない事を悟り、歩くよりも遅い速度でゆつくりと包囲網を縮めていく。

後ずさる。自然な流れで、私と一穂は背中をくつつけるようにして敵と相對していた。

「：何ていうかさ、追い詰め方がワンパターンだと思わない？ 逃げ場の無い所におびき寄せるって手法ばっかだよな」

「毎回引つかかっているヤツが言う台詞か：」

じりじりと包囲網が縮んでいく。見えない空気の圧力を感じる。

12の銃口と11の警棒がゆつくりと近づく。思わず喉を鳴らした。心臓が高鳴っていく。「何ていうかも、問答無用な位に：大ピンチだね」

「こうなる覚悟はしているだろう？ 最初っから負け戦だ」

「そうだね。：よしっ！ 史上最強のジタバタっぷりを見せ付けてやるっ！」

一穂は左手に胸ポケットから取り出した玩具のような拳銃を、右手にコートの裾から取り出した鋼色の肉厚な銃をそれぞれ握り締め、その銃口を警備員達に向けた。

私は目を瞑り、左右に広がる夜空を思い浮かべる。吹き付ける夜風のイメージが思考をシヤープにしていくな。

「：鳥よ、鳥よ、鳥よ：！」

呟きより小さい声で言葉を紡ぐ度、右腕にスタンバイする鳩の数が増えていく。緑色に輝

く十二羽が右腕を輝かせるイメージを見る。

突き出した右手の先に黒スーツの男達が映る。拳銃の数と同数の鳩を右腕に留めていく。一定の距離を取り、包囲網の縮小が止まる。

耳が痛くなるほどの静寂と、破裂しそうな緊張感が周囲の空気を包んでいく。

「お久しぶりですね、蒼腕の魔女の友人様。初めまして、魔女のお兄様」

見た事のあるスーツの男が一步進み出る。相変わらず、細長い目とナヨナヨとした物腰がキザっぽい口調とミスマッチングだった。

完璧な王手を指したかのように優越感に浸る表情。その額には、多奈の盾が直撃した事による一筋のアザが浮かんでいる。

胸に付けられた名札から、平塚貫通ひらつかかみちという面白い名前を読み取った。

「特にお兄様は、昨日は大変ご無礼を致しました」

「ねえ一穂。そーいや一穂って昨日、こいつにやられちゃったんだっけ？」
右手は突き出したまま、背中越しの一穂に話しかける。

一穂は両手の銃を握り締めながら悔しげに答えた。

「……所詮、俺は素人なんだ。本当の訓練を受けた人間には勝てない」

「多奈は一瞬でぶっ倒してたよ。頑張ってリベンジしようね、お兄ちゃん」

「…出来ればそうしたいものだな」

いつの間にか話から外されてしまったのが不満だったのかもしれない。

平塚貫通は胸ポケットから銃を取り出した。

ナヨナヨっぷりからは考えられないほどに、その構えは様になっている。

「本日の業務は終了致しました。申し訳ありませんが、本日はお帰り願いますか？」

視線は冷たく、鋭い。

しかし多奈は昨日、この視線に打ち勝っていたのだという事を思い出す。

私はその視線を真っ向から睨みつける。右手が相手の銃口に重なる。

「…悪いけど、多奈を返して貰うまでは帰れない。…正直言つて、足が震えるぐらい怖いんだけどね。でも、ここで退いたら、あたしの信念が崩れちゃうわけ。あたしは、自分の信念、

性格が大好きだから、それを簡単にぐんにより曲げるわけにもいかないわけだよ」

起立状態での和平交渉はすぐさま決裂し、周囲に一時の静寂が流れた。

既に緊張感は限界までに膨らみ、破裂する瞬間を待ちあぐねていた。

息を深く吸い込む。

「…一穗。物凄く過酷な事をやり遂げるためのコツを教えてあげようか？」

お互い、視線は前方の敵を捕らえている。

「正義っていう銃を持つて、覚悟っていう火薬を詰めて、決意っていうトリガーを引くの。そうするとね、行動っていう弾丸は勝手に真っ直ぐ飛ぶんだよ」

必要なのはその三点だけなのだ。

自分は自分の正義に純粋であると信じ、どんな痛みにも耐え抜くための覚悟をし、一歩足

を踏み出すための決意をする。行動は勝手に後から付いてくる。

もう一度、息を大きく吸い込む。そして右手を突き出し、ありったけの声で叫んだ。

「鳥達よ！ 踊れえええ——っ！」

ミサイルのように、右腕から連続して12羽の鳩が発射される。空中に輝きの軌跡が何本も描かれた。

1秒にも満たない瞬間。男達の持っていた12丁の拳銃は全て私の目の前に移動し、落下していく。男達に驚愕の表情が浮かぶ。

ごつつ。

最後の一丁が私の足元に落ちた瞬間。

側頭部から血が噴き出した。

勢い良く飛んだ血液の飛沫が窓ガラスに赤い斑点を描く。

こめかみ、背中、胸。至る所から血が滲み出ていくのを感じる。

白いトレーナーが赤く染まっていく。

太ももを流れる血液がブーツの中に入り込み、最悪に気持ちが悪かった。

スーツの男達が私の異常な状態に困惑した声を上げた。

突然血まみれになった私は、きつとホラー映画にだってノーメイクで出れるだろう。

一切、痛みも傷もない出血。

真っ赤に染まった右手を握った。滴る赤の雫が拳銃に当たって撥ねる。

「…覚悟つて、こういうことだね、一穂…」

まるで私以外の存在の時間が止まってしまったかのように、私だけがゆっくりと動く。平衡感覚が無い。頭を鈍器で殴られてるように痛む。

体中が酸素を欲し、呼吸が勝手に速くなる。

奪い取った拳銃の一つを掴み、血に濡れた両手で構えた。

トリガーから血の雫が落ちていく。

「はあっ…。はあっ…。出来れば皆、逃げて欲しいな…。あたし、これでも普通の女子高生でさ、物凄く躊躇うんだよ、銃口を人に向けるのって。撃ちたくないし、撃たれたくないし…。でも…。それでも、あたしは多奈を助けたくて、皆がそれを邪魔したいのなら…。あたしは…。あたしの意志で引き金を引く。躊躇うけど、嫌な気分だけど…。それでも、あたしはあたしの決めた事を曲げない。曲げたくない。だから…」

——自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

私の揺るがない、揺るがせない信念を心の中で呟いて、大きく息を吸った。

「…あたしは突破する！ あたしはあたしの全力をもって、あたしの望む方向へと進む！」

発砲音が月夜の下に響いて、戦争が始まった。



3.

夢を見ていた気がする。

有希と同じ学校の制服を着て、椅子に座って授業を受けて、短い休み時間に談笑する。そんな夢。

自分の制服姿が驚くくらいに似合っていなかった。もしも自分が普通の女の子として生まれていたら、もう少し似合っていたのだろうか？

そんな夢を見た気がする。胸が少しだけ軋んだ。

「おはよう、多奈ちゃん」

目の前に二宮の顔が映って、眠気に霞む思考を大急ぎでフル回転する。

場所は変わらず暗いパーティ会場だった。右手首には硬い手錠がはめられ、チェーンが壁のフックに絡み付いていた。

白衣姿の二宮は右手に画用紙程の大きさのフィルムを手にし、隣では辻堂都が腕を組んでこちらを見つめている。

「……」

多奈は二宮を無言で睨みつける。未だに能力は働かず、手錠が虚しく音を立てた。

「多奈ちゃん。質問させてもらおうよ。これは多奈ちゃんの右腕のレントゲン写真なんだけど」
葉で眠らされている時に撮られたのだと理解する。

暗い部屋では見づらかったが、白と黒で表示されたフィルムには確かに腕らしい箇所が映っていた。

「この白いのが骨なんだけど…。それだけしか映っていないんだ。埋め込まれているはずの何かが全く映っていないんだ。…多奈ちゃんは何か知らないかい？」

「いいえ」

即座に否定。しかし、これは本音だった。多奈自身、右腕に何かが埋め込まれている事を今日に知ったのだから。

多奈の言葉を気にするわけではなく、二宮は眼鏡のブリッジを中指で抑えながら小言のように呟く。差し込む月明かりが白衣を照らす。

「…それじゃ何なんだ…？ …骨自体なのか…？ …いや、埋め込まれたのだから、蒼腕の魔女自体の構成とは別の…。…だがそうなる…」

音量はフェードアウトし、内容は彼自身にしか分からなくなる。その中、多奈は一つの疑問を投げかけた。

「…何故、私の右腕を狙うのですか？」

「簡単に言えば、お金儲けの為よ」

答えたのは辻堂都だった。眼鏡越しの黒い瞳が鎖に繋がれた多奈を射抜く。

「私が言っちゃいけないんだろうけど、最近のうちの会社、業績が正直ピンチなのよ。結構色んな商品に手を出してるんだけど、イマイチぱっとしない感じでね。いわゆる、主戦力商

品つてのが無いのよ。唯一売れてる商品と言ったら……」

「お前は黙ってコレを食え♪ 四の五の言わずに食って寝れ♪」

二宮があまり上手くない歌声を響かせた。

「魔女はテレビを見るのかしら？ 知ってる？」

バランススウィング。最近やたらと流れるバランス栄養食のCMを思い出す。

人を小馬鹿にしたようなCMが多奈は個人的に好きではなかった。勿論、食べた事は無い。「これも最近売り上げが伸びなくてね……。そこでね。貴方の右腕の物質を掘り出して、分析して、超能力開発薬を作るの。……超能力開発薬。漫画の見すぎって言われそうね。あまりに馬鹿馬鹿しくて言葉にするのも恥ずかしいくらいにチープな言葉だけど、結構本気で取り組んでるのよね」

「都ちゃん。夢のある話っていう言い方もあるよ」

「もしも完成して商品としてのラインに乗せられた場合、それはうちの会社だけの専売特許。……この部分は確かに夢のある話かもしれないわね」

多奈の脳裏に床の血痕が浮かぶ。右腕の光で能力に目覚めた場合の、能力者に課せられる代償。そこには夢のある話など無かった。

「待ってください！ 有希のような人を無尽蔵に増やすつもりですか！？ あの光で目覚めた能力は危険です！」

がちやつ。引き千切ろうとした手錠は音を鳴らすだけだった。

未だに戻らない自分の力に焦りが浮かぶ。右手首に赤い筋が浮いた。

そんな多奈に対し、都は冷淡な視線を返す。

「別に危険でもいいのよ。その場合のために能力消去薬があるんだから。むしろ二倍売れるから願ったり叶ったりね」

「あの薬、今は一時的にしか消さないけどね。後々には永久に消せる物を作りますよ」

多奈は思わず唇を噛んだ。自分や有希の能力もその薬が完成すれば消せるのだろうか、淡い期待を浮かべては必死に打ち消した。

「…そもそも。蒼腕の魔女としても悪くない商談だと思うのよね。…知ってるわよ。その右腕のせいで学校にも行けなかったんでしょ？」

「…っ！」

「仕方が無いと言えば仕方が無いわよね。クラスメイト全員が能力者になっちゃうなんて事にも出来ないでしょうし。…でもその事を、蒼腕の魔女としてではなく、一人の女の子としてどう思っていたのかしらね？ 諦め切ってた？ それとも、未練一杯だったりした？」

都は見せ付けるように、制服のリボンを多奈の目の前でひらひらと動かした。

多奈にとって、学校は別段憧れの対象というわけではなかった。そもそも学校での生活を知らない多奈には遠い世界の話のように感じていた。

しかしながら、有希という友人が出来てからの多奈の意識は僅かに変わっていた。

今日の朝。学校に行く有希を見送りながら、何故自分は有希の隣を歩けないのかと思って

いたのは紛れもない事実だった。

「……………」

目を逸らす。多奈に出来た唯一の反抗はそれだけだった。

「…まあ、さつきも言っただけ、多奈ちゃんに選択肢は無いんだけどね。出来れば協力的になつてくれれば一番嬉しいよ。そうしてくれると」

ぴろろろ♪　ぴろろろぴろろろぴろろろろ♪

携帯電話の着信メロディが鳴り響いた。その音色は二宮が先程歌ったメロディと同じだった。

二宮は白衣から携帯電話を取り出す。都はその受話器を見つめていた。

「どうした？　…ふむ。…へえ。了解。都ちゃんには伝えておくよ」

「何？」

「多奈ちゃんのお友達とお兄さんが、16階の渡り廊下で大暴れしてるんだってさ。都ちゃん、ヘルプ頼めるかな？」

多奈は二宮の言葉に反応した。

有希と兄がここにまで来ている。多奈を助ける、ただそれだけの為に。

「はいはい。分かったわ。元々私はそういう役目だしね」

小さく溜息を残し、都は部屋を後にした。

「有希…」

何とも複雑な感情だった。来てくれたのは嬉しい。だが、もしも有希に何かがあったら……現に今がその“何か”が起きているのだが、それに対する不安。

嬉しさと不安が織り交ざった、何ともいえない感情を多奈は感じていた。

二宮は電話を更に続けている。相手は恐らく、渡り廊下という所で有希と相対している誰かなのだろう。

「何で苦戦している？ 蒼腕の魔女ならともかく、相手は一般人だろう？ ……何？ ……ほはお。そういう事か。その子は魔女の光を浴びているからな。ありえない話じゃない……」

「多奈ちゃんの友達、能力者のようだね？ これがあの光の効果ってやつかな？」

「……！」

その言葉は、有希が能力を使っている事を示していた。能力を使うという事は、有希の血液が失われていく事を示していた。

——有希……！ その能力は私なんかのために使うべきではない……！

右手首の手錠が痛い程に食い込む。

今すぐにでもこの鎖を引き千切り、有希の所に行って能力の使用を止めたい。

こうしている間も有希は能力を使って、その血液をどんどん失っているのだから。

「……その子の能力の詳細は分かるか？ ……ん？ ……一瞬で拳銃を奪われた？ ……つまりはそういう……何かを略奪するような能力だと？ ……ふむ。……了解。……苦勞」

二宮はHOLDボタンを押し、通話を終了した。月光が白衣と眼鏡を照らしていた。多奈を見下ろしながら、静かに言葉を紡ぐ。

「多奈ちゃん。摘出手術は必要なくなるかもしれないよ。君のお友達のおかげでね」

「どういう事ですか？」

「君の友達の能力は、どうやら物質の位置をずらす能力のようだね。…こんな打ってつけの能力が他にあるかい？」

手錠が音を立てた。

何でこんなことになってしまったのだろう。

そんな漠然とした疑問だけが多奈の頭を廻る。次の言葉が怖かった。

「楽しそうな笑顔を浮かべる二宮は眼鏡のブリッジを指で押さえながら、冷静に言う。
「摘出は、遠野有希…この子にやってもらう事にするよ」

4.

銃撃を躊躇ったのは五発目までだった。

「はあっ…！ はあっ…！ はあっ…！」

床にはスーツの男が3人倒れている。

武器を奪われ、丸腰で私に向かってきた勇氣ある者たちの悲しい結末が倒れていた。その状況に男達は突撃を躊躇し、顔を見合わせた。

目の前にいる私は彼らにどう映っているのだろうか？

私は無傷で血まみれの両手で銃口を向ける。

トリガーは血で滑り、震える腕では相手を正確にロックする事が出来ない。

ターゲットまでの距離は5メートル程。

この距離でも、絶対に当たる事はないだろうと確信する。

「はあっ……。はあっ……」

まるで酸素の薄い高地にいる気分。荒い呼吸が止まらなかった。体中で血液が不足し、酸素が行き渡らない。

ぱあん！

背中越しでは一穂と警備員達の戦闘が行われている。破裂音と悲鳴。足音。人の倒れる音。腕を伸ばせば届くような距離の戦闘が、別世界のように遠くに感じる。

「相手は戦闘経験もない女子高生だ！ 何を躊躇う!？」

平塚が叫び、黒スーツの男達に統率の空気が生まれる。全員の武器を奪われる事など想定もしていなかったのだろう。

どこかヤケクソな雰囲気を感じながら、三人の男が私に向かって突撃を開始する。私はその男達へ向けてトリガーを引く。

例え殺傷能力の低いゴム弾でも、腕に伝わる衝撃は本物のようだった。

一発撃つ度に両手がホップする。手の中から抜け出そうと暴れる拳銃を必死に握り締めた。銃弾は一人の肩に直撃し、衝撃が敵を仰向けに吹き飛ばす。

残りの二人の足は止まらない。その内の一人が、レスリングのように足を狙ったタックルを仕掛ける。

「：鳥よっ！」

接触の瞬間。私は意識の中で鳩を飛ばす。

ノイズのような高音が耳に響いた瞬間、移動した私は彼らの右側でしゃがみ、銃口をその脇腹へと向けている。

容赦なく引き金を三度引く。

男の着ていたスーツが派手に凹み、衝撃がその体を薙ぎ倒した。

「はあっ……！ はあっ……！」

今度の出血は首からだった。元々白かったトレーナーは既に赤の分布が大半を占めていた。ミニスカートから伸びる足に血液の筋が描かれる。

気を抜けば意識が飛んでしまいそうな失血の中、思考だけが加速していく。私に流れる時間が飴のように伸ばされていく。

突撃してきた男の一人が、床に落ちていた拳銃を拾い上げる。

銃口が私に向けられ、乾いた銃声が響く。

——運べっ！

それは理性的ではなく、動物的な反応だった。

弾丸が到達するまでの刹那の時間に、私はその男の後頭部付近の空中へと移動していた。50センチの眼下、何が起きたのか理解出来ない男に向け、無慈悲なまでに引き金を引く。

「にあああーっ！」

ぱあん！

至近距離で放った弾丸は後頭部を直撃し、男を前のめりに吹き飛ばした。発砲の衝撃で銃が手からすっぽ抜ける。

二メートルの上空から落下するも、受身も取れずに思いつき尻を打った。

「……っく、くうううっ……！」

痛い。少しだけ涙が滲む。それでも床を這いずる様にして、奪い取った拳銃を掴み取る。間違つてトリガーを握り、発砲音と衝撃が腕に走る。

湿ったトレーナーが気持ち悪い。髪の毛が頬に張り付く。それでも、震える腕と足で立ち上がる。床に左手と同じ形の赤い手形が描かれる。

「はあっ……。はあっ……。はあっ……。」

立ち上がっただけの動作でも視点が揺らぐ。ぼやけた視界の中、スーツの男達は私の姿に對し、何か恐ろしいものでも見ているような視線を向けていた。

今にも死にそうなくらいに血液を流す私の姿は、もはや囚われの魔女を助けるヒーローに

は見えないのだろう。皮肉的に口元を緩める。

「あと……3人！」

視線だけで鳩を飛ばす。

瞬間。私は5メートル先にいたスーツの男の目の前に移動している。

相手が驚愕に目を開くまでの僅かな時間の後、私が放った銃弾がこめかみに直撃した。

倒れるのを確認する前に、私はもう一人の男の背後へ向けて鳩を飛ばす。銃口をその後頭部に当てる。放たれた銃撃が男の体を吹き飛ばした。

「ちいっ！」

残された平塚が隠し持っていた銃を構える。

明らかに他の男達とは違うスムーズな動作だったが、射線が私の額に到達する前に、鳩は平塚の背後へと飛んでいた。

「運べっ！」

瞬間。紙芝居のように景色が一気に変わる。

勝利を確信し、目の前の背中に銃口を向けようとした、その瞬間。

「ワンパターンなんだよ！」

平塚は体を捻り、右腕を横薙ぎに振るう。その手に握られていた拳銃のマガジンが私の側頭部に直撃した。

「あぐうっ！」

意識を刈り取るような激痛。

視界に火花が散る。吹き飛ばされるようにして横向きに倒れる。

――撃たれる！

一瞬にして体中にアラートが流れる。反射的に片手で銃を構え、トリガーを引く。
がちっ。

絶望の音が響き、周囲は一瞬だけ時間を止めた。

音は発射される弾丸が無い事を全力で伝えていた。

右手を突き出した状態のまま、手から拳銃がこぼれ落ちる。

「あ……あ……」

「さあ、お帰り願いましうか！」

銃口が向けられる。奇襲を破られたというショックが頭を廻り、逃げると言う選択肢すら浮かばなかった。ただただ怯えの感情だけが溢れ出す。

首筋に血が流れた。右手から滴った血液が太ももに落下した。

血液。

頭の中に一つの発想が浮かぶ。

そして、私はこんなにも残酷な事を考えられるのかと自責する。

「鳥よ……」

頭の中では「本当にやるのか」という質問が繰り返され、「やらなきゃやられる」という答えを何度も返している。

鳩は飛ぶ。音速で相手の“体内”を通過し、私の右手の前で弾ける。

「……………奪え……」

びちゃっ。

瞬間。真つ赤な液体が右手の先の空間に現れ、重力に従って落下した。床に叩きつけられ、飛び散った飛沫がブーツに赤い斑点をつける。

初めて私は恐怖で目を瞑った。

それは血であり、そしてそれは私の血液ではなく…。

「……くっ……あ……っ」

私を狙っていた銃が手から零れる。呻き声と共に、血液を抜かれた平塚は床に突つ伏した。横向きに倒れたその顔は真つ青だったが、辛うじて呼吸はしていた。殺していない。その事実が私にとって最大の安心だった。

「はあっ、はあっ、はあっ……!!」

鼓動が暴れだす。体中の細胞が酸素を求めて悲鳴を上げているのを感じる。

ばあん!

何発目かも忘れた銃声。

見れば、一穂は最後の一人を打ち倒していた所だった。そして、スーツの男達は全て倒れているか、あるいは逃げだしていた。

一瞬の安心感が強烈な疲労を生み、思わず仰向けに倒れる。コートが床に広がる様はまるで昆虫標本だった。

数秒前が嘘だったかのように、周囲には静寂が広がっていた。

視界に映るのは天井の白熱灯。窓の先には月と夜空が広がっている。景色だけは変わらずにそこに有った。

「…遠野有希。無事か？」

「全然」

視界に一穂が現れる。見下ろすその顔には殴られた後が残り、髪の毛は乱れに乱れていた。私は出来る限り精一杯の笑顔で、二人の勝利を確かめる。

「…やれば出来るじゃん、あたしたち」

一穂は笑顔で答える。初めて見た笑顔は多奈にそっくりな、はにかむような笑顔だった。「…そうだな」

二十二人を支える渡り廊下に、二人だけの声が響く。

一穂は右手を差し出した。血まみれの手で触るのを躊躇う私の右腕を掴んで引っ張る。立ち上がった途端に強烈な目まいを感じたが、何とか両足で支えきった。

「…後は多奈を連れて帰るだけ。気合入れていこー…」
声に力が入っていないのは自分でも分かっていた。

歩き始めて数歩。

「あらら…。凄い事になっちゃったわね…」

渡り廊下の先に現れたのは、ブレザーの制服を着た眼鏡の女子高生だった。その右手には、数時間前に私を撃ったショットガン風の麻醉銃が握られている。

「お久しぶりね、お二人さん。まさかこんな早くに」

「鳥よっ！」

話など聞かない。私は右手を前方に突き出し、鳩を飛ばす。音速の光が眼鏡の女子高生に当たり、目の前まで戻って飛散する。

「呼べっ！」

瞬間。私の目の前に移動させられた眼鏡女子高生は、突然の事態に目を丸くしていた。

「え…!?」

その反応も考えない。私は右手を振りかぶる。

「有希ちゃんすーぱーなつくるうううう——っ！」

的確にアゴを狙った全力のアップスイングが突き刺さり、眼鏡が飛んだ。そのまま仰向けに倒れる女子高生を見下ろしながら、私は腕を組んで言った。

「話はあるたをボコボコにした後で聞く！ …これが正しい手順なんだよね？」
質問の返事は可愛らしい呻き声だった。

この娘は今日の私の下着の色を知ってしまった。

そんな下らない事を一瞬だけ思いながら、仰向けに倒れる女子高生の胸元を足で強く踏み付ける。

その額に冷たい鉄の銃口を押し付ける。

トリガーからぼたぼたと血液が雫となつて落下した。

「これは拷問」

なるべく冷たく。自分に言い聞かせるように。

「…いい？ やたら黒くって無愛想で無表情で、あたしより1つ下なのにやたら冷静で、滅茶苦茶に強いんだけど、実は寂しがりやで、甘ったるいココアを飲みながらニコニコするよ
うな女の子…。ええつと…」

そこまで必要以上に詳細に言いながら、もっと簡単な説明の言葉がある事を思い出す。
個人的にはあまりセンスを感じないネーミングなので、あまり言いたくなかったのだけれども。

「…蒼腕の魔女は、どこにいる？」

生まれて初めての拷問は、引き金を引くフリをする事で成功した。

5.

「どうだい多奈ちゃん。綺麗な夜景だろう？」

「そういう台詞は手枷を外した後に言つて下さい」

暗いパーティ会場。高く広いガラスの壁を超えた先には夜景と明るい月が浮かんでいる。多奈の右手首には相変わらず冷たい手錠がかけられ、そのチェーンの先は二宮一刀によって握られていた。

多奈の言葉に気を悪くする事などなく、二宮は腕時計を見つめる。

「…そろそろ、都ちゃんが帰ってくる頃かな。遠野有希ちゃん連れて来てくれるといいんだけど。あるいは…」

部屋に外部からの光が差し込んだ。

ドアが開く。飛び込むようにして入り込んできた人影は銃を構えていた。そして、その射線上の人物を確認して、嬉しそうに声をあげた。

「多奈っ！」

「…有希…。兄さん…」

夕方から6時間しか経っていない。結果からしてみれば、かなりハイスピードで再会出来たというのに、多奈にはその姿を数ヶ月ぶりに見たかのように感じていた。

今まで感じた事の無い暖かい感情が生まれ、次には血に染まった有希のトレーナーを見て、

驚愕を感じる。

「初めまして、遠野有希ちゃん。君が来るのを待っていたよ」

駆け出そうとした有希の足を二宮の言葉が止めた。

その瞬間に二宮は手錠のチェーンを引っ張り、多奈の肩を抱きとめた。

その耳に小声で囁く。

「協力して欲しい。摘出が出来たら、僕らは今日以降、遠野有希を狙ったりしないと誓うよ」

嘘だ。多奈はすぐさまそう思った。

しかしながら、小声の取引は多奈にとつて非常に甘美な物に聞こえた。有希が助かれれば…。その考えだけが多奈の頭を廻る。

多奈の沈黙を、二宮は承諾と理解した。

「多奈を返してもらおうっ！」

既に有希は右手を開き、突き出し、一瞬後には目の前に現れた。間近で見た有希の髪の毛はハードムースを塗りたくったかのように所々が血液で固められていた。

多奈の右手首に嵌められた手錠に目を丸くし、銃口を二宮へ向けた、その瞬間。

「ま…待ってください！」

多奈は思わず声を出していた。有希の指が止まったのは奇跡以外の何者でもなかった。

「多奈…？」

「……ふう。活発な子も嫌いじゃないけど、少し僕の話聞いた後でもいいんじゃないかな？」
月光が眼鏡のレンズを照らしている。

多奈にとつて、肩に回された手が堪らなく不快だった。

小さく溜息をして、二宮一刀の説明会が始まる。

6.

きつとこの男は演説したり、人に説明する事に快樂を感じるタイプなんだと、私はそんな事を思っていた。

説明は所々脱線し、大体の事を聞き終える頃には十分少々経過していた。

「……で、結局は多奈の右腕に埋め込まれた物を狙ってるっていう事？」

「そう。それが手に入れば、僕達はこれ以降、多奈ちゃんに迷惑をかけることはないよ。逆に、今この場で僕を張り倒して多奈ちゃんを連れて帰った場合、僕達は今日と同じように多奈ちゃんを狙い続ける」

二宮と名乗った白衣で眼鏡の茶髪男は、軽そうな笑顔を浮かべながら続ける。

「取り出すには多奈ちゃんの腕を切り開く。どこに埋め込まれているのかも分からない。肉を切り裂き骨を削るだろう。手術跡は一生残る。そうしないためにも、君の能力が必要なん

だよ」

ここまで説明されて、私はやっと目の前の男が多奈を狙ってきた連中の頭なのだと理解した。

追い立てて、追い詰めて、逃げ場を塞ぐのが得意なのだ。この男は。

多奈を見つめる。僅かに潤んだ瞳が交差する。黒ドレスが月光に照らされ、淡い光を纏っていた。

「…お願いします、有希」

右腕を突き出す多奈。その真剣な表情に、私は強い敗北感を感じながら頷いた。

「鳥よ…」

右手の先に多奈の腕を捕らえる。その後ろにはガラス越しの月夜が広がっていた。

暗い空間を輝く鳩が滑空し、多奈の右腕を通過する。

「拾え」

右手に血液の熱さを感じた瞬間。目の前に、青く光る物体が浮かんでいた。

「…何これ？」

青のネオンサインを木の根っこのように曲げ、上下左右にくっつけてみたような。

あるいは鹿の角を何本も組み合わせで無理矢理に球状を作り上げたかのような形状をした物体だった。

大きさは直径50センチ。多奈の腕に埋められていたとは思えないサイズが、重力を感じていないかのようにふわふわと浮いていた。

「……」

多奈は呆然としながらその光を見つめている。

その青い光は多奈の右腕の光と同じ色をしていた。

人に人以上の力を与える光が、照明にはなりきれない光度で私の顔を照らしている。心が落ち着き、癒されているような感触を与える光。

「これが……」

手錠のチェーンを放し、二宮が光に向けてゆつくりと歩く。

光へと手をかざし、その中心へと押し進めて、何の抵抗も無く通り抜ける。

複雑に折り重なった光の枝は幻影のように浮かび続ける。

二宮の顔に驚愕が映った。不思議そうにその右手を見つめている。

「……通り抜けた……」

青の光は穏やかな光を放ちながら浮かんではいる。

私はその光に向けて手をかざした。光は反応するように光度を上げた。

ゆつくりと、右手を中心にに向けて押し進める。近づく毎に光度が上がり、次第には蛍光灯を間近で見ている程に輝き始める。

手には何の感触もない。枝にぶつかる感触も、光の熱も無い。

右手が中心に到達する。

瞬間。

音が止まる。青の光は一瞬にして縮み、球から点と変わる。そして。

光が爆発した。音もない爆散は辺りに光を撒き散らし、視界は光の中に沈んだ。

* * * *

11月25日。その夜。関東平野全域に、青の光が降った。

雨というには速度が遅く、雪というには積もる事もない、光の雨。

枯葉のように11月の夜空に舞い、ゆつくりと落ちていく。

それらは空から降り注ぎ、建造物を通過し、人体を通過し、大地に染み込むようにして沈んでいく。

その夜。降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一様に見つめていた。

ある者は光を指差し「綺麗」と言った。

別の者は逃げ場の無い光を指差し「怖い」と言った。

その夜。降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一樣に見つめていた。

二時間後には記憶から消えてしまう景色を見つめていた。

体を光が通過した途端、人々は道路だろうと床だろうと所構わず眠り始める。

電車の運転手は安全な所で停止し、安心した所で運転席に突っ伏した。

新4号国道の路肩には何台もの車が縦列停車を行い、その乗客は皆倒れるように眠っている。

コンビニの防犯カメラは次々に倒れこむ客を映していた。青の光はレンズに映る事は無かった。

音が消えていく。光が伝播していく。

テレビに映るニュースキャスターがいきなり倒れた。それを見た人々は同様に眠り始める。国際電話の相手がいきなり倒れ、自分も倒れる。その倒れる様を見つけた人々もまた倒れ始める。

人を媒介とし、意識の中を伝播する光が世界を埋めていく。静寂が世界を包んでいく。

その夜。

降り注ぐ青の光を、何千万もの人々は一樣に見つめ、何億もの人々がその光を感じていた。

世界から音が消えた夜。

ネオンの輝く街に、季節外れの鈴虫の声が響いていた。

* * * *

目を開ける。

暗かったパーティ会場には青の雨が天井から降り注ぎ、何の障壁もないかのように床に滲み、消えていく。

窓の外の夜景を見れば、輝く青が街中に降り注いでいた。

一穂と二宮が床で突っ伏して寝息を立てている。

静寂の世界の中で、多奈は窓越しに立ち、私を見つめていた。

僅かに揺れる黒髪、薄い生地 of 黒のドレス、黒の瞳、淡い笑顔。降り注ぐ雨に照らされる様は、魔女というよりもどこかのお姫様のようだった。

雲のない雨空の下で。月を背に、微笑む。

「…有希は、馬鹿です。私なんかの為に、そんな血まみれになって…」

「うん。でもあたし、こんな無理する自分が好きだから」

「……有希は、馬鹿です…」

雲のない雨空の下で。月を背に、現代の魔女は少しだけ、友達の前で泣いた。

7.

「すいませんが、エンディングを迎えるのはもう少し後になりそうです」

宿河原センタービルの非常階段に、駆け上っていく私と多奈の足音だけが反響する。

引つ張られるようにして繋いだ右手が暖かい。ハンカチ一枚を犠牲にして血は拭われていた。

照明の無い階段は、壁や天井から降り注ぐ光の雨で照らされている。

光は多奈に打ち込まれた薬の効力を消し、貧血で倒れそうな私に活力を与え続けていた。

「ねえ多奈、"サーチャー"って何？ 人？ 物？」

光が降った後。一穂と二宮は床に突っ伏して寝ていたのだが、二人とも揺すっても殴っても起きやしなかった。

最終的には多奈が二宮を無理矢理、「眠るというベクトルを……」とか言いながら起こし、嘘をつくという意志の方向を……」と言いながら尋問をする。

質問は「サーチャーはどこにいる？」 答えは「39階の3905室」だった。

「サーチャーというのは敵です。私達が平和な生活を送ることの、一番の障害です。恐らくは人間ですが、機械かもしれません……実際の所は知りません。あくまで知っているのはその機能だけです」

39階の標識が見える。重く分厚い金属のドアを開ける。

静寂と光の中、何の装飾も張り紙もないシンプルな廊下を無作為に走り抜けていく。

「んで、それを見つけてどうするの？」

「破壊します。最低でも機能は殺します」

「相変わらずバイオレンスな解決方法だね……」

3910、3909、3908、給湯室、3907。

足音が響き、視界の横を表札が通り抜けていく。

3905。ドアに埋め込まれた曇りガラスに照明の光は映っていない。

ドアノブは無く、カードキーの差込口だけが壁に埋め込まれている。

多奈は右の手の平をドアにくっつけ、少しだけ息を吸う。大元を引っこ抜かれても、右腕に青の光が浮かぶ事に変化は無かった。

押し込む。反発力のベクトルを真逆にされ、まるでパンの生地でも掴んでいるかのように多奈の手の平がドアにめり込んでいく。金属の軋む音が響く。

親指が埋まりきった時、突然ドアは横へと開いていった。

青色の光が降り続けている。廊下の光が筋のように部屋へと侵入していく。

「……あれ？」

まず最初に目に留まったのは、壁に貼り付けられていた子供用アニメのポスターだった。手元には簡易なガスコンロとシンクがあり、その先には八畳ほどの部屋が広がっている。テレビ、タンスが並ぶ。

カーペットの床の上に、私が幼い頃に遊んだブロック玩具が落ちていた。照明を落とした静寂の部屋。

敷かれた布団の中で、小さい男の子が平和な寝息を立てている。

オフィスビルの39階で、私は生活感溢れる世界に飛び込んでいた。

「…やつと寝付いたの。静かにしてもらえるかな？」

声は部屋の先、全開に開いた窓の向こうから聞こえた。

その先には、青が降り注ぐ夜空が広がっている。

年は20代後半あたりだと思う。サイドで緩く縛った長い茶髪が夜風に靡いていた。

ブラウスの上にカーディガン、足にはスラックスと簡単な格好でベランダの手すりに手をかけている。

月光と青の光が降り注ぐ街並みをバックに、優しい笑顔と視線を私達に向けていた。

「綺麗だよ、この光。直人：あ、私の子供なんだけど、「すげえー！」ってのはしやぎまぐっちゃって。それはもう、寝かすのが大変だったんだよ」

眠る息子に送る優しい視線と笑顔。限りなく平和な口調は部屋の内装には合っていたが、私達の状況には一切符合していなかった。

「知ってる？ 今ね、世界中の時間が止まってるんだって。この光って、不思議な力を持っている人を寝かしつかせる効果があるらしいよ？ さっきね、テレビのニュース見てたらいきなりアナウンサーの人が眠りだしちゃってね。すごい驚いたよ」

都ちゃんから聞いたんだけどね、と最後に付け加えて、ベランダから部屋の方へと歩く。足音を極力殺しているのが見て取れた。

「多奈ちゃんとお希ちゃん、だっけ？ 直人が昨日つからずと二人の事を感じ取っていいね。『寂しがりやのお姉ちゃん』とか、『元気なお姉ちゃん』とか言ってたけど、どっちがどっちなのかな？」

目を線にして微笑む。思わず和んでしまっまなづるなるはような、そんな笑顔。

「初めまして、多奈ちゃんお希ちゃん。真鶴成葉、現在28歳の未亡人です…なんてね。大体は都ちゃんから聞いたやつてるんだけど、一応聞くね。…今晩は何のご用なのかな？」

「サーチャーの機能を消しに来ました。その力は、私達の生活に不安を残します」

多奈の言葉ははつきりとしていた。その言葉に対し、成葉という名のお姉さんは、演技ではなく本当に悲しそうに顔を伏せた。

「…うん。そうなんだよね…。それ以外…ないもんね…。…ごめんね。場所を変えてもいいかな？ さっきも言っただけど、この子、やっと寝付いたの」

二人揃って頷く。行動は反射的だった。

誰も使わないエレベーターは、ボタンを押してすぐさま到着した。

成葉さんは最上階のボタンを押す。

光が降り注ぐ閉鎖された空間。上昇する慣性。

三人の沈黙を乗せたエレベーターはすぐさま停止し、インターフォンのような音が響いた。促されるままにエレベーターホールを抜け、ドアを開けると、そこには。

「ふふっ。何かドラマみたいな場所だよね？」

網目の大きいフェンス。地上200メートルからの360度の夜景。

周囲にめぐらされた強烈なスポットライトが、床に描かれた大きなアルファベットのHを照らしていた。

吹き付ける11月の夜風。降り続ける光の雨の下。眼下の街並みからは車の走る音すら聞こえない。風音だけの静寂が広がっている。

成葉さんはその真ん中、丁度良く照明が一番交差する所へ走り、両手を広げ、踊るように髪をしながら振り向いた。

「それじゃ、多奈ちゃん、有希ちゃん。お話をしようか？」

宿河原センタービル屋上へリポート。演劇の舞台のようにライトを浴びた成葉さんは、光の降る夜空の下、優しい笑顔で私達を見つめていた。

8.

四方八方から叩きつける照明が眩しかった。

私の周りに複数のランダムな影が放射的に伸びている。

11月の冷たい夜風がコンクリートを走る。

所々が赤くなってしまったトレンチコートと髪の毛が大きく揺れた。

降り続く光の雨の中、多奈は一步步み出た。

「出来れば平和な形で帰着させたいと思っています。私は乱暴な事は嫌いです」

落ちていた声が屋上に響く。

「そうだね。そうしたいよね」

成葉さんの笑顔は寂しげだった。強い照明がその笑顔に強い陰影を刻む。

「：サーチャーによつて、私達がどのような状況になっているのか理解していますか？」

「うん。知ってる。直接聞かされた事は無いんだけどね。大体は分かっちゃったよ。昨日の夜だつて、多奈ちゃんを追いかけたヘリコプターはここから飛んでいったんだよ。直人が『お姉ちゃんが飛んでる！』って言い出してね」

「彼らの目的は私の右腕でした。しかしながら、取得には失敗し、現在…」

多奈は光が降り続ける空を見上げる。つい数十分前までは自分の右腕の中にいた光が延々と降り続いている。

「：もしかしたら、彼らは私達に報復を考えるかもしれません。しないと考える程、私は彼らを信用していません。それから逃げるためにも、今日と明日と一ヶ月後の私と有希が安心して眠るためにも、私達を探しあてて目を潰します」

「…うん。そっか、そうなんだ。…ごめんね」

まるで自分がやったかのように成葉さんは素直に謝った。多奈の言う「敵」は、胸に手を当てて悲しげな視線を送っている。

「別に痛い思いをさせるとか、そういう事は一切ありません。ですから、消す事自体に何の問題もないと思います。…そもそも、息子さんにとっても必要の無い能力のほずです」

「必要なんだよ」

握った右手を胸元に。

成葉さんは、強い風の中でもはつきりと聞き取れるような口調で言い切った。

「今度は私の番だね。…私ね、愛しの旦那様を一昨年に亡くしたの。どこにでもあるような交通事故でね。本当にいきなり、ね。そこから、私の平和で幸せな駆け落ち人生は急展開。悲しんでる暇もない位に色んな事が起きちゃって。お金がどんどん減っちゃったの。辛かったけど、直人のためにも一杯働いたんだよ。働いたんだけど…元々私、体弱くてね。倒れちゃったんだよ」

照明の交差する舞台の上、見てるだけで切なくなるような微笑が浮かぶ。

「その時は本当に落ち込んでね…頼れる人もいなかったし、このまま私と直人と心中しちゃおうかって、本気で思ったりもしたんだよ。保育園のお金も滞納したし、家賃も何ヶ月も滞納しちゃったんだよ。でも、その時、こここの会社の人が突然来たの。『直人君の力が必要だ』ってね。さつき、私の部屋を見たよね？ あそこね、こここの会社の人に無理して作って

もらったの。私はここで働かせて貰ってるし、何とか直人を育てていけるだけのお金を貰えている。もう、感謝しても足りないよ。だから、直人が大人になるまではこの場所を死守したいんだ。…うん。一言で言えば…」

一呼吸分の間、音が停止する。

「生活がかかっているんだよ」

強い風が髪をなびかせる。光の下のシングルマザーは笑顔で一言を言い切った。その瞬間、多奈と成葉さんの交渉は決裂していた。

「…ねえ、多奈…。本当にあの子の能力を消すの？」

傍観状態だった私の頭を一つの疑問が廻っていた。

——どちらが正しいのか？

私の中の行動を決める部位に、「これだけはやってはいけない」といった、踏んではいけないボーダーラインがある。

自分の正義と照らし合わせ、心から間違っていると思える、そんな行動がいくつかある。そして今、多奈がしようとしている行動は、そのラインを踏み越えている気がしていた。直人君の健やかな寝顔。それを見つめる優しい瞳。あんな平和で暖かい空間を壊す事は…許されるべきではないと思う。

「…すいません、有希。私は意志を変えません。…後で恨んでも構いません」
小声で言う多奈の決意は固かった。その右手は固く握られていた。

多奈の言い分だつて分かる。常に危険を感じながらの生活なんて誰も望まないのだから。——どっちも円満に終われるような……解決法は無いの？

直人君ではなく、多奈を狙う事を企てる人々を説得する。

その案を考えては見たが、結局の所、そうなったらサーチャーの仕事はお払い箱。成葉さんは過酷な生活へ逆戻りする。

浮かぶ案が次々に廃案になっていく。

もつと前の段階から事態は悪化していたのだ。事態が進行し過ぎた今、どちらかが悲しむような二者択一しか残されていなかった。

ハッピーエンドを迎えるためには、手遅れから逃げなければならなかった。

思わず唇を噛む。無常さを感じる。

「……有希。卑怯な事を言いますが、有希を狙うために三里さんや友達を狙う可能性があります」

「え……」

多奈の言葉は確かに卑怯だった。

それでも、あの泣き虫の幼馴染や馬鹿明るい母親に、私のせいで危害が及ぶなんて事は認められなかった。

自分の中の正義が揺らぐ。

傍観も、攻撃も、逃亡も、どの選択肢を選んでも私は私の正義を犠牲にする。

自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。自らの行動三大原則を心の中で唱える。

葛藤は一呼吸の間しか出来なかった。私は、私にとって良い選択肢を選ぶ。

「……あたしは、多奈を支持するよ」

「…貴方の妥協に感謝します」

多奈の腕が輝き、一瞬後には右手に3メートルの巨大な直刀、左腕にポリカーボネート製の透明盾が装着されていた。

未だ鏡面の輝きを保つ日本最古の直刀が、照明の光を受けて白く輝く。

現代の魔女は冷淡な視線を成葉さんへと向ける。

「…出来れば平和な形で帰着させたいと思っていました。私は乱暴な事は嫌いです」
「そうだね。そうしたかったよね…」

悲しげな視線を床へと落とす成葉さん。その姿は可愛そうな位に寂しげだった。

「私は今からサーチャーの能力を消しに行きます。邪魔をする場合は攻撃します。出来れば大人しくしていて下さい」

「…多奈ちゃん、ごめんね。私、精一杯抵抗するよ」

その声は悲壮な覚悟に満ちていて、それでも揺るがない決意を表していた。

成葉さんは瞳を閉じ、両手を組み合わせ、その手を唇へと近づける。

その姿は神様にお祈りをしているポーズ以外の何物でもなかった。

体中を金色の光が包み始めていく。

「人と人は分かり合える。理解しあえる……っていうけど、難しいよね。私は私の正義があつて、多奈ちゃんには多奈ちゃんの正義があつて、お互いに理解出来た。でも、どっちも正しい事のはずなのに、その望む先が正反対になつちやうんだから。お互いに妥協も出来ないし、譲歩も出来ない。絶対に譲れないと思つてる。……こうなつたらもう、取っ組み合いの喧嘩をするしかないんだよね……。……うん。でも、やっぱり私には、直人のためにも、私のためにも、譲れないものがあるんだよ。だから、私は私の正義を貫くの」

金色の輝きは少しずつ光度を増していく。

「……神様、私に直人を守る力を下さい……」
どっ！

その瞬間、内臓に響くような重低音と共に、体を包んでいた金色の光は柱となり、空へと伸びていった。

髪の毛は激しく巻き上がり、その背中には輝く光の翼が大きく広がっていく。

「……す、すご……」

私は思わず見惚れていた。金色の神々しい輝き。本当に天使が舞い降りたのかと錯覚する。僅かな間を置いて、光は急速に消えていく。

翼は分裂を開始し、太い棒のように変形していく。

光が完全に消えきった時、成葉さんの背には翼ではなく、10本の輝く触手が蠢いていた。

その一本は私の足よりも太く、多奈の直刀並に長い。

その一本が跳ねるように動き、目にも止まらぬ速さでフェンスに直撃した。派手で鈍い音を立てて、フェンスに巨大な穴が空く。

啞然とする私達を見つめ、光降る夜空の下、我が子を守るための金色の光を背に、シングルマザーは微笑む。

「先に言っておくよ。私、強いからね。：母の愛ってね、核ミサイルよりも強いんだよ？」

* * * * *

「行くよ！ 手加減なんか出来ないからね！」

触手の一本が柱のように直立したかと思うと、鞭のようにしなり、振り下ろしの一閃を繰り出した。

多奈と私の間を狙った一撃。蜘蛛の子を散らすように逃げる。

ばぁぁん！

「う、うひええええ……」

巨大なハリセンならこんな音が出るのかもしれない。触手はコンクリートの床を打ちつけ、その表面に亀裂を残していた。

想像するのも嫌になるが、こんなのが直撃したら骨折や内臓破裂どころでは済まないかも

しれない。背筋に思わず冷たい汗が流れる。

「ほらっ、有希ちゃん！ 驚いてる暇なんて無いよっ！」

次は突き。顔面に向けて蛇のように襲い掛かる光の触手をギリギリでかわす。髪の毛が僅かに触れ、切断されて空気に舞う。

息つく暇も無く、長いバットを振り回したかのような横薙ぎの一閃が飛んでくる。

「鳥よ！ 運べっ！」

光の鳩を飛ばして空中へ逃げるも、さらにそこにも触手が襲い掛かった。

避けきれず、触手の側面が左手に接触した。

「ばちばちばちっ！」

「あぐうう……っ！」

強烈な電撃が左手を襲う。気まぐれに買った健康器具の比ではない、生命を殺す為の電撃。重力に引かれるまま肩から落下する。左手に外傷は無いが、私の意志とは関係なく痙攣を始めていた。痺れて感覚が無い。

「有希！ 有希は逃げていてください！」

多奈の叫びが聞こえ、視線を向ける。

そこには6本の触手を直刀で払い、盾で受け止め、突きをかかわす現代の魔女の姿。

触手が振り下ろされる度に、打ち付ける派手な音が響いた。弾丸ですら払いのけるはずのベクトル操作能力はその勢いを殺しきっていなかった。



盾で受ける度に多奈の顔が苦痛に歪む。それでも、成葉さんへの距離は少しずつ縮まっていた。

「てああっ！」

右腕の青が光を増した。襲い掛かる三本の触手を一気に払い飛ばし、大地を強く蹴る。

重力の方向は変わり、成葉さんへと向けて地面と水平に落ちていく。突き出した直刀が槍のように襲い掛かる。

「甘いよ多奈ちゃん！」

突如、下から襲い掛かる光の触手に直刀が弾かれる。刀身は多奈の腕を中心に円軌道を描いた。

多奈は気にすることなく、重力を元に戻し、足を踏みしめて横薙ぎの一閃を放つ。

刀身3メートルが襲い掛かる。

鈍い風切り音が、刀に込められた運動エネルギーを知らせていた。

ぶおん！

巨大な凶器に太い触手が待ち受ける。双方は激しく衝突し、電撃音がバチバチと鳴り響く。ベクトルを操作された金色の電撃は、刀身を暴れ回っていた。

「まだまだあっ！」

成葉さんの声と共に、触手の一本が多奈の肩を狙って降り下ろされる。

咄嗟に気づいた多奈はシールドを構えたが、弾丸さえ貫通できない5ミリの盾は容赦なく

碎かれた。

「くっ！」

たんっ。多奈は大地を蹴り上げ、バックステップする。重力操作によって一気に5メートルの跳躍をするも、そこに触手が追撃をかける。

上下左右から襲い掛かる触手を刀で振り払う。払われた触手はフェンスに直撃し、穴を開ける。

打ち払ったもう一本はエレベーターホールを包むコンクリート壁を打ち砕いた。爆散した飛礫。その一つが多奈の脇腹に直撃する。

「あぐう……っ！」

予測出来ない所からの攻撃。多奈は壊れた盾を投げ捨て、息を荒らげて痛みを堪える。成葉さんは壊した壁を見ながら困ったような視線を向けていた。

「あ……やっちゃった……。どうしよう、後で謝らないと……」

その声は先程と同じような平和な口調だったが、背中には光の触手が獲物を求めて蠢いていた。

——ホントに無茶苦茶強いでやんの……

17人の男を瞬殺出来、ヘリコプターとドックファイトを繰り広げられる現代の魔女が手も足も出ない。

手加減とかしている場合では無かった。膝立ちのまま私は右手を突き出す。

——これは使いたくなかったけど……！

今、私に必要なのは、耐えるための覚悟なのだ。

凍える寒さの中、その言葉を念じるように体に響かせた。胸の前で拳を強めに握る。眩い夜の照明が複数のランダムな影を放射的に伸ばしている。

冬空の下。膝に感じるコンクリートの感触は冷たく、硬かった。

「有希！ 能力は使わないで下さい！」

多奈の制止の声を振り切るように、膝立ちのままに前方を睨み付ける。

そして、無傷で血まみれの右手をオーバーに前に突き出し、血液を奪う鳩を飛ばす。

「鳩よ！」

鳩が音速で滑空する。光の鳩は成葉さんの手前で、突然壁にぶつかったかのように拡散した。

「……あ……あれっ!？」

「甘いよ、有希ちゃん」

成葉さんは優しく笑った。触手の金色、照明の白、降る青が織り交ざった光が瞳を照らす。

右手から血液が雫になって落下する。太ももに血液の筋が走る。私の姿を見て、成葉さんは僅かに驚いた。

「……そっか、有希ちゃんはそういう制約があるんだね。私も実はあるんだよ。制約。この力はね、誰かを守るためにしか使えないんだよ。誰かを守るっていう目的のためなら何でも出

来るんだけど、それ以外には使えないっていう制約ね。だから、守るために必要ならば、有希ちゃんの力だって弾くし、多奈ちゃんの刀だって受け止められる。：何ていうかね、無茶苦茶なんだよ。物理法則なんて無視しっぱなしだし。でも…」

目を瞑り、手を組み合わせる。その間にも多奈は体の周囲に弾丸を落とし続けていた。落下による加速が限界に達し、放つ。しかしながら、光の触手は放たれた弾丸を簡単に弾き飛ばす。

「：私はこの力を、神様が直人を守るためにくれたんだって、そんなロマンティックな方向で考えているんだよ。だから、感謝してる」

その言葉は、戦意を失わせるのには十二分に効果的だった。

しかしながら、多奈の動きは止まらない。破壊された金属のドアを担ぎ上げ、空中から投げ下ろしていた。

何十キロもの鉄板が、回転しながら成葉さんへと襲い掛かる。

「しつこいよっ！」

複数の触手が網目のように展開し、その凶器を受け止める。電撃音が炸裂した。

成葉さんの目の前に張り巡らされた網が歪む。

強烈な重量を殺すまでの、僅かなタイムラグ。

その瞬間を多奈は見逃さなかった。空中で重力の向きを変え、落下突撃を開始する。直撃の瞬間、槍のように構えた直刀の先端が網の糸を切り裂く。

「つく！」

成葉さんが初めて苦しそうな表情を表す。直刀の切っ先はコンクリートに激突して、がりと不快な音を立てた。

そのまま多奈は着地し、両手持ちで横薙ぎの一閃を放つ。

「てあああああつ！」

ばちばちばちばちいっ！

刀身が網に絡まる。無理矢理に進行方向を変えられ、逃げ場のない電撃が爆音のように鳴り響く。

屈折し続ける光の網。成葉さんは表情をゆがめ、後ろ向きに床を蹴った。

多奈が渾身の力を込めて薙ぎ払う。触手の2本が分断され、床に落ちる前に掻き消える。「…絶対無敵というわけでは無いんですね。少しでも安心しました」

冷淡な多奈の声。さらに直刀を振り上げたが、その瞬間に触手の突きが複数飛んできた。多奈は後ろに飛び、成葉さんに振り下ろそうとした刀を、触手を振り払うために振るう。

——今ならっ！

傍観しきっていた私の意識を覚醒させる。

鳩を成葉さんの背後に飛ばす。次に映る視界は成葉さんを斜め下に見下ろす空中だった。ぱあん！　ぱあん！

血に濡れたグリップを必死に握り締め、ゴムの弾丸を撃ち込む。

一発目は見当違いの方向へ飛んでいき、二発目は光の触手が打ち払った。

「邪魔しないでっ！」

落下し始める私に、破壊の触手が襲い掛かる。

しかしながら、その時は既に私は鳩を飛ばした後だった。

「運べっ！」

触手は私のいない空間を空しく通り過ぎる。

私は瞬間的に成葉さんの側面へと移動し、銃撃を放つ。

弾丸は打ち払われ、私のいた場所には触手が襲い掛かる。それを確認する前に私は、成葉さんの前方上空へと鳩を飛ばす。

視界が変わる。銃撃を放つ。次の場所へと鳩を飛ばす。それらを繰り返す。

ぱあん！　ぱあん！　ぱあん！

銃撃が連発した。触手は空を切り続け、ランダムに出現する私は弾丸を撃ち続ける。

「……くっ！」

やがて迎撃の触手は尽き、一発の弾丸は成葉さんの右腕に直撃した。

しかしながら、僅かに油断した私に触手は容赦なく襲い掛かり、コート越しの左太ももを直撃した。

吹き飛ばされる瞬間、私は反射的に多奈に向けて鳩を飛ばす。

視界が一瞬にして切り替わる。

「い、いたたた…」

思いつきりバットで殴られたような痛みが走る。こめかみから血が噴出す。

同時に、能力の使いすぎによる出血が体中を駆け巡った。強烈な眩暈を感じ、気づけば冷たい床に倒れていた。

「有希！ 無理しないで下さい！ 貴方は既に十分に頑張っています！」

多奈の悲痛な声が上から聞こえてくる。頭が痛む。手足が重い。それでも。

「…まだ、頑張ったって言えない。それに…8対2くらいでいいんだよ、成果と頑張りの評価は。あたしは多奈を助ける為に来たの。一生懸命頑張りましたなんて言っても、助けたっていう結果が無いと意味は無いんだよ…」

コンクリートが頬にぴったりとくっついている。氷のような冷たさを私は感じている。心臓が動いている。生きている。多奈を助けたいと思う。諦めてない。

だから、まだ頑張れる。

「有希ちゃん。もう、無理しないで…ね？ 多奈ちゃんの言う通り、有希ちゃんはよく頑張ったよ」

敵であるはずの成葉さんの優しい言葉を振り切るように、私は勢いよく立ち上がる。

髪の毛の先端から血の雫が飛び、灰色の地面に赤い点を数個描いた。

「…悪いけど、あたし、諦めるって言葉が一番嫌いなんだよね。やめろって言われると、絶対やり遂げてやろうって思っちゃうんだよね…」

足に力が入らない。よろける。フェンスに上半身をぶつけ、やっこの思いで直立体勢を維持した。

多奈は光の触手を直刀で叩き落しながら、私を見つめる。

その瞳には何かを決心した、強い輝きが映っていた。

「…最初で最後の許可です。有希。…援護を、お願いします。これ以上決着を延ばしたら…きつと有希は死ぬまで無理する気がします」

「あははは…。よく分かっているね。…それで、何の援護をするの？」

無数の照明が、巨大直刀を握る現代の魔女を照らす。青の光が降る壇上。

私の質問に、多奈は大真面目な顔で答えた。

「必殺技です」

多奈は大きく息を吸う。成葉さんを鋭い視線で捕らえ、腕の光を消す。

従来の重さを取り戻した巨大な直刀は、片方を持ち上げるだけでも精一杯だった。ぱんっ！

破裂音のような足音を立て、多奈は直刀を引き摺るようにして駆け出す。

「来ないでっ！」

多奈の進路上に触手が振り上げられた。鞭のようにしなり、コンクリートすら砕くそれを、多奈は見向きもせず一直線に進んでいく。

大慌てで私は右手を突き出す。

「多奈っ！ …鳥よ！ 運べ！」

鳩を飛ばす。一瞬後、触手は空を切り、地面を破壊する。

多奈は成葉さんの目の前に移動していた。

成葉さんを射程圏内に捕らえた多奈は、膝を僅かに曲げ、居合い抜きのような構えを取る。

「澱みない方向を！ 私に振り抜く意志と力を！」

多奈が叫ぶと同時に、直刀が眩く輝く。

溜め込んだ多奈の渾身の力を、放射される青の光が強烈な破壊力へと変換していく。

成葉さんが大急ぎで光の網を張る。

「てやあああああああ——っ！」

運動エネルギーが爆発する。ベクトルが破壊するためだけに進行方向を決める。

振り回すような横薙ぎの一閃。音速の居合いが空間を切り裂く。

ざんっ！

光が降り注いでいた。照明が眩しく光景を照らしていた。

直刀が振り抜かれた瞬間、世界の音が止まった。

「あ…あ…」

全て両断された光の網が、ばらばらと音を立てて崩れていく。

成葉さんの顔に驚愕と絶望が映る。

多奈は刀を振り抜いた勢いのまま放り投げ、その右手を素早く成葉さんの胸元へと突き出

した。右腕が青く輝く。

「……ごめんなさい」

眩くように、多奈は最後に謝罪を告げた。その反応を待つことなく、多奈の力が成葉さんの意識を刈り取る。

前のめりに倒れる成葉さんを、多奈は優しく抱きかかえた。

「……貴方の抵抗に感謝します」

静寂する世界の中。多奈の声は弱々しく、風に掻き消えた。

光の降り注ぐ月夜の下。吹き付ける風は冷たく、眩い照明が劇場の舞台のように二人を悲しく照らしていた。

遠野有希による、我儘で身勝手な戦争が終わる。

8.

その夜。真鶴直人は鳥のようにゆっくりと空から降ってきた人物を見つめていた。窓が勝手に開く。夜風が吹き込む。

照明が付いていない部屋。空から降る青色の光だけが辺りを照らす中。

黒色のドレス、黒色の長い髪がふわふわと揺れる。月光を浴びたその姿は、まるで御伽話の魔法使いのように見えた。

「…おねえちゃん、誰？」

魔法使いは笑った。それは、母親の次くらいに優しい笑顔だった。

そして、光の降る夜空を背に映しながら、小さな声で言った。

「…悪い魔女ですよ」

その夜。その後の記憶を、真鶴直人は憶えていない。

遠野有希三大行動原則 その4

Escape 6.

1.

「あたし、落下しながら熟睡した、最初の人間になれたよね？」

見慣れた住宅街路にゆつくりと着地していく。コンクリートの地面に付いた足が、軽やかな足音を立てた。

光の雨は降り終え、世界は正常な静寂の中に包まれていた。

時刻は午前五時。夜明けが近づいている。

遠くの空が僅かに明るみ始め、雲は藍色と白の幻想的なコントラストを描いていた。

始まりの時間。私の好きな時間。

周囲に立ち並ぶイチョウ並木は、未だに残る薄い闇に隠れていた。

二時間続いた落下飛行。髪はボサボサで、体は冷風に冷やされきっている。

未だ握りつばなしの右手だけが温かかった。

バイクで新4号国道を走って帰ってくる一穂は、まだ到着しそうにない。

「…あははっ」

「？ どうしました？」

「…なんか、さつきまで必死の戦争をしたのが嘘みたいでさ。緊張の糸がぷつぷつ切れたら、何か面白くなっちゃって」

指が拳銃の引き金の感触を憶えている。走りすぎた足がパンクしそうに張り詰めている。

お氣に入りのトレーナーもトレンチコートも血まみれで、ブーツの中では血液が固まり、動く度に粉末へと変わっていく。

服は先程までの現実を冷淡に伝えているが、それらはもう終わった事であり、これから先に再びこんな事があるとは伝えていない。

夜明け。一日が終わって、一日が始まっていく時間。

藍色の空を望み、両腕を大きく広げる。

「ああ……。もう終わっちゃうんだ。平凡なあたしに降り注いだ、心躍るバイオレンスとアクションの日々はもう終わっちゃうんだ」

「喜ばしいことじゃないですか」

多奈は不思議そうに私を見つめていた。

「……まあ、そうなんだけども」

きつとこれは、ハッピーエンドなのだ。捕まった魔女を助ける勇敢な女子高生と兄の物語は、これできつとハッピーエンドなのだ。

けれども。私はどこか、胸に切なさを感じている。

「きつとあたしは、今日も学校に行くんだよ。まったく血に汚れてもいない、普通の制服を着てさ。訳分からぬ数学の授業を受けて、休み時間に無駄話して、家の机で待ち受ける参考書に向かって帰っていくんだよ。こんな血まみれになって戦うような事をして、あたしの周りって物凄く頑丈だから、全然変わってくれないんだよ」

「不満なのですか？」

「ううん、すつごく楽しいよ。生きてるって事は、物凄く楽しい事だよ。人生面白くないって言うのは、面白くしようとする努力をしてないだけだからね。あたしは人生に妥協しない女だから。面白くなかったら面白くするの。馬鹿な事でも本気で挑んで、すんごい苦しんだ挙句に本気で泣いたりしたいし、泣き虫の友達とかと馬鹿な話して笑っていたいと思ってる」

私の満面の笑顔に対し、多奈は少しだけ笑って、少しだけ寂しそうに目を伏せた。

「…私は、有希が羨ましいです」

「羨むだけなら誰でも出来る。本当に羨ましいなら、まず行動だよ、多奈」

俯き気味の多奈の右頬をつまんだ。柔らかい頬つぺたが容赦なく引つ張られている。多奈が驚いて目を丸くした。

「…ひゅ、ひゅひ…？」

「多奈は笑顔が硬いんだよ。もつとこう、にぱーっと笑えばとっても可愛くなると思うんだよね…？」

ぐにぐにぐにぐにぐに。

「ほーれ、ほれほれ」

「ふひ…」

上下左右に引つ張られる頬。当初は驚きで一杯だった多奈だが、少しずつやられっぱなし

の状況を打開し始める。

目が鋭くなったかと思うと、その両手は私の頬を挟んでいた。

「…そういう有希は、表情が柔らかすぎるんです。もつと、真面目な顔が出来るようになった方がいいと思います」

ぎゅうううううう。

多奈の両手によって頬が挟まれていく。物凄く顔が格好悪い形に変形しているのを感じた。

「むぎゅう…」

対抗するように、頬をつまむ指に力を込める。それに反応して、多奈が挟み込む手の力も強くなっていった。

視線がぶつかる。睨みつけるようにして見つめ合う。お互いの手に込める力はどんどん強くなっていく。緊張の糸は一気に張り詰めていく。

「…………ふっ」

糸が切れる。

「…あ、あはははははっ！」

「…つく」

終了のゴングはお互いの笑い声だった。

腹を抱えて笑う私と、手の甲で必死に笑いを堪えようとし、堪えきれない多奈。

「…ま、まったく、何やってるんでしょうかね、私達…」

「あははははっ！ いやー、こんな感動的なエンディングシーンは他にないと思うよ多奈ー！」

「そんなわけ……っ！」

再度押し寄せた笑いの波が多奈を押し流した。釣られるようにして私の馬鹿笑いの声が、夜明けの閑静なイチョウ並木に響き渡った。

私達はしばらくの間、何だか訳の分からない理由で笑い続けた。

数時間前の出来事は遠い昔のように、二人が出会ったのも遠い昔のように。

11月の夜明け空の下、どうしようもなく馬鹿な二人が、ただただ笑っていた。

「あははっ！ 初めて見たかも！ 多奈がそうして涙目で笑ってる所！」

「み、見せたくて見せてるんじゃないやありません！」

数時間前の出来事は遠い昔のように、二人が出会ったのも遠い昔のように。

数分後に別れが訪れる事など、夢物語のように。

こんなにも楽しくて仕方が無い感情が全て何も無かった事にされる事など、考えもせずに11月の夜明け空の下、どうしようもなく馬鹿な二人が、ただただ笑っていた。

* * * * *

横隔膜が痙攣しそうな程に笑った後、僅かな間隔をおいて、多奈は真剣な視線を私に向けていた。

藍色の空を背に、長い黒髪、黒のドレスが冷たい風に揺れていた。

「…有希。今日から一生、能力を使わない事を誓えますか？　そうしてくれるのなら、私は…有希の記憶を消さずに済みます」

昨日の夕方に時間は逆戻りした。現代の魔女は右腕を淡く発光させ、こちらを見つめる。「どうしても消したい？」

「心情的には…すごく嫌です。それでも、有希がこの先も危険な能力を使うというのなら…有希を守るためにも、私が安心するためにも、私は有希の記憶を消します」

多奈が右手を伸ばす。開いた指。その先には悲しげで真剣な、多奈の視線があった。

「誓ってください、有希。…嘘でもいいです。誓うと一言言ってくれば、私はそれを信じています」

持ち出された取引はとんでもない程に不釣り合いな二択だった。

頷くだけで、多奈の思い出も、今の感情も、多奈と私のこれからも手に入れられる。逆に、首を横に振れば…。

二人の間を強い風が吹いた。多奈の言葉の後、私の言葉の前に踊る風は、イチヨウの葉を数枚巻き込んで空へと躍らせていく。

目を瞑る。私は胸に手を当て、目を開き、しつかりとした声で言った。

「断る」

「…有希は、馬鹿です」

悲しさと苛立ちを含んだ多奈の声は、どこか子供のようだった。

「うん、きつとあたしは馬鹿なんだよ。それでもって頑固なんだよ。ホントにもう、どーしよもないくらいに頑固なんだよ。」

自分の信念に凝り固まっちゃって、どうしても友達に嘘ついたり出来ないし、多奈を忘れたいとも思えないんだよね」

「有希は、能力が必要だと思っているのですか？」

「ううん。本音を言っちゃうと、別にそんなに必要でもないんだよね。ただ、もしもの時には頼っちゃうと思うんだよ。だから、一生使わないなんて言えないし…」

能力を得た感想は、「そんなに面白い物でも無いなあ」だった。

確かに、人には出来ない事が出来る。しかしながら、逆にそれが人生を楽にしてしまうのではないか…という思いがあった。

例えるならば、ゲームの裏技を見つけてしまったかのような感覚。私は人生に妥協しない。悩み苦しんで考える過程を楽しみたい。

「ねえ、多奈。能力だけ消すってのは駄目かな？」

「…それは既に試しました。有希が寝てる間に、こっそりと」

「うわっ、意外に悪いね多奈…」

多奈は少しだけ顔を赤らめて目を逸らす。

「…結局の所、”世の中には能力が使える人がある”という認識を消さなければならいんです。私の力は一時的なんです。例えば、能力のベクトルを消しても、有希の記憶と認識がゆつくりとベクトルを元に戻してしまうんです」

「それじゃ…直人くん、だったっけ？ サーチャーのあの子。あの子の記憶もごっそり消したの？」

その部分だけが胸につかえていた。

多奈と私の正義の為に、相手の正義を踏み潰したという事実。

どちらも正しくて、どちらも引く事が出来ず、どちらか一方しか成り立たない正義。

手遅れから逃げられなかった結果。

「はい」

多奈ははつきりと言った。私の目を見つめ、黒髪を揺らし、手を強く握り締めながら言った。

「……」

思わず言葉が止まる。胸に刃物が刺さる感触。

あんな小さい子と健気な母親の空間を私達は正義の名の下に壊した。その事実が胸に突き刺さる。

「…有希。責任を感じるのならば、私の手を取って下さい。私達がしてしまった事への業は、

私が背負います」

多奈が手を差し伸べる。罪悪感から逃げる、唯一の卑怯な手段が青く輝く。

「…やだ。多奈に全部押し付けるのも、あたしだけ逃げるなんてのも、嫌。やっぱりあたし、記憶は消させない」

「有希…」

悲しげな多奈の視線が重なる。

私を大切に思ってくれて、結果的に私の嫌がる事をしようとする友達はゆつくりと瞳を閉じ、僅かな時間の後に開く。決意の籠った現代の魔女の視線が重なる。

「ねえ、多奈。こうなったら、勝負をしようか！」

「…勝負？」

「そう、勝負。多奈が勝ったら記憶デリート。あたしが勝ったら記憶デリート無し。負けたら文句も言い訳も無し。…もう、解決策はこれしかないと思うんだよね」

「…何の勝負をするんですか？」

私はにつこりと笑った。最後を飾るのは、これ以外に考えられない。この二日間、私はこればかりをしていたのだから。

「鬼ごっこ。制限時間は5分。あたしが逃げきつたらあたしの勝ち。多奈が捕まえられたら多奈の勝ち。能力でも何でも使用オーケーね。…どう？」

「何でもって…ま、待ってください！ 有希、またあの能力を…！」

驚いた多奈が私を捕まえようと手を伸ばす。

既に私は時計で時間を確かめ、そして前方の空へ向けて鳩を飛ばしていた。

「スタートっ！」

耳にノイズ音が走る。上空20メートルの空から望む、視界一杯の空が一瞬にして広がった。

髪が浮く。慣性が働く前の一瞬の浮遊感が堪らなく心地よかった。

11月26日、午前5時45分。藍色の夜明け前の空の下。

辺りは静かで、風は冷たかった。

私は視界一杯に広がる空を見つめる。重力加速度に従って落下を始めた体から、五分後には納得のいく結末が有る事を強く願い、信じていた。

「有希っ！」

右腕を青く光らせ、多奈が飛んでくる。

私は逃げるために、私の正義を貫くために、光の鳩を遠くまで飛ばした。

蒼腕の魔女と女子高生の、盛大な鬼ごっこが始まる。

2.

たんつ。

誰かの家かも分からない瓦屋根に着地する。

二階建て住宅から、17年住み続けている街並みを望む。

東の空は少しづつ明るくなっていた。雲が藍色から少しづつ白へと変わっている。

夜明けが近づいている。

「次っ！」

鳩を精一杯遠くまで飛ばす。

最大射程は50メートル前後だという事を、今頃になって知った。

「有希っ、もうその能力は使わないで下さい！　こんな所で無理をしてどうするんですか
!？」

空中を水平に落下する多奈が追いかけてくる。ヘリコプターにすら匹敵するスピードは、私の最大射程を一秒で埋めていた。

「多奈っ！　勝負つてのはね、お互いに全力を尽くしてこそ勝負なんだよ！」

多奈が私を捕まえようとした瞬間、鳩は私を前方の空へと運ぶ。後方50メートルで多奈は空気を抱きしめていた。

上空20メートル。所々でイチヨウが並ぶ見慣れた街を見下ろし、落下が始まる前に前方

の空中に鳩を飛ばす。

まるでスライドショーでも見ているかのように、視界が一秒単位で変わっていく。

首元に、流れる血液の熱さを感じる。右手から落ちた血の雫が20メートル下のコンクリートの道路へと吸い込まれていく。

夜明け前の凜とした冷たい風が、頬と足を冷やしていくのが心地良かった。

——あと、3分28秒。

空中で時計を確認したのは初めての経験だった。

そんな僅かな時間でも、私の事を心配するという理由で現代の魔女は捕まえにやってくる。「有希！ 無理をしないで下さい！ これ以上能力を使ったら、死んでしまいます！」

悲壮な声が胸に刺さる。それでも私は止められない。この逃亡戦は勝たなければならない。——もう、持たないかもしれないけど……

昨日の夜、私はどれくらい血液を失ったのだろう。人はどれくらい血液を失うと死んでしまうのだろうか？

体はひたすらに警告音を鳴らし続けていた。

「鳥よっ！」

それでも、私は逃げる為の鳩を飛ばす。

ここで勝負に負けたら、今の私は死ぬのだから。伊勢崎多奈という、無愛想で心配性で、笑顔の可愛い友達の記憶を持った遠野有希は死んでしまうのだから。

——我ながら、ドーしよもない位に頑固だなあ…。

頭が割れるように痛い。視界が暗い。腕がやたらと重く感じる。その状況の中、私は頬を緩ませていた。

2分53秒。

見下ろす視界に千年谷駅が映った。見慣れたホームに始発電車が滑り込んでいた。気づけば一駅分も飛んで来てしまったらしい。

あと数時間後に私は、いつもの制服を着て、あのホームを歩いているはずだが、何故か物凄く遠い出来事のように感じる。

何羽の鳩を飛ばしたのかは憶えていない。多奈の声も遠くに聞こえる。流血は止まらず、じつとりと血に濡れたトレーナーの感触が気持ち悪かった。

「…あははっ。さすがにもう限界みたい…」

分の悪い賭けだったのかもしれない。体がこれ以上は不可能だと冷淡に告げ、私はそれに納得した。

「鳥よ…」

最後の抵抗。広がる空に向けて最後の鳩を飛ばした。

右腕を滑り、輝く鳥は藍色の空へ向けて羽ばたいていく。

「…届け…」

瞬間、私の視界一杯に夜明け前の空が広がった。

上空300メートル。何の隔たりもない、藍色の空。

——ああ…。

それは感動だった。ただ綺麗な空を見つけた事の、素直な感動だった。

二度と見れない空。記憶に残されない空が、視界一杯に広がっていた。

既に飛ばす鳩も無く、私の体は落下を始める。糸の切れた人形のように、手足も何も動か
なかった。

落下の中、私は遠くなっていく空を見つめ続けていた。

「有希っ！」

垂直に落下する私を、時速200キロで水平に落下する多奈が捕まえた。

車に轢かれたかのような強烈な衝撃すら、どこか遠くに感じる。

空中で急ブレーキがかかり、二人は空中で制止する。

その時、体をへし折られそうな位に、多奈の両腕は強く私を抱きしめていた。

「…有希は、馬鹿です！」

多奈の泣き顔を見たのは初めてだった。

顔を上げた多奈と視線が重なる。その目に大粒の涙が溢れ、頬を流れていた。

この瞬間、私は本当に負けたのだと思った。

「…ごめん、多奈。あたし、我儘だからさ…」

「…っく、ひくっ…」

千年谷市上空。太陽は登り始め、藍色の空は少しずつ色を変えていた。

私は、私の事を心配して泣いてくれる友達を優しく抱きしめていた。

「…ひくっ…。ぐすっ…」

鬼ごっこの勝者は、残った競技時間の2分31秒を超えて泣き続けていた。

3.

「多奈、憶えてる？ 一昨日のあたし達、このイチヨウ並木を突っ走ってたんだよ」

勝負の後、たまたま降り立った場所はこの街で一番綺麗なイチヨウの並木道だった。

トラックが一台通過出来るくらいの道は石のタイルが敷き詰められ、その上に無数のイチヨウの葉が覆いかぶさっていた。

周囲には等間隔でイチヨウの木が植えられている。それぞれが夜明け前の光に照らされ、鮮やかな黄色を映していた。

「…綺麗ですね」

「うん。最後の舞台としては、なかなか悪くないと思うよ」

私と多奈は明け始めた空を見上げる。

未だ藍色の雲。冷たい朝の風が吹いて、薄い青の空に黄色の葉が舞った。

「…綺麗ですね」

「うん」

湿度を帯びた強い風が、イチヨウ並木を通り抜けた。

風圧で巻き上げられた黄色の葉が、雪のように周囲に降り注いでいた。

しばらくの間。私と多奈は空を見上げ続けていた。

忘れてしまう光景を、一緒に見上げ続けていた。

朝日は昇り始め、イチヨウの葉の隙間から無数の淡い光の柱が映り始めた。

石と葉の道に、長い影が映る。

黄色と青の幻想的な光景の中で、私と多奈は静かに空を見上げ続けていた。

「…有希」

「うん」

多奈が差し出した右手に朝日が陰影を映す。

私はコートで血を拭い、その手を握り返した。何度も握った手は、冷たい空気の中で唯一

の温もりを与えてくれた。

視線が交差する。

光が差し込み、イチヨウの舞う静寂の世界で、別れの瞬間が近づいていく。

「ごめんなさい、有希。私は良い友達になれませんでした」

多奈の右腕が淡く輝き始めた。同時に、私の中で何かが削られていく感触が走る。

「全くだよ。まさか最後に記憶消されちゃうなんて、思いもしなかったよ。これからもっともっと楽しい事が待ってたかもしれないのにさ」

冗談交じりの口調。笑顔。普段と変わらない言葉。

記憶が、思い出が、少しずつ削られていく。

「…一緒に遊びに行きたかったな。駅前の甘味屋とか。友達も紹介したかったし。色々、これから、色々…」

「…ごめんなさい…」

手を繋いだまま、多奈は顔を伏せた。

一回だけ肩を震わせて、一粒だけ涙を地面に落として、右手を強く握り返した。

僅かな間を置いて、多奈は顔を向けた。その顔にはいつもの淡い微笑が浮かんでいた。

前髪が揺れ、朝日に照らされたその顔は、素直に綺麗だと思った。

「私は、有希の事を忘れませんか」

「ええー。それって物凄く不公平。あたしは忘れちゃうんだよ？」

「そうです。私は卑怯で、正義なんてどこにも持っていないです」

多奈の意地悪な言葉を聞いたのは初めてだったのかもしれない。

その中で、少しずつ記憶が削られていく。多奈と一緒に飛んだ街の名前が思い出せない。

一穂と一緒に走った道路が思い出せない。

「：有希、ありがとうございます。私は、有希に出会えて良かったです」
魂を握られるような、そんな強烈な笑顔だった。

この笑顔とも、右手の暖かさも、あとちよつとで離れ離れになる。

「あたしも、多奈と会えてよかった。この二日間、本当に楽しかった。多奈。そういう笑顔
を、数分後、明日も、一ヶ月後も出るといいよね。」

記憶が消えていく。夕陽を背に、巨大な刀を持った現代の魔女の姿が消えていく。ビル
の16階、渡り廊下から見下ろした夜景が消えていく。

右手の感触だけを便りに、必死に私は消えていく記憶をかき集めている。

「：あたしはあたしの選択を後悔しない。あたしはあたしの信念を今も貫いているもの。
遠野有希は、自分の正義を貫いて、人生に妥協しないで、胸を張って歩いていったから。」

最後の最後まで、何て私は意地っ張りなんだろう。そう思って、思わず頬を緩めた。

私は：遠野有希は、こういう奴なのだ。どうしようもなく馬鹿で、頑固で…。

多奈が私を優しく見つめている。その瞳は明らかに潤んでいた。それでも、ずっと私を見
つめ続けていた。

「：あ、あははは…。思ったより、コレ、結構…キツイね…」

記憶は既に大半が削られていた。

青の光の降った夜の記憶が消える。多奈と出会った理由が思い出せない。

何かがあつたはずだと必死に記憶の糸を辿るも、それらが次々に切断されていく。記憶が消えていく。この胸を強く締め付ける、感情だけが残されていく。忘れたくない大切な思い出が消え、その反動だけが心に残っていく。

「あ……」

私の中で、バイクに乗った暖かい背中的人物が光の中に消えた。名前が思い出せない。一回しか見せなかった笑顔も、背中の中の感触も……もう、思い出せない。

「多奈……」

私に残ったのは、目の前の多奈の記憶だけだった。

伊勢崎多奈。無愛想で強くて、夜空を見上げるのが好きな……がりっ。

頭の中で、爪音が響く。残された最後の記憶を削り取るための爪が、目の前に迫る。本当に失いたくない思い出が削られていく。

「……有希。……さよなら、です……」

泣きそうな表情で多奈は私を見つめ、右手を強く握り返した。

消えていく記憶の中、ただ、「この子は泣かせてはいけない」という意志のベクトルだけが生き残っていた。

「多奈、最後の最後つてのはね、お互い笑顔で別れるんだよ」

目の前にいるはずの多奈の声が思い出せない。さっき見たはずの笑顔が思い出せない。

ただ、最後は笑顔で、相手の名前を呼んで別れたい。
そのベクトルだけが私を動かしていた。
だから、最後は、笑顔で。

「多奈。…ばいばい。また会おうね」

瞬間、最後の記憶が消えた。もう私は、目の前の女の子の名前を思い出せない。
ただ、大切な…大切な人だったような、そんな感触だけが残っていた。
何かを失ったはずなのだが、失ったのが何なのか、それすら分からない。
ただ、感触だけが、失ってしまったのだという感触だけが、残っていた。
この感触だけは失ってはいけないという感情だけが、残っていた。

だから、私は。私を構成する意志に、一つを追記する。

遠野有希行動三大原則、その4。

自分の正義を貫く事。人生に妥協しない事。常に胸を張って歩く事。

そして。

「…ひくっ…えぐっ…」

泣きたい時は、素直に泣く事。今この瞬間の感情を忘れないために、刻むために。

全ての記憶が削り取られ、私の視界は真っ暗になった。

倒れそうになる私を、誰かが優しく抱きとめる。

私の頬に暖かい雫が落ちた。

私の涙ではない、別の誰かの涙を、消えかかる意識の中で感じていた。

イチヨウの並木道。差し込む朝の木漏れ日。冷たい風。

世界が始まる時間の中で、消えかかる意識の最後の瞬間で。

私を暖かく抱きとめた誰かの、優しい声が響いた。

「貴方の沈黙に感謝します」



Last Steps, Sounding.

「…あれ…？」

気づいた時、私はイチヨウ並木の真ん中で立ちすくんでいた。

風も無く、はらはらと落ちる黄色の雨の中に朝日が差し込んでいた。

——何で私、ここにいるんだっけ…？

記憶を辿っていく。幼馴染と電話をして、受験勉強にうんざりして、散歩がてらイチヨウでも見に行こう…そんな事をしようとしていたのを思い出す。

家を出た後から並木道までの記憶がすっぱりと無いが、何故だか不安には思わなかった。
「うわっ…」

自分の格好を見直す。白だったはずのトレーナーが真っ赤に染まっていた。ブーツの中も赤に染まっている。

それが自分の血液だと、何故か瞬間的に理解した。首元に固まった血を爪で削り取る。

「うーん…」

いきなり服が血まみれになっている。

悲鳴を上げてもいいはずの状態なのに、私は何故か冷静だった。

理由は分からない。

ただ、問題ないという感触が漠然と、それでいて確実に残っている。

——家に帰って、シャワーでも浴びよつと……。

夕方に出かけたはずなのに、腕時計は二日後の朝の7時を指していた。

不思議で溢れ返る状態の中、私は私の信念を貫けている事を何故か確信していた。そんな感情だけが、ただ心に刻まれていた。

朝日を浴びながら、イチヨウ並木を歩いていく。落ちたイチヨウの葉を踏む音が響く。一本のイチヨウの木の下。

一人の女の子が、イチヨウの舞い散る原色の青空を見つめていた。

長い黒髪と黒のミディドレスが特徴的な女の子は、私に気づいて視線を送る。瞬間、並木道を強い風が吹き抜けた。

黄色の葉が踊る。青空へと舞い上がったイチヨウは明るい冬の日差しを浴びて、ゆつくりと雪のように降り注いだ。

幻想的な光景の中。女の子は私を見つめ、柔らかな笑顔を作った。

通行人に向けるには優しすぎる、そんな笑顔だった。

「……綺麗ですね」

「うん」

しばらくの間。私とその女の子は空を見上げ続けていた。

これからも憶えていく光景を、一緒に見上げ続けていた。不思議な程に優しい、沈黙の時間。見上げた空は、どこまでも青く、広がった。

11月26日。その朝、たったの数分だけ、雨が降った。

雲ひとつ無い空から、大粒でまばらな雨粒が降り注いでいた。

遙か遠い所から上空の風で流された雨は、冬の眩しい光を反射しながら落ちていく。イチヨウ並木を一人、歩いていく。

空から降り注いだ雨粒が朝日を反射し、街中を輝かせていた。

コンクリートの地面が輝く。水たまりには青空が広がっている。木々の葉に浮かぶ水滴は宝石を散らしたかのように輝いていた。

空を見上げる。雨粒に輝く原色の青空にイチヨウの葉が踊る。

その光景を、私は笑顔で見つめていた。

——今日もきつと、楽しい事があるに違いないっ！

登り始めた太陽の光を背中に受け、少しでも強く足を踏み鳴らした。

そうすれば重力が変わって飛んでいけるんじゃないかと、そんな事を考えていた。

雲のない雨空——天気雨の下で。

私のこれから立ち向かうための足音が、
11月の空に響いた。

fin.





あとがき

「戦ってる？」

平日の午前5時。シャワーを出た後はいつも、脳にその言葉が響きます。

熱いお湯で飛ばしきれなかった眠気のまま、「あー……うー……」と答えになつてない答えを返す日々。

仕事の疲れを栄養剤で誤魔化し、休日もロクに遊びにいくことなく、PCに向かってカリと執筆……といった生活が約半年。無理が祟ったのか、時折寝ながら鼻血を出しつつ。そんなこんなで出来上がったのが、この本です。

2006年の「第十九回 ファンタジア長編小説大賞」に投稿予定だったりします。

読了、お疲れ様でした。

楽しかったでしょうか？ 後にも先にも、気になるのはこの一点です。

さて。初めましてな方もいると思いますので、アバウトに自己紹介します。

名前は吉村麻之。1982年生まれ。

本名ではなく、高校時代に演劇部で演じたキャラクターの名前です。

茨城にて限りなく地味で普通な学生生活を終え、今は横浜でシステムエンジニア二年生やっています。キツイ事でお馴染みの、あの職業です。

また、インターネット上では『でばー』という、炭酸の抜けたラムネのような名前で、ノベルゲームやEJasを作っていたり。興味を持った方は覗いてみてでもいいかもしれません。ピアノを弾く巫女さんが待っているかも。

基本的にそういったデジタルなコンテンツのクリエイターっぽい事をしていた訳ですが、何故にいきなり紙媒体の「小説」というジャンルに踏み込んだのかと言えば、理由は物凄く単純で、自分の作ったノベルゲームの感想に、「文章がプロ並」といった文字を多数見つけ、いい気になっちゃったからです。

「んじゃあ、本当にプロ並か、白黒はつきりさせてやろうじゃないか！」という、よく分からないタンカが根つこの所で切られているようです(笑)

もう一つの理由としては、大きな舞台で挑み戦ってみたかったという所。

かれこれ、10歳の頃にスーファミの『RPGツクール』を触って以来、ずっと『創る』という事ばかりを考え続けていた訳で。数個の作品を作り上げた今、それらが形になり始めてはいます。「ファンです!」と言ってくれる方も結構いたりします。

しかし、だから、もっと。さらに高みを望みたい。

人の欲求は止まる事を知らないのです(笑)
遠野有希も吉村麻之も、人生に妥協しないのです。たぶん。

今は投稿すらしていない訳ですが、既に私は勝利を確信しています。

もしも受賞出来たら、それは大勝利。

落選したら、きつと私は23歳とは思えない程にえぐえぐと泣くでしょう。それはもう、小さい子供のように。しかしながら、その悔しさとか、「負けたままでいられない」という感情が、次の作品への糧になります。

勝っても負けてもプラス。何ともオイシイ図式が広がってしまったものです。

次に、イラストを担当して頂いた今野隼史さんについて。

今野さんといえば、富士見ファンタジア文庫『七人の武器屋』のイラストレーターとしてお馴染みです。そのような方に挿絵をお願いし、それを富士見ファンタジアさんに送りつける……というこのやたら挑戦的な図式。「なかなかに姑息なインパクト狙いだなっ!」というツツコミがきそうですが、これは結末的に出来上がった構図だったりします。

今野さん(ハンドルネームの「辺境紳士」)さんの方が個人的に馴染みやすいのですが(笑)とは数年前から仲良くさせて頂いています。2004年2月29日(細かい)に私のゲーム作品の感想イラストを描いて貰って以来、事あるごとにお世話になっちゃってます。

今もなお、現在進行形でねつとりとファンをさせて貰っています(笑)さてさて。

この「雲のない雨空の下で」の文庫化にあたり、どうしても挿絵として欲しい空があったのです。一つは夜明け前、もう一つは晩秋の夕焼け。

自分の中のイメージが今野さんの画風と激しくマッチしたため、今回の挿絵をお願いしました。「親しいから」という理由がメインではありません。ここら辺に妥協はしていないつもりです。

『七人の武器屋』の挿絵描きの中、かなりハードな状況で描いて頂いた挿絵達。

今、この本を持つ方の想像の中で遠野有希と伊勢崎多奈が跳ね回っていたのなら、これ以上の感謝はありません。

最後に感謝を。

まずはイラストの今野隼史さん。打ち合わせの際、川崎在住の私が川崎を案内して貰うという謎な構図になってしまい、申し訳ありません(笑) 貴方がいなければ、あの空は生まれなかったでしょう。溢れんばかりの特大的感謝。

その他、私と波長の合ってしまった会社の同期共。小学校以来からの腐れ縁共。茨城の田舎に住む両親と妹、そして愛犬。ネット上で「応援してます!」「期待してます!」と、私の背中を力強く押して下さった、ファンの皆様。

そして、この本を手に取り、読み終えた貴方に。

「貴方の声援に感謝します」

このあとがきの続きは、この本が書店に並んだ時に書きます：とか言ってみます。果てしなく僅かな可能性ですが、ゼロじゃない未来で会えたなら。

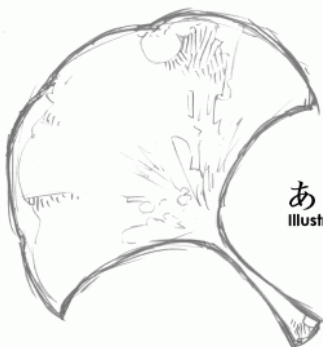
「戦ってる？」

その自問に対し、そろそろイエスを返したいと思います。

それはきっと、物凄く楽しい事なのだから。今はきっと、物凄く幸せなのだから。

2006年、雲のない夏空の下で。

吉村麻之



あ と が き

Illustrator's Postscript

「今回はネット上での知り合いにお願いするのではなく、あくまでも、プロのイラストレーターに依頼するというスタンスです」

そんなメールを貰ってから始まったこの仕事、一通り絵が描けた今振り返ってみると、こちらはその心意気に完全には応えきれなかったかもしれません。やはり自分は、挿絵描きの前に作品世界の一ファンなのです。

前作「星のない空の下で」を夢に見るくらい遊んだ(実話)時は、後に有希さんを挿絵で描かせてもらうことになるとは予想もしなかったなあ。

そんなお願い——「依頼」を受けたときはとても嬉しかったし、楽しかった。改めて、今回の巡り合わせに感謝します。

夏が終わり、イチョウの葉が色づいたらこの素敵な企画をふたたび思い出すことでしょう。

今野隼史 2006.7.6 遠慮のない締切の間で

雲のない雨空の下で

著者 吉村麻之 + 今野隼史

2006. 7. 22 初版発行

2006. 9. 2 再版発行

2006. 12. 18 再々版発行

印刷所 株式会社ポプルス

むきりよくかん。

<http://mukiryokukan.sakura.ne.jp/>

debar@mukiryokukan.sakura.ne.jp

辺境紳士社交場

<http://www2.chokai.ne.jp/~frontier/>

frontier@chokai.ne.jp

本書の無断転用・無断転載を禁止いたします。

©Mayuki Yoshimura + Takashi Konno